

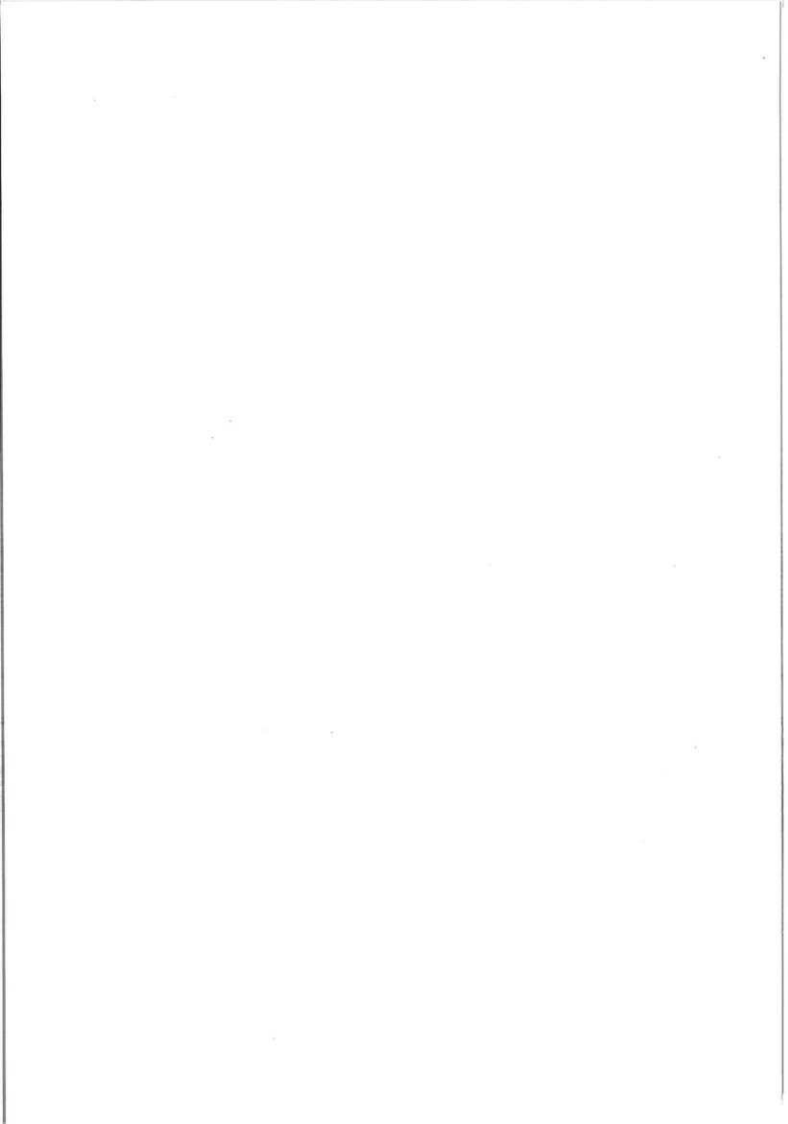
玉名市文化財調査報告 第8集

東 南 大 門 遺 跡

市営住宅南大門団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成12年3月

玉名市教育委員会



序 文

玉名市教育委員会では、玉名市築地において、市営住宅南大門団地建替工事に伴い敷地内に所在する東南大門遺跡の発掘調査を実施いたしました。

今回の調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺構、遺物を検出し、特に弥生時代中期の甕棺墓群と、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺構及び大量の遺物は、当時の玉名地方を検討する上で大変貴重な資料となると考えられます。

この報告書が、文化財保護の推進並びに学術研究の一助となればまことに喜びに堪えません。

最後に、本発掘調査及び報告書作成を実施するにあたり、ご指導、ご協力を賜りました皆様方に対しまして厚くお礼申し上げます

平成12年3月31日

玉名市教育委員会

教育長 三 次 昭 也

例 言

1. 本書は、市営住宅南大門団地建替工事に伴う、玉名市築地地内に所在する東南大門遺跡の発掘調査報告書である。
2. 確認調査、発掘調査は、玉名市教育委員会社会教育課江原浩司が担当し、報告書作成は田中康雄が担当した。
3. 本書掲載の遺構実測図の作成は、(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託し、一部を江原が行った。
4. 遺物の実測図は、田中、末永崇、中尾健照が作成し、一部を(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。製図は遺物を中尾、遺構を中尾、西川さゆり、平本静子、早川イツエが行った。
5. 本書の執筆、編集は田中が行った。
6. 調査時の写真撮影は江原が行った。
7. 出土遺物の整理作業は玉名市教育委員会で行った。
8. 出土遺物は玉名市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 各遺構の記号は次のとおりに標記する。
K：甕棺墓
SK：土坑
SD：溝跡
SC：石棺墓
M：木棺墓
2. 遺構の寸法数字はm単位、遺物の寸法数字はcm単位を原則とする。
3. 遺構図に用いた方位は、すべて真北（国土座標北）である。

目 次

序文	
例言・凡例	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

本 文 目 次

第1章 はじめに	1
I 調査経過・調査組織	1
第2章 地理的・歴史的環境	3
I 地理的環境・歴史的環境	3
第3章 調査	5
I 調査の方法	5
II 遺構・遺物	8
1 弥生時代中期	8
遺構	8
(1) 甕棺墓	8
遺物	21
(1) 甕棺	21
(2) 石製品	35
(3) 鉄製品	42
2 弥生時代後期～古墳時代	43
遺構	43
(1) 石棺墓	43
(2) 木棺墓	43
(3) 大型溝	43
(4) 土坑	43
遺物	48
(1) 土器	48
3 時期不明の遺構	79
第4章 考察	80

挿 図 目 次

Fig. 1	東南大門遺跡位置図	2
2	東南大門遺跡周辺遺跡分布図	4
3	東南大門遺跡遺構配置図(全体)	6
4	東南大門遺跡遺構配置図(調査I区)	7
5	K-01・02・03・04甕棺墓	9
6	K-05・06・07・08・09・10・11甕棺墓	10
7	K-12・13・14・15・16・17甕棺墓	12
8	K-18・19・20・21甕棺墓	13
9	K-22・23・24・25甕棺墓	15
10	K-26・27・28・29・30・31甕棺墓	17
11	K-32・33・34・35・36・37・38甕棺墓	19
12	K-39・40・41・42甕棺墓	20
13	K-01・02・03・04甕棺	22
14	K-05・06・07甕棺	24
15	K-08・09・10・11・12甕棺	25
16	K-13・15・16・17・18甕棺	28
17	K-19・20甕棺	29
18	K-21・22・23甕棺	32
19	K-24・25・26甕棺	33
20	K-27・28・29甕棺	36
21	K-30・31・32・33甕棺	37
22	K-34・35・36甕棺	38
23	K-37・38・39甕棺	39
24	K-40・42甕棺	40
25	石製品	41
26	鉄製品	42
27	M-01・02木棺墓、SC-01石棺墓	44
28	SD-08大型溝	45
29	SD-09大型溝	46
30	SK-35土坑	47
31	土器 1	51
32	土器 2	52

Fig. 33 土器 3	53
34 土器 4	54
35 土器 5	55
36 土器 6	56
37 土器 7	60
38 土器 8	61
39 土器 9	62
40 土器 10	63
41 土器 11	67
42 土器 12	68
43 土器 13	69
44 土器 14	71
45 土器 15	72
46 土器 16	73
47 土器 17	77
48 土器 18	78

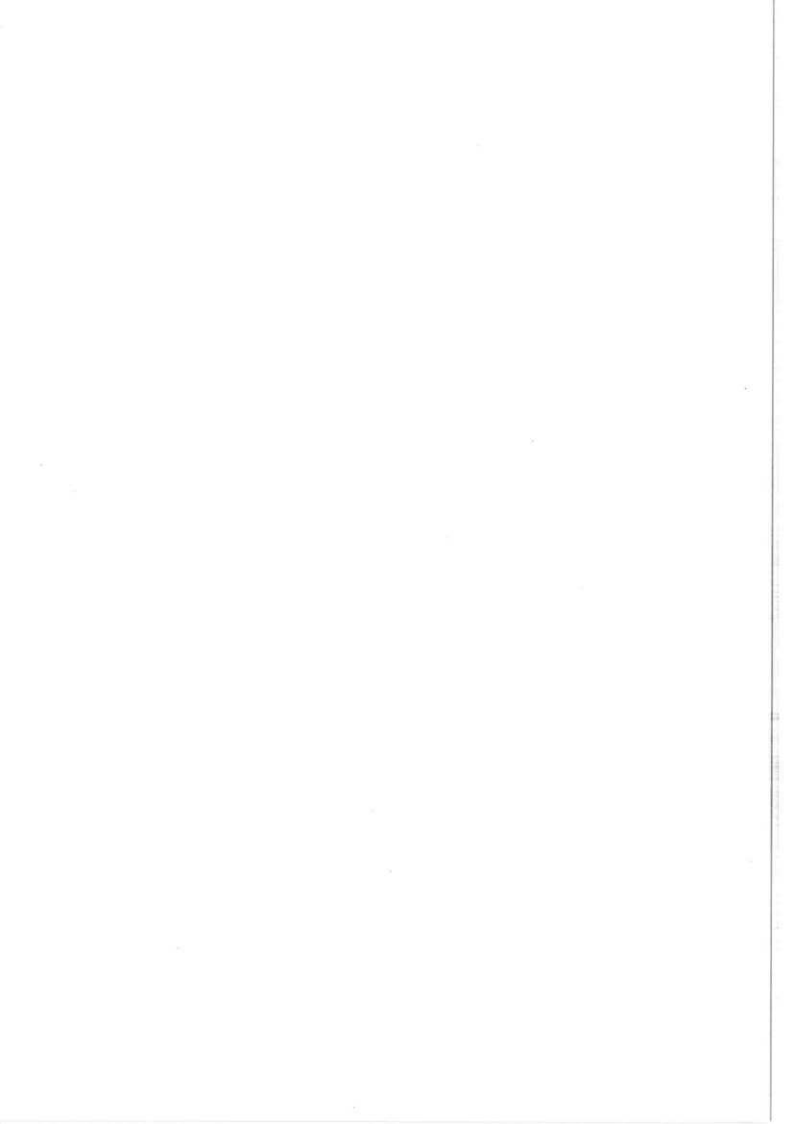
表 目 次

第1表 東南大門遺跡遺物觀察表 (甕棺)	81
第2表 東南大門遺跡遺物觀察表 (石製品)	83
第3表 東南大門遺跡遺物觀察表 (鉄製品)	83
第4表 東南大門遺跡遺物觀察表 (土器)	84

図 版 目 次

PL. 1 K-01・02・03甕棺墓	99
2 K-04・05・06甕棺墓	100
3 K-07・09・10甕棺墓	101
4 K-11・12・13甕棺墓	102
5 K-14・15・16甕棺墓	103
6 K-17・19・21甕棺墓	104
7 K-22・23、24、25・26甕棺墓	105
8 K-27・28・29甕棺墓	106
9 K-30甕棺墓・K-30甕棺墓副葬品出土状況・K-31甕棺墓	107
10 K-32・34・36甕棺墓	108

P L. 11	K-37、40甕棺墓・K-37副葬品出土狀況・K-38甕棺墓	109
12	K-39、40、41甕棺墓	110
13	SD-08大型溝内遺物出土狀況1	111
14	SD-08大型溝内遺物出土狀況2	112
15	SD-08大型溝内遺物出土狀況3	113
16	SD-08大型溝完掘狀況	114
17	SD-09大型溝内遺物出土狀況1	115
18	SD-09大型溝内遺物出土狀況2	116
19	SD-09大型溝内遺物出土狀況3	117
20	SD-09大型溝内遺物出土狀況4	118
21	SD-09大型溝内遺物出土狀況5	119
22	SD-09大型溝内遺物出土狀況6	120
23	大型溝内遺物出土狀況	121
24	SK-35土坑内遺物出土狀況・SK-35土坑完掘狀況	122
25	SC-O1石棺墓檢出狀況・M-O2木棺墓檢出狀況・発掘調査作業風景	123



第1章 はじめに

I 調査経過

玉名市においては、平成3年度に市営住宅の老朽化に伴う建替基本計画が策定され、それに伴い熊本県玉名市築地2110番地に所在する市営住宅南大門団地についても建替が行われることとなった。

しかし、当地は東南大門遺跡の範囲内であることから、平成5年度に玉名市役所監理課と協議を行い、建物解体後埋蔵文化財の確認調査を行うこととなった。その後平成6年4月25・26日に造成対象となる4,948㎡について確認調査を行い、うち2,800㎡について本格的な発掘調査が必要であるとの結論に達した。この結果に基づき、平成6年10月11日から平成7年3月10日にかけて発掘調査を行った。

II 調査組織

事業主体 玉名市役所監理課

調査主体 玉名市教育委員会

調査責任者 教育長 生森基哉（調査時）

〃 三次昭也（整理・報告書作成時）

調査総括 社会教育課長 村上好一（調査時）

〃 隈部了裕（整理・報告書作成時）

〃 西川待義（〃）

調査担当 主事 江原浩司（確認調査・本調査・整理担当）

技師 田中康雄（整理・報告書作成担当）

現場作業員

木村剛、清田耕一、草野貴美代、楠田一記、五野富美子、坂本政春、末永崇、高岡博子、高田ミサオ、田添良子、田口徳松、谷口小夜子、谷口義孝、築森カス子、西由紀子、西浦道男、西川美智子、西口辰夫、西依元三郎、平島千代子、丸山静代、森下等、山西二夫 敬称略
整理作業員

堀内貴久子、坂崎郷子、五野富美子、新居みどり、山口聡絵、田中晶子、西川きゆり、平野輝代、平本静子、早川イツエ、中川藍、寺本要、近江左江 敬称略

調査協力者

三島格、田邊哲夫、小田富士雄、甲元眞之、柳沢一男、西健一郎、村上恭通、蒲原宏行、杉井 健、松本健郎、高木正文、高谷和生、勢田廣行、高木恭二、中原幹彦、中村幸史郎、坂本重義、益永浩仁、荒木純治、宮崎敬士、竹田宏司、岩谷史記、敬称略

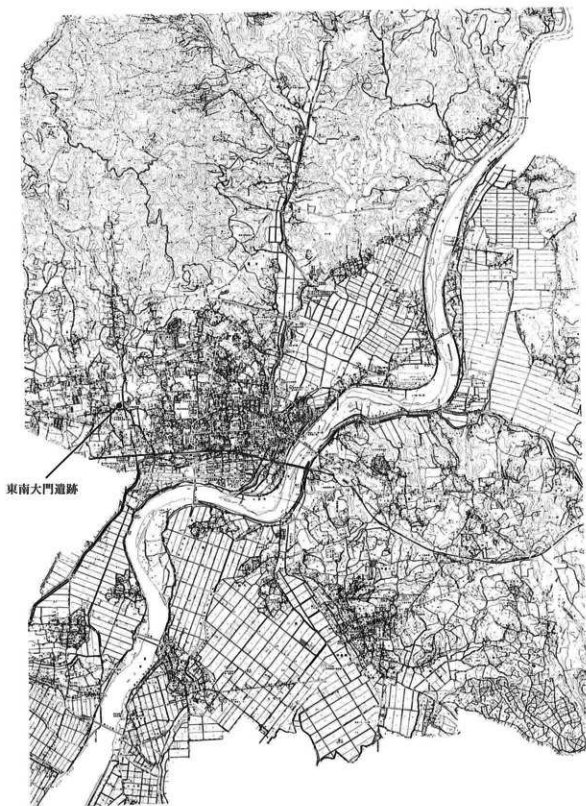


Fig. 1 東南大門遺跡位置図

S=1/50,000

第2章 地理的・歴史的環境

I 地理的環境・歴史的環境

東南大門遺跡が所在する玉名市は、熊本県の北部、菊池川の下流域に位置する。市の中央部を菊池川が南に向かって貫流し、有明海に注いでいる。菊池川の周辺部には玉名平野が拡がり、その北部は筒ヶ岳（標高501m）を主峰とする小岱山地、丘陵地、及びこれに続く台地・段丘と接している。また、平野の東部では木葉川を境として北側で国見山（標高383m、鹿本郡鹿央町）を主峰とする国見山地の丘陵及びその南端部に位置する木葉山（標高286m）と接し、南側で金峰火山群の熊野岳（二ノ岳 685m）、三ノ岳（681m）を主峰とする金峰山地とこれに続く丘陵性台地に接している。

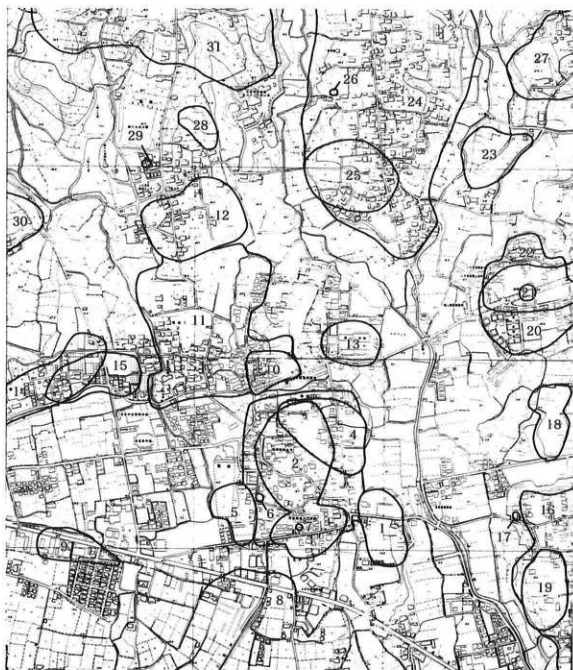
東南大門遺跡は、玉名市の西部、小岱山の南東部を源流とする境川の右岸に面した標高15～16mの段丘突出部の南東端部に位置する。段丘の東側は境川の開析による谷底平野が拡がり、段丘との比高差は約4m程度である。

当段丘上には、弥生時代から中世にかけての遺跡が密集している。東南大門遺跡の北西側に所在する南大門遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡、土坑が確認されており、当段丘上に弥生時代の集落が所在していたことが窺われ、その他に箱式石棺、竪穴式石室墳、土坑群、製鉄遺構が確認されている。また現況で部分的に土塁状遺構が残存しており、蓮華院誕生寺境内で掘建柱建物跡が確認されていることから、当地が鎌倉時代中期に建立された浄光寺の寺域であると考えられている。

段丘東側、境川兩岸の谷底平野を挟んだ対岸の台地上には、平嶋遺跡、高岡原遺跡等の弥生時代後期の集落跡が確認されており、また古墳時代の高岡古墳、中世の高岡城跡が遺跡地図に掲載されている。北側は小岱山麓から南に拡がる丘陵からの緩斜面地で、弥生時代の甕棺群が確認されている古閑遺跡、弥生時代の遺物の散布がみられる築地東遺跡、古墳時代の土師器、須恵器が確認されている八段遺跡、縄文時代から中世にかけての遺物が確認されている狐ん路遺跡、平畑遺跡が所在する。

参考文献

- 「玉名市史 資料編3 自然・民俗」 玉名市史編纂委員会 1993
玉名市歴史資料集成 第6集 「菊池川下流域遺跡詳細分布調査事業報告書（1）」
玉名市教育委員会 1989
田添夏喜「浄光寺跡寺域確認調査」4、浄光寺跡周辺の遺跡各説 玉名市教育委員会 1989



- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|-----------|
| 1 東南大門遺跡 | 10 築地東遺跡 | 19 田島遺跡 | 28 四十九遺跡 |
| 2 南大門遺跡 | 11 八段遺跡 | 20 高岡原遺跡 | 29 四十九古墳 |
| 3 浄光寺蓮華院境内遺跡 | 12 築地那木野遺跡 | 21 高岡古墳 | 30 西の山古墳群 |
| 4 蓮華遺跡 | 13 古閑遺跡 | 22 高岡城跡 | 31 西田遺跡 |
| 5 平町遺跡 | 14 狐ん路遺跡 | 23 山田中島遺跡 | |
| 6 小路遺跡 | 15 平畑遺跡 | 24 山田神社門前遺跡 | |
| 7 南大門竈跡 | 16 春出遺跡 | 25 五郎丸遺跡 | |
| 8 築地市場遺跡 | 17 春日出山伏塚 | 26 山田下馬場古墳 | |
| 9 今見堂遺跡 | 18 ホカンヤカタ遺跡 | 27 山田松尾平遺跡 | |

Fig. 2 東南大門遺跡周辺遺跡分布図

S=1/10,000

第3章 調 査

I 確認調査

平成6年4月25日から26日にかけて、確認調査を行った。造成予定地に22ヶ所の試掘坑を設定し、表土を重機で除去し、それ以下を重機および人力で掘り下げた。その結果13ヶ所の試掘坑で遺構遺物が検出された。

以上の結果から、埋蔵文化財が確認された範囲では、工事に先だって発掘調査が必要との判断がなされた。

II 調査の方法

確認調査の結果から、発掘調査が必要であると判断された範囲について、調査区を2ヶ所設定し、敷地中央部から西側を調査Ⅰ区、東側を調査Ⅱ区とした。

調査区内は、旧市営住宅建設の際に大きく地形の改変を受けており、遺物包含層は残存していない。確認した層位は以下のとおりである。

I 層 表土層

Ⅱ層 黒褐色土層 強く引き締まっており、土器細片を含む。住宅建設の際の整地層と思われる。

Ⅲ層 褐灰色土層 やや締まり、あまり粘性を有しない。上面で遺構を検出。

このうち調査では表土のみを重機で掘削した。グリッドの設定は、国土座標に基づき10m単位
のグリッドを設定した。

表土剥ぎ後、Ⅱ層上面より人力による掘削を行った。当初Ⅱ層を遺物包含層と考えていたようであるが、遺物が土器細片のみであり、土が非常に強く引き締まっていることから、宅地造成の際の整地層であると考えられる。Ⅱ層除去後、Ⅲ層上面で遺構検出を行った。調査区全体がⅢ層上面まで削平を受けていることから、時期に関係なく遺構はすべてⅢ層上面で確認された。

遺構の掘り下げ後、甕棺墓は1/10スケール、その他の遺構は1/20スケールで実測を行った。調査時の写真撮影については、35mmのリバーサルおよびモノクロフィルムにより撮影を行った。

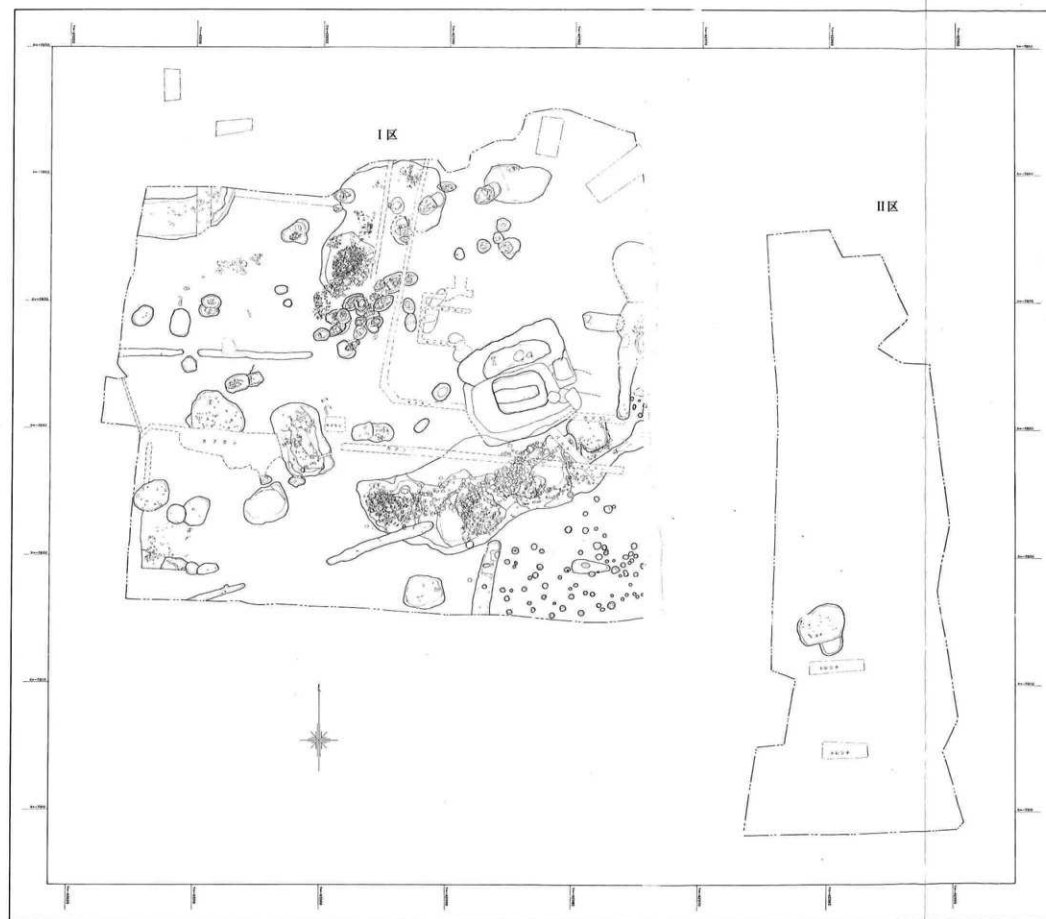


Fig. 3 東南大門遺跡遺構配置図 (全体)

S=1/300



Fig. 4 調査I区遺構配置図

S=1/150



II 遺構・遺物

I 弥生時代中期

遺構

(1) 甕棺墓

この時期の遺構は、42基の甕棺墓のみである。調査区の中央部から北側にかけて分布しているが、中央部やや北側に19基が集中しており、それを取り囲むように2~5基程度のまとまりが7箇所で見られる。

それぞれの集中部では、各遺構が複雑に切り合っており、後世の遺構により部分的に破壊されているものもある。また従来所在していた市営住宅建設の際に大部分の墓壇及び甕棺が削平を受けている状況である。

甕棺の構造としては、大部分が合口棺であるが、単棺も数例みられ、単棺については大形棺及び壺棺である。しかし、削平の影響を受けていることから、合口であった可能性も否定できない。

詳しい内容については、以下遺構番号に従って示す。

K-01 甕棺墓 (Fig 5)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壇の形状は上半部が削平を受けているため不明である。墓壇残存部の形状は楕円形を呈し、長軸1.19m、短軸1.0m、深さ0.77mを測る。鉢(上)と甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-53°-W、埋設角度は28°である。

K-02 甕棺墓 (Fig 5)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壇の形状は大部分が削平を受けているため不明である。墓壇残存部で長軸1.0m、短軸1.03m、深さ0.61mを測る。鉢(上)と甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-76°-E、埋設角度は20°である。

K-03 甕棺墓 (Fig 5)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壇の上半部及び上棺の底部が多少削平を受けている。墓壇残存部から、平面形状は円形を呈するものと思われ、長軸1.53m、短軸1.49m、深さ0.75mを測る。甕(上)と甕(下)による合口棺で主軸方位はN-123°-W、埋設角度は22°である。

K-04 甕棺墓 (Fig 5)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壇及び上・下棺の大部分が削平を受けている。K-06、27、28甕棺墓の墓壇を切っており、これらより新しいものと思われる。墓壇残存部から平面形状は円形を呈するものと思われ、長軸1.16m、短軸1.16m、深さ0.43mを測る。上棺が鉢の合口棺であるが、下棺は残存状況が悪く器種は不明である。主軸方位はN-4°-W、埋設角度は不明である。

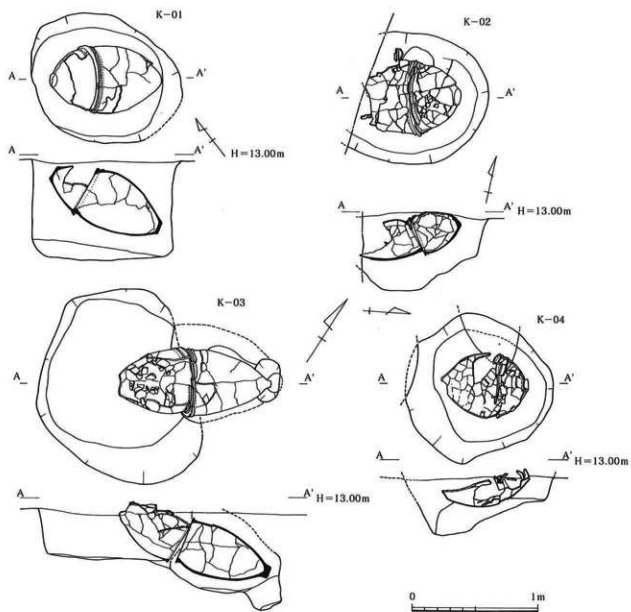


Fig. 5 K-01·02·03·04 甕棺墓

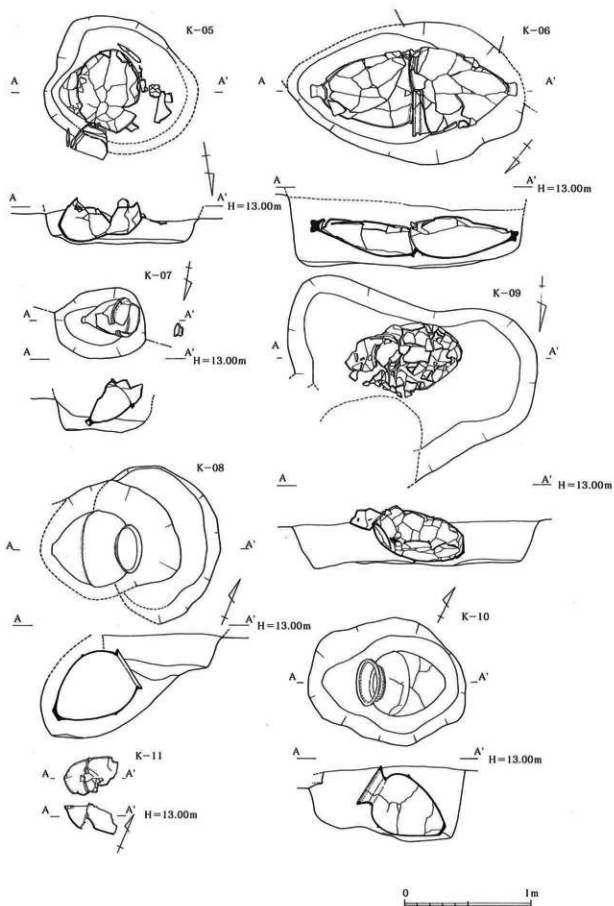


Fig. 6 K-05·06·07·08·09·10·11 甕棺墓

K-05 甕棺墓 (Fig 6)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙及び上・下棺の大部分が削平を受けている。K-06、37 甕棺墓の墓壙を切っており、これらより新しいものと思われる。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸 1.23 m、短軸 1.06 m、深さ 0.22 m を測る。鉢 (上) と壺 (下) による合口棺であるが、下棺は、口縁部から肩部にかけて意図的に破壊してあるものと思われる。また、墓壙内及び墓壙際より鉄剣が 2 点出土しているが、削平が激しく、現位置を保っているかは不明である。主軸方位は $N-81^{\circ}-W$ 、埋設角度は不明である。

K-06 甕棺墓 (Fig 6)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙上半部が K-04、05 甕棺墓の墓壙により切られていることから両者より古いと思われる。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸 1.89 m、短軸 1.12 m、深さ 0.56 m を測る。甕 (上) と甕 (下) による合口棺で、主軸方向は $N-129^{\circ}-W$ 、埋設角度は 19° である。

K-07 甕棺墓 (Fig 6)

調査区北側に位置する。墓壙上半部及び上棺の大部分が削平を受けている。墓壙残存部の形状は、楕円形を呈し、長軸 0.71 m、短軸 0.53 m、深さ 2.7 m を測る。甕 (上) と甕 (下) による合口棺で、主軸方位は $N-81^{\circ}-E$ 、埋設角度は 41° である。

K-08 甕棺墓 (Fig 6)

調査区北側やや西よりに位置する。墓壙上半部が削平を受けている。K-09 甕棺墓の墓壙を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は、楕円形を呈し、長軸 1.24 m、短軸 0.96 m、深さ 0.82 m を測る。甕 1 基が据えられているが、口縁部周辺に土器細片が多数確認されており、合口棺であった可能性も考えられる。主軸方位は $N-68^{\circ}-E$ 、埋設角度は 33° である。甕館内より一部人骨片が確認されたが、残存状況が悪く部位は特定できなかった。

K-09 甕棺墓 (Fig 6)

調査区北側やや西よりに位置する。墓壙上半部及び上棺の大部分が削平を受けており、下棺もその影響を受けている。K-08 甕棺墓の墓壙に切られておりこれより古いと思われる。墓壙残存部の形状は、隅丸の長方形を呈し、長軸 1.98 m、短軸 1.18 m、深さ 0.32 m を測る。甕 (上) と甕 (下) による合口棺で、主軸方位は $N-87^{\circ}-E$ 、埋設角度は不明である。

K-10 甕棺墓 (Fig 6)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙上部が多少削平されているものと思われる。K-28 甕棺墓の墓壙を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙形状は楕円形を呈し、長軸 1.25 m、短軸 1.0 m、深さ 0.59 m を測る。その残存状況から壺による単棺と思われる。主軸方位は $N-116^{\circ}-W$ 、埋設角度は 32° である。

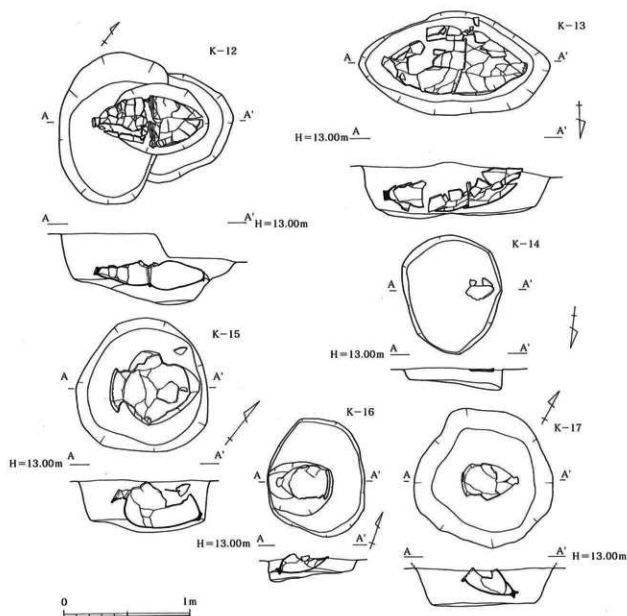


Fig. 7 K-12・13・14・15・16・17甕棺墓

K-11 甕棺墓 (Fig 6)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。削平が激しく墓壇は確認できなかった。また本体についても、上、下棺の一部のみしか確認されていない。残存状況から合口棺と思われる。

K-12 甕棺墓 (Fig 7)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。K-40 甕棺墓の墓壇を切っており、これより新しいと思われる。墓壇形状は不定型な楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.95m、深さ0.54mを測る。甕(上)と甕(下)による合口棺で、主軸方位は $N-126^{\circ}-W$ 、埋設角度は 3° である。

K-13 甕棺墓 (Fig 7)

調査区北側際やや東よりに位置する。墓壇及び甕棺上半部が削平を受けている。墓壇残存部の形状は楕円形を呈し、長軸1.53m、短軸0.8m、深さ0.41mを測る。甕(上)と甕(下)による合口棺で、主軸方位は $N-88^{\circ}-W$ 、埋設角度は 5° である。

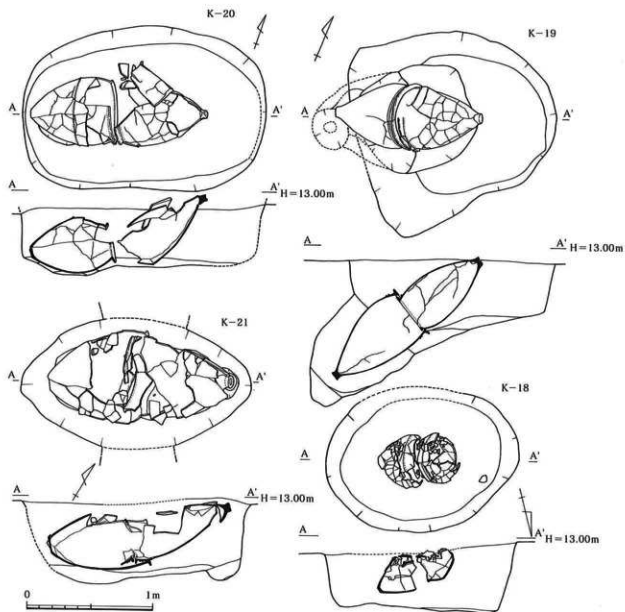


Fig. 8 K-18・19・20・21甕棺墓

K-14 甕棺墓 (Fig 7)

調査区北側やや東よりに位置する。墓壇及び棺の大部分が削平を受けている。墓壇残存部の形状は円形を呈し、長軸0.93m、短軸0.8m、深さ0.16mを測る。埋設形態及び棺の器種は不明である。

K-15 甕棺墓 (Fig 7)

調査区北側やや東よりに位置する。墓壇及び甕棺の上半部が削平を受けている。墓壇残存部の形状は円形を呈し、長軸1.06m、短軸1.04m、深さ0.4mを測る。上半部を欠失した壺1基が据えられているが、遺構の削平状況から埋設形態は不明である。主軸方向は $N-129^{\circ}-W$ 、埋設角度は 26° である。

K-16甕棺墓 (Fig 7)

調査区北側やや東よりに位置する。墓壙及び棺の大部分が削平を受けている。K-19甕棺墓の墓壙を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸0.93m、短軸0.87m、深さ0.17mを測る。上半部を欠失した小形甕1基が据えられているが、遺構の削平状況から埋設形態は不明である。主軸方向はN-71°-E、埋設角度は28°である。

K-17甕棺墓 (Fig 7)

調査区北側やや東よりに位置する。墓壙及び棺の大部分が削平を受けている。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸1.12m、短軸1.06m、深さ0.28mを測る。上半部を欠失した小形甕1基が据えられているが、遺構の削平状況から埋設形態は不明である。主軸方向はN-119°-W、埋設角度は32°である。

K-18甕棺墓 (Fig 8)

調査区西側やや北よりに位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。K-31甕棺墓の墓壙を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸1.53m、短軸1.14m、深さ0.5mを測る。小形の甕(上)と口縁部を意図的に打ち欠いた甕もしくは壺(下)による合口棺である。主軸方向はN-75°-W、埋設角度は26°である。

K-19甕棺墓 (Fig 8)

調査区北側やや東よりに位置する。墓壙の上部を多少削平されている。墓壙残存部の形状は、隅丸方形ぎみの円形を呈し、その西壁からさらに横穴を掘り込んでいる。長軸1.65m、短軸1.43m、深さ1.14mを測る。甕(上)と甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-68°-E、埋設角度は39°である。

K-20甕棺墓 (Fig 8)

調査区西側中央部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。K-30甕棺墓の墓壙を切っており、これより新しい。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸1.96m、短軸1.28m、深さ0.53mを測る。甕(上)と甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-71°-E、埋設角度は17°である。

K-21甕棺墓 (Fig 8)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。K-38甕棺墓の墓壙を切っており、これより新しい。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸1.85m、短軸0.92m、深さ0.61mを測る。甕(上)と甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-60°-E、埋設角度は22°である。

K-22甕棺墓 (Fig 9)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の東側及び上半部、棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸1.7m、短軸1.41m、深さ0.86mを測る。

甕(上)と甕(下)による合口棺で、主軸方向はN-57°-E、埋設角度は23°である。

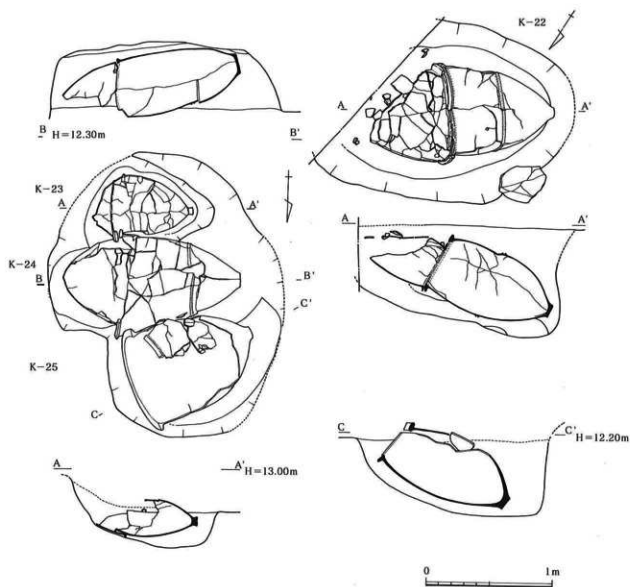


Fig. 9 K-22・23・24・25甕棺墓

K-23・24・25甕棺墓 (Fig 9)

調査区北側中央部に位置する。K-23・24・25が密接して所在するが、墓壙及び棺上半部が削平を受けているため、切り合いが確認できず、同一墓壙内に所在するような状況となっている。このため、三者の新旧関係は不明である。墓壙残存部の形状は不定型な楕円形を呈し、長軸2.23m、短軸1.85m、深さ0.58mを測る。

K-23甕棺墓は、鉢（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位は $N-89^{\circ}-E$ 、埋設角度は 3° である。

K-24甕棺墓は、口縁部を打ち欠いた甕もしくは壺（上）と大形甕による合口棺である。主軸方向は $N-89^{\circ}-E$ 、埋設角度は 13° である。

K-25甕棺墓は、大形甕1基が据えられているが、削平の状況から埋設形態は不明である。主軸方位は $N-59^{\circ}-E$ 、埋設角度は 29° である。

K-26 甕棺墓 (Fig 10)

調査区北側中央部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。現況で長軸2.21m、短軸1.18m、深さ0.68mの不定型な隅丸方形の形状を呈するが、墓壙残存部の状況から、円形の墓壙西壁から横穴を掘り込んだ形状であろうと思われる。斜めに掘り込まれた横穴部と思われる部分に大形甕1基が据えられているが、遺構の削平状況から単棺であるかは不明である。主軸方位はN-51°-E、埋設角度は27°である。

K-27 甕棺墓 (Fig 10)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の上半部が削平を受けている。また、K-28 甕棺墓の墓壙を切っているためこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は、楕円形を呈し、長軸1.61m、短軸0.95m、深さ0.49mを測る。小形甕(上)と中形甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-105°-W、埋設角度は11°である。

K-28 甕棺墓 (Fig 10)

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の上半部が削平を受けている。またK-04・27の墓壙に切られており、これらより古いと思われる。墓壙の形状は、残存状況から楕円形を呈するものと思われる。残存部で長軸2.18mを測る。口縁部を打ち欠いた甕もしくは壺(上)と大形甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-53°-E、埋設角度は7°である。甕棺内より一部人骨片が確認されたが、残存状況が悪く部位は特定できなかった。

K-29 甕棺墓 (Fig 10)

調査区北側中央部に位置する。SD-09により墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は、楕円形を呈し、長軸1.24m、短軸1.15m、深さ0.75mを測る。甕1基が据えられているが、遺構の削平状況から単棺であるかは不明である。主軸方位はN-68°-E、埋設角度は49°である。

K-30 甕棺墓 (Fig 10)

調査区西側中央部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けており、墓壙西側をK-20 甕棺墓により切られている。墓壙残存部の形状は隅丸方形を呈し、短軸1.03m、深さ0.55mを測る。大形甕1基がほぼ水平に据えられているが、遺構の削平状況から単棺であるかは不明である。

主軸方位はN-66°-Eである。棺内より磨製石剣3点及び磨製石剣の先端部2点が出土している。

K-31 甕棺墓 (Fig 10)

調査区西側やや北よりに位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。また、墓壙北側をK-18 甕棺墓に切られており、これより古いと思われる。墓壙残存部の形状は不定型な楕円形を呈し、長軸1.56m、短軸1.14m、深さ0.73mを測る。口縁部を意図的に打ち欠いた甕もしくは壺(上)と口縁部の大部分を意図的に打ち欠いた甕(下)による合口棺である。主軸方位はN-93°-E、埋設角度は51°である。

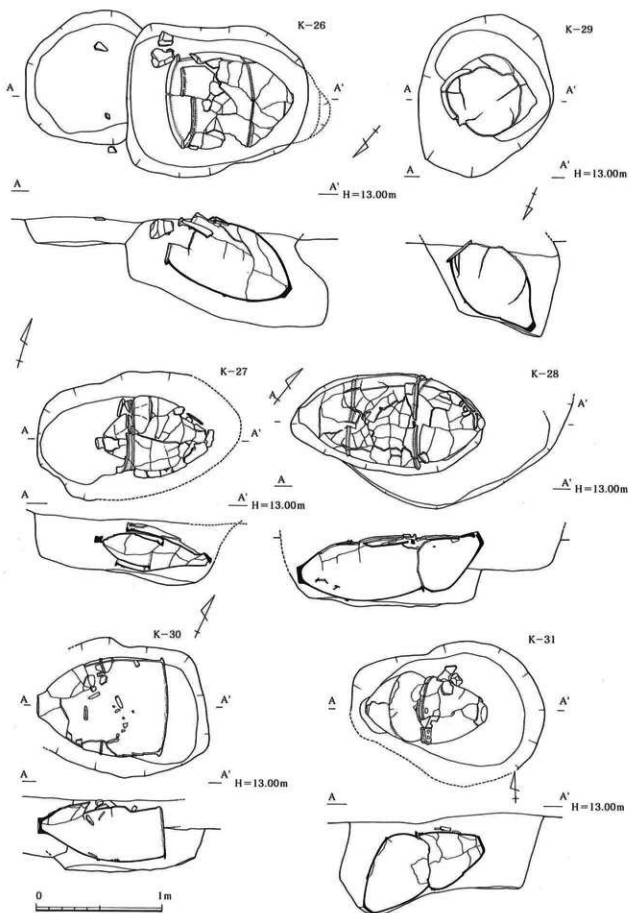


Fig. 10 K-26·27·28·29·30·31 甕棺墓

K-32 甕棺墓 (Fig 11)

調査区北側際に位置する。SD-O9により墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸1.67m、短軸1.15m、深さ0.7mを測る。中形甕1基が据えられているが、遺構の削平状況から単棺であるかは不明である。主軸方位はN-93°-E、埋設角度は51°である。

K-33 甕棺墓 (Fig 11)

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。墓壙及び棺の大部分が削平を受けているため、墓壙の形状、規模及び棺の埋設形態、器種は不明である。主軸方位、埋設角度も不明である。

K-34 甕棺墓 (Fig 11)

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。K-22 甕棺墓の墓壙の一部切っており、これより新しいと思われる。墓壙の形状は楕円形を呈し、長軸1.0m、短軸0.68m、深さ0.51mを測る。小形甕(上)と小形甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-54°-E、埋設角度は7°である。

K-35 甕棺墓 (Fig 11)

調査区の北東部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸2.18m、短軸1.3m、深さ0.77mを測る。口縁部を意図的に打ち欠いた甕もしくは壺(上)と大形甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-44°-E、埋設角度は32°である。

K-36 甕棺墓 (Fig 11)

調査区の北東部に位置する。墓壙の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸0.98m、短軸0.6m、深さ0.31mを測る。ほぼ水平に据えられた小形甕(上)と小形甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-112°-Wである。

K-37 甕棺墓 (Fig 11)

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。K-O5、21 甕棺墓により墓壙が切られており、これらより古いと思われる。またK-40 甕棺墓とも切り合っているが、新旧関係は不明である。

墓壙の残存状況から形状は楕円形を呈するものと思われ、長軸1.95m、短軸1.09m、深さ0.74mを測る。ほぼ水平に据えられた中形甕(上)と中形甕(下)による合口棺で、主軸方位はN-105°-Wである。甕館内より磨製石剣1点が出土している。

K-38 甕棺墓 (Fig 11)

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。K-39 甕棺墓により墓壙が切られており、またK-40 甕棺墓を切っている。このことから、K-39 甕棺墓より古く、K-40 甕棺墓より新しいと思われる。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸0.89m、短軸0.82m、深さ0.41mを測る。小形甕(下)と上甕の一部が残存している。主軸方位はN-114°-W、埋設角度は34°である。

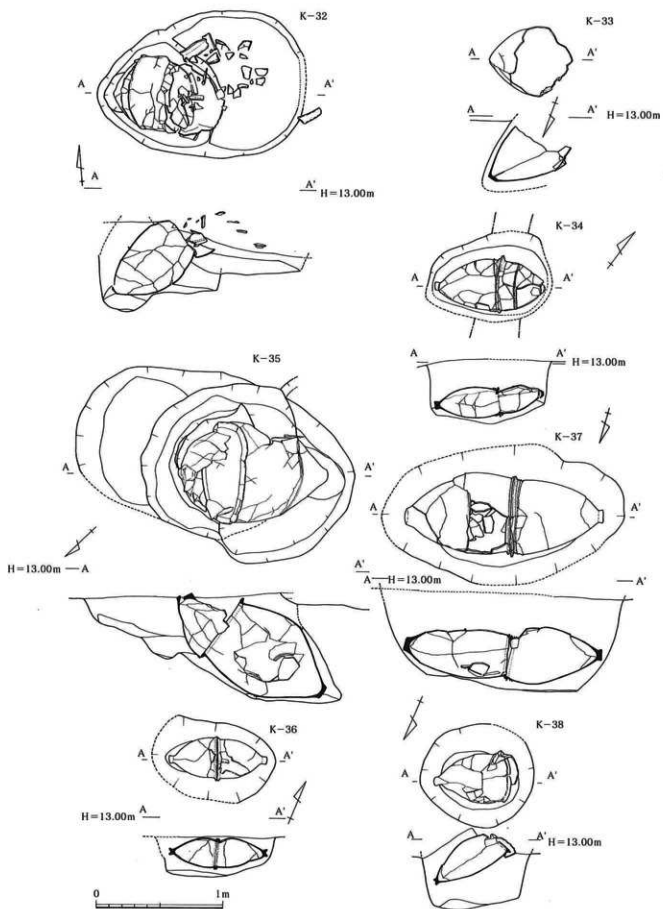


Fig. 11 K-32·33·34·35·36·37·38 甕棺墓

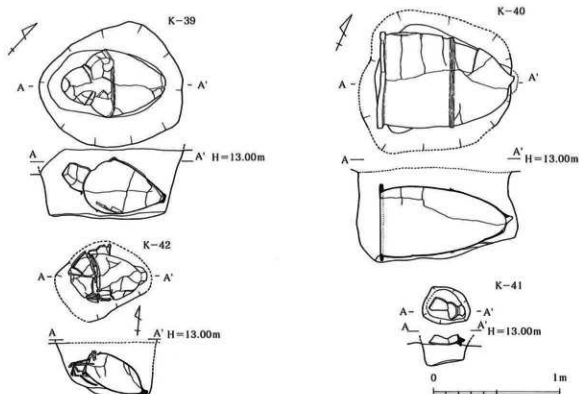


Fig. 12 K-39・40・41・42甕棺墓

K-39甕棺墓 (Fig 12)

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。墓壙上部が削平を受けている。また、K-38甕棺墓を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸1.15m、短軸0.93m、深さ0.55mを測る。小形鉢（上）と意図的に頸部を打ち欠いた壺（下）による合口棺で、主軸方位はN-132°-W、埋設角度は13°である。

K-40甕棺墓 (Fig 12)

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。K-12・21・38甕棺墓により墓壙が切られており、これらより古いと思われる。また、K-37甕棺墓とも切り合っているが新旧関係は不明である。墓壙残存部の状況から形状は隅丸方形を呈するものと思われ、長軸1.22m、短軸1.05m、深さ0.72mを測る。大形甕1基がほぼ水平に据えられており、単棺と思われる。主軸方位はN-114°-Wである。

K-41甕棺墓 (Fig 12)

調査区北側中央部に位置する。SD-09により墓壙及び棺の大部分が削平を受けているが、一部残存している墓壙がK-29甕棺墓を切っており、これより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸0.38m、短軸0.28m、深さ0.17mを測る。小形甕の底部が一部残存するのみであるため、埋設形態、主軸方位、埋設角度は不明である。

K-42甕棺墓 (Fig 12)

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は不定型な楕円形を呈し、長軸0.78m、短軸0.56m、深さ0.45mを測る。鉢（上）と小形甕（下）による合口棺で、主軸方位はN-95°-W、埋設角度は31°である。

遺物

遺物包含層が消失しているため、弥生時代中期の遺物は、甕棺墓の棺として用いられた甕、壺、鉢、及び甕棺墓内の副葬品のみである。

(1) 甕棺

K-O1 甕棺 (上鉢・下甕 Fig 13-1・2)

上棺は鉢形土器で、平底の底部から口縁に向かって緩やかに内湾しながら開く胴部を持つ。口縁はやや内傾し、断面形状は丸みを帯びた三角形を呈する。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付し、一部に刻目を有する。調整は摩耗により不明である。

下棺は中形の甕形土器である。底部形状は欠損のため不明である。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開く。胴部上位に最大径を有し、そこから口縁に向かってややすばまる。台形状の口縁はやや内傾し、内側にわずかに張り出す。口唇部には刻目を施す。また口縁直下に断面三角形の突帯を2条貼付し、これらにも刻目を施す。外面はハケ目の後ナデ、内面はハケ目による調整が施されており、内外面とも部分的に煤が付着している。

K-O2 甕棺 (上鉢・下甕 Fig 13-3・4)

上棺は鉢形土器で、底部から口縁に向かって緩やかに内湾しながら開く胴部を持つ。口縁は上面がややくぼみ、内側へ多少張り出し、口唇部は丸みを帯びる。口縁直下には断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともハケ目による調整が施されている。

下棺は中形の甕形土器で、胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部は上位に最大径を持ち、そこから口縁に向かってややすばまる。口縁は台形状を呈し、上面がややくぼみ、内側へ張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は摩耗により不明である。

K-O3 甕棺 (上甕・下甕 Fig 13-5・6)

上棺は中形の甕形土器で、胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部は上位に最大径を持ち、そこから口縁に向かってややすばまる。口縁は断面三角形で内傾し内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を2条貼付する。内面に一部ハケ目が残存しているが、外面は摩耗が激しく不明である。

下棺は中形の甕形土器である。底部は上げ底ぎみでやや厚みがあり裾がわずかに開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってすばまる。

口縁は上面がややくぼんだ逆し字状で、内傾し内側に多少張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ目の後一部ナデ調整を施すが、外面は摩耗により不明である。また内外面とも一部煤が付着している。

K-O4 甕棺 (上鉢・下甕 Fig 13-7・8)

上棺は鉢形土器で、平底の底部から口縁に向かって緩やかに内湾しながら開く胴部を持つ。台形状の口縁は多少内傾し、部分的に上面がわずかにくぼむ。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は、胴部中位から口縁にかけて欠損している。平底の底部を持ち、そこから直線的に開く。調整は内外面とも摩耗により不明である。

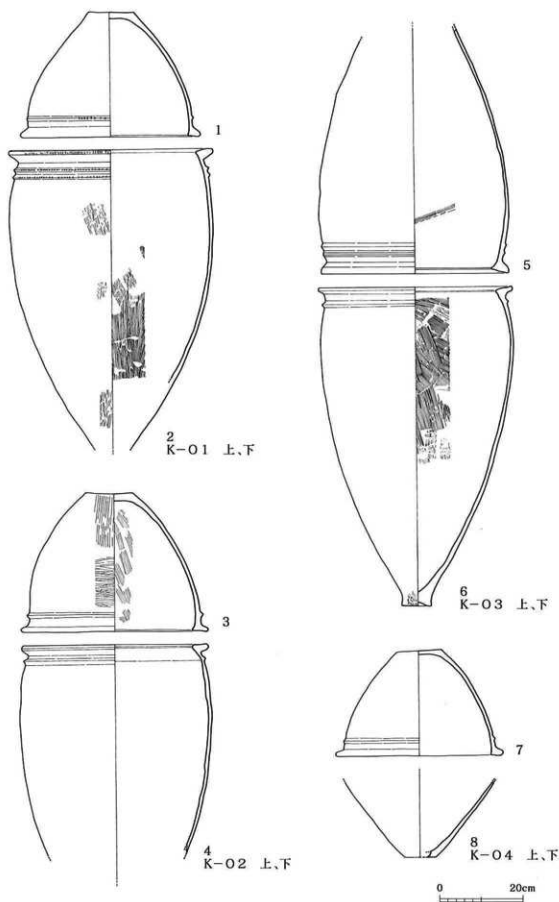


Fig. 13 K-01·02·03·04甕棺

K-05 甕棺 (上鉢・下甕 Fig 14-9・10)

上棺は鉢形土器で、平底の底部から口縁に向かって、緩やかに内湾しながら開く胴部を持つ。口縁は上面がやくぼみ、口唇部は丸みを帯び、内側に多少張り出す。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は胴部上位から口縁にかけて欠損しているため器種は不明である。平底の底部から直線的に開き、胴部上位でもっとも張り出し、そこから口縁に向かって丸みを帯びながらすばまる。胴部最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともナデ調整が施されている。

K-06 甕棺 (上甕・下甕 Fig 14-11・12)

上棺は中形の甕形土器である。底部は上げ底ぎみで厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位の最大径部から口縁に向かってすばまる。口縁は丸みを帯びた台形状で、内傾し内側へ多少張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を2条貼付する。内面はハケ目の後ナデ、外面はハケ目調整が施されている。

下棺は中形の甕形土器である。底部は上げ底ぎみで厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位の最大径部から口縁に向かってやすばまる。丸みを帯びた台形状を呈する口縁は内傾しやや内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデ及びハケ目の後ナデ、外面はハケ目による調整を施す。

K-07 甕棺 (上甕・下甕 Fig 14-13・14)

上棺は胴部中位から底部にかけて欠損しているが、おそらく小形の甕形土器と思われる。口縁は扁平で上面がくぼみ外側へ大きく張り出し内側へも張り出す。内外面ともナデ調整を施す。

下棺は小形の甕形土器である。脚台状の底部を有し裾に向かって開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってやすばまる。口縁は内側が欠損しているため全体の形状は不明であるが、残存部は扁平で内傾しわずかに外反する。内面はナデ、外面はハケ目の後ナデによる調整を施す。

K-08 甕棺 (Fig 15-15)

中形の甕形土器である。平底の底部から直線的に開き、胴部中位から上位にかけて丸みを帯び口縁部ですばまる。口縁はT字形で、内傾し上面がやくぼむ。最大径は胴部中位に位置し、刻目を施したやや垂れぎみの台形状の突帯を貼付する。内外面ともナデ調整を施し、外面には部分的に黒斑が見られる。

K-09 甕棺 (上甕・下甕 Fig 15-16・17)

上棺は小形の甕形土器である。胴部上位から底部にかけて欠損しているため全体の形状は不明であるが、最大径を胴部上位に有し、そこから口縁に向かってすばまる。口縁は上面がくぼんだ断面三角形を呈し、やや内傾し多少内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともにハケ目の後ナデ調整が施されている。

下棺は甕形土器で、平底の底部から直線的に開き、胴部中位から上位にかけて丸みを帯び、口縁部ですばまる。口縁は断面三角形を呈し、大きく内傾する。最大径は胴部中位に位置し、刻目を施した断面三角形の突帯を貼付する。外面はハケ目、内面はナデによる調整が施されており、外面に一部黒斑や赤彩らしきものが見られる。

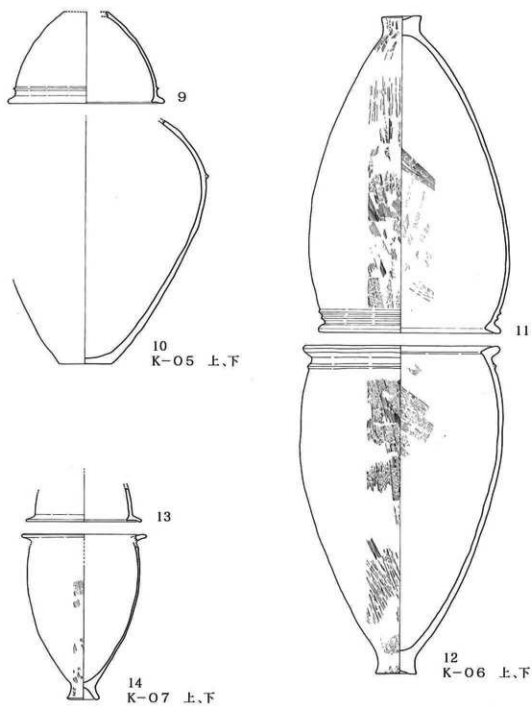


Fig. 14 K-05・06・07甕棺

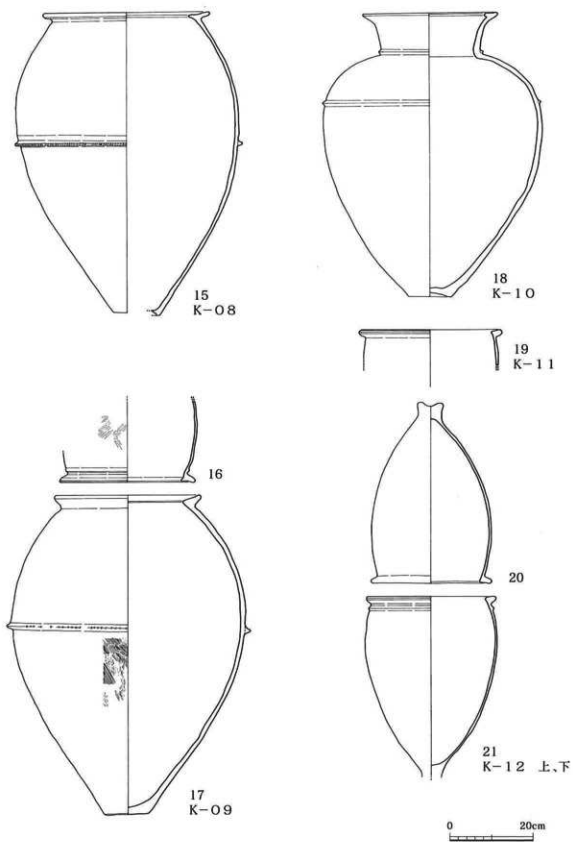


Fig. 15 K-08・09・10・11・12甕棺

K-10壺棺 (Fig 15-18)

中型の壺形土器で、やや上げ底ぎみの底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位でもっとも張り出しそこから頸部へ向けすばまる。頸部からはやや外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁直下で屈曲し開く。口縁は断面三角形で内側に張り出すいわゆる鋤先形口縁である。胴部上位と頸部に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面ともナデによる調整が施されており、外面には部分的に黒斑が見られる。

K-11甕棺 (Fig 15-19)

小型の甕形土器と思われるが、胴部中位から底部にかけて欠損しているため全体の形状は不明である。口縁は台形状で、内傾しやや内側に張り出す。調整は内外面とも不明である。

K-12甕棺 (上甕・下甕 Fig 15-20・21)

上棺は小型の甕形土器である。底部は上げ底ぎみで厚みがありやや裾が開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位に最大径を有し、そこから口縁に向かって多少すばまる。口縁は台形状で、端部が丸みを帯び上面がわずかにくぼむ。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は小型の甕形土器である。最下部を欠損しているが上げ底ぎみの底部を有するものと思われる。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径を有しそこから口縁に向かってややすばまる。口縁は丸みを帯びた三角形で、やや内傾し内側にわずかに張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともナデ調整を施す。

K-13甕棺 (上甕・下甕 Fig 16-22・23)

上棺は中型の甕形土器で、底部を欠損している。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かって多少すばまる。口縁は分厚い断面三角形で多少上面がくぼむ。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整が施される。

下棺は口縁から胴部中位にかけて欠損しているため、形状は不明であるが、おそらく甕形土器であろうと思われる。底部はやや上底で裾が多少開き、胴部は底部から緩やかに内湾しながら開く。

内外面ともにハケ目の後ナデ調整を施している。

K-15壺棺 (Fig 16-24)

中型の壺形土器である。底部は平底でそこからわずかに内湾しながら開く。胴部中位やや上部で最大径となり、そこから内湾しながら頸部に向かってすばまる。頸部からはやや外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁直下で大きく開く。口縁は鋤先状口縁でやや外傾する。胴部最大径部と頸部に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

K-16甕棺 (Fig 16-25)

小型の甕形土器である。底部は脚台状でやや厚みがあり裾が拡がる。胴部は底部から内湾しながら開き、胴部下位で多少屈曲し外傾ぎみに直線的に立ち上がる。胴部中位やや上で最大径となり、そこから口縁に向かってややすばまる。口縁は断面三角形で上面がわずかにくぼむ。内外面ともナデによる調整を施す。

K-17甕棺 (Fig 16-26)

小型の甕形土器である。底部は脚台状でやや厚みがあり裾が開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となりそこから口縁に向かってややすばまる。口縁は内傾し内側に多少張り出し上面がくぼむ。内外面ともハケ目の後ナデ調整を施す。

K-18甕棺 (上甕・下甕 Fig 16-27・28)

上棺は胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部下位からやや内湾しながら開き、胴部中位やや上で最大径となる。そこから口縁に向かって多少内湾しながらすばまる。口縁は内傾し断面三角形を呈する。胴部の最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗のため不明である。

下棺は胴部上位から口縁にかけて、意図的に打ち欠かれているため器種は不明である。底部は平底でそこから緩やかに内湾しながら開く。胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かって屈曲しすばまる。最大径部には断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗のため不明である。

K-19甕棺 (上甕・下甕 Fig 17-29・30)

上棺は中型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かって多少すばまる。口縁は台形状を呈し、上面がややくぼみ内側に多少張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデ、外面はハケ目の後ナデによる調整を施し、外面には部分的に黒斑が見られる。

下棺は中型の甕形土器である。底部は上げ底でやや厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってややすばまる。口縁は断面三角形でわずかに内傾する。口縁直下に断面三角形の突帯を2条貼付する。内面はナデ、外面はハケ目による調整を施し、内外面とも部分的に煤状の付着物が見られる。

K-20甕棺 (上甕・下甕 Fig 17-31・32)

上棺は中型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾がやや開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位に最大径を有し、そこから口縁に向かって多少すばまる。口縁は逆し字状を呈し、やや内傾し上面が多少くぼむ。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。外面はハケ目、内面はハケ目の後ナデによる調整を施し、部分的に煤の付着がみられる。

下棺は中型の甕形土器で、平底の底部から緩やかに内湾しながら開く。胴部中位やや上部に最大径を有し、そこから口縁に向かってすばまる。口縁はくの字状を呈し、内傾し多少内側に張り出す。胴部中位に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ目、外面はハケ目の後ナデによる調整を施し、外面には部分的に黒斑および煤の付着がみられる。

K-21甕棺 (上甕・下甕 Fig 18-33・34)

上棺は中型の甕形土器である。底部を欠損しているが、上げ底ぎみの底部を有するものと思われる。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位の最大径部から口縁に向かってすばまる。

口縁は台形状を呈し、わずかに内傾しやや内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を2条貼付する。内面はハケ目およびナデ、外面はハケ目の後ナデによる調整を施す。

下棺は中型の甕形土器である。平底の底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径と

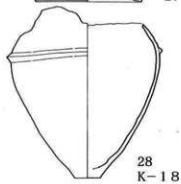
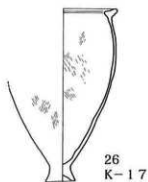
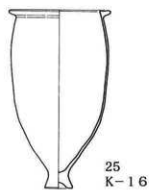
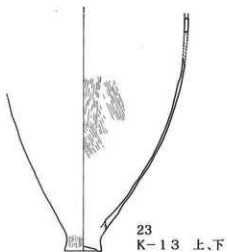
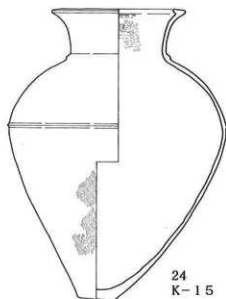
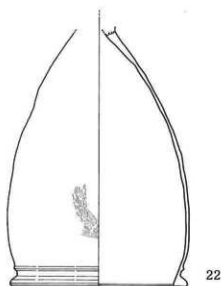


Fig. 16 K-13・15・16・17・18甕棺

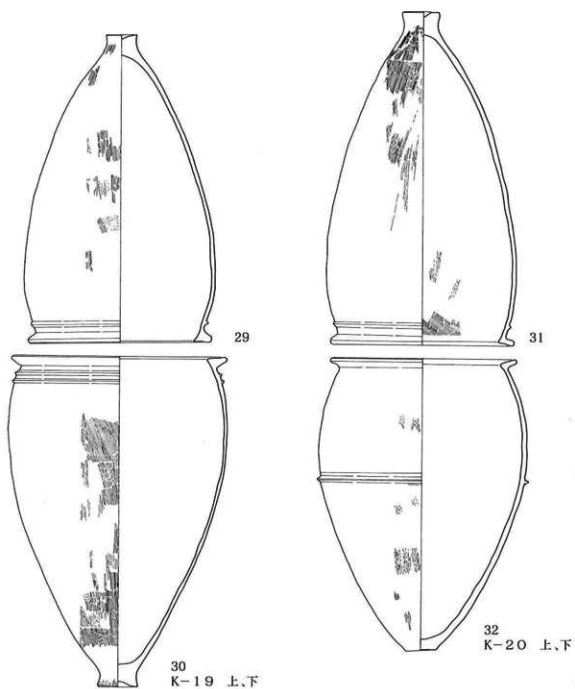


Fig. 17 K-19・20甕棺

なり、そこから口縁に向かってややすばまる。口縁は丸みを帯びた長方形で、やや内傾し内側に張り出す。胴部中位やや下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面ともに摩耗のため不明である。

K-22 甕棺 (上甕・下甕 Fig 18-35・36)

上棺は大型の甕形土器である。胴部上位から底部にかけて欠損しているため形状は不明である。

口縁は分厚く断面三角形を呈する。内外面ともナデによる調整を施す。

下棺は大型の甕形土器である。分厚い平底の底部から緩やかに内湾しながら開く。胴部中位でやや外傾しながら直立し、胴部上位で口縁に向かって多少内傾する。口縁は分厚い方形を呈し、内側に多少張り出す。胴部中位にやや垂れぎみの見かけ2条突帯を貼付する。内面はナデおよびハケ目の後ナデによる調整を施すが、外面は摩耗のため不明である。また外面には部分的に黒斑および赤彩痕がみられる。

K-23 甕棺 (上鉢・下甕 Fig 18-37・38)

上棺は鉢形土器である。底部を欠損しているが、おそらく平底の底部から緩やかに内湾しながら大きく開くものと思われる。口縁は丸みを帯びた三角形を呈し、内側にわずかに張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は中型の甕形土器である。底部は上げ底であり厚みがなく裾がわずかに開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開く。胴部中位やや上で最大径となり、そこから口縁に向かってすばまる。口縁は上面が多少くぼみ内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

K-24 甕棺 (上不明・下甕 Fig 19-39・40)

上棺は底部を欠損し、胴部上位から口縁にかけて意図的に打ち欠いているため器種は不明である。

胴部は底部から内湾しながら開き、胴部上位の最大径部で大きく張り出し、そこから口縁に向かってすばまる。全体的に丸みを帯びており、胴部上位の最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。

調整は内外面ともハケ目の後ナデにより調整を施す。

下棺は大型の甕形土器である。厚みのある平底の底部からやや内湾ぎみに開き、胴部中位からやや外湾ぎみに立ち上がる。さらに胴部上位で口縁に向かってすばまる。口縁はくの字状を呈し、内側に多少張り出す。胴部下位に見かけ2条突帯を貼付する。内面はハケ目の後ナデによる調整を施す。外面は底部にハケ目が残るがその他は摩耗により不明である。

K-25 甕棺 (Fig 19-41)

大形の甕形土器である。底部はやや上底ぎみで裾がわずかに開く。胴部は底部から内湾しながら開き、胴部上位で最大径となりそこから口縁に向かって多少すばまる。口縁は分厚い台形状を呈し多少内傾する。胴部中位やや下に見かけ2条突帯を貼付する。内面はナデ、外面はハケ目の後ナデによる調整を施す。

K-26 甕棺 (Fig 19-42)

大型の甕形土器である。底部はわずかに上げ底で厚みがあり裾は多少すばまる。底部から内湾しながら開き、胴部中位からはほぼ直立し、口縁直下でややすばまる。口縁は丸みを帯びた分厚い方

形を呈し、やや内傾し内側に張り出す。胴部中位やや下に見かけ2条突帯を貼付する。内面はハケ目およびナデ、外面はヘラミガキによる調整を施す。

K-27甕棺(上甕・下甕 Fig 20-43・44)

上棺は小型の甕形土器である。底部は上底で厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁はいわゆるT字口縁で内傾する。口縁直下には断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

下棺は中型の甕形土器である。欠損のため底部の形状は不明である。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁は断面三角形でわずかに内傾しやや内側に張り出す。口縁直下に刻目を施した断面三角形の突帯を2条貼付する。

内外面ともナデによる調整を施す。

K-28甕棺(上壺・下甕 Fig 20-45・46)

上棺は胴部上位から口縁にかけて意図的に打ち欠いているが、その形状から壺形土器と思われる。底部は平底でやや厚みがある。胴部は底部から内湾ぎみに開き、胴部上位で丸みを帯び内湾しながら立ち上がる。最大径は胴部上位の屈曲部に位置し、そこに断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともハケ目の後ナデ調整を施す。

下棺は大型の甕形土器である。底部は平底で厚みがあり裾はわずかにすぼまる。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁は分厚い三角形を呈し、やや内傾し内側に張り出す。胴部中位やや下に見かけ2条突帯を貼付する。

内面はハケ目およびハケ目の後ナデによる調整を施すが、外面は一部ハケ目が残存するのみで全体的に摩耗が激しく不明である。

K-29甕棺(Fig 20-47)

中型の甕形土器である。胴部はやや厚みがある平底の底部から直線的に開き、胴部中位やや上でもっとも張り出し、そこから口縁に向かってやや内湾しながらすぼまる。口縁はくの字状を呈し内傾し内側に張り出す。胴部中位やや上の最大径部に刻目を施した台形状の突帯を貼付する。内面はハケ目およびナデ、外面はヘラミガキによる調整を施す。

K-30甕棺(Fig 21-48)

大型の甕形土器である。薄い平底の底部から緩やかに内湾しながら開き、最大径となる胴部中位やや上部からはほぼ直立する。口縁はいわゆるT字口縁で、外傾し大きく内側に張り出す。胴部中位やや下にM字突帯を貼付する。調整は内外面ともナデによる調整を施し、部分的に黒斑がみられる。

K-31甕棺(上不明・下甕 Fig 21-49・50)

上棺は胴部上位から口縁にかけて意図的に打ち欠いているため器種は不明である。平底の底部からやや内湾しながら開く。胴部最大径部で口縁に向かって屈曲し、そこに断面三角形の突帯を2条貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

下棺は中型の甕形土器である。平底の底部からやや内湾ぎみに開き、胴部上位の最大径部で内側に屈曲し、口縁下ですぼまる。口縁はくの字形を呈し、胴部最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ目の後ナデ、外面はミガキによる調整を施す。

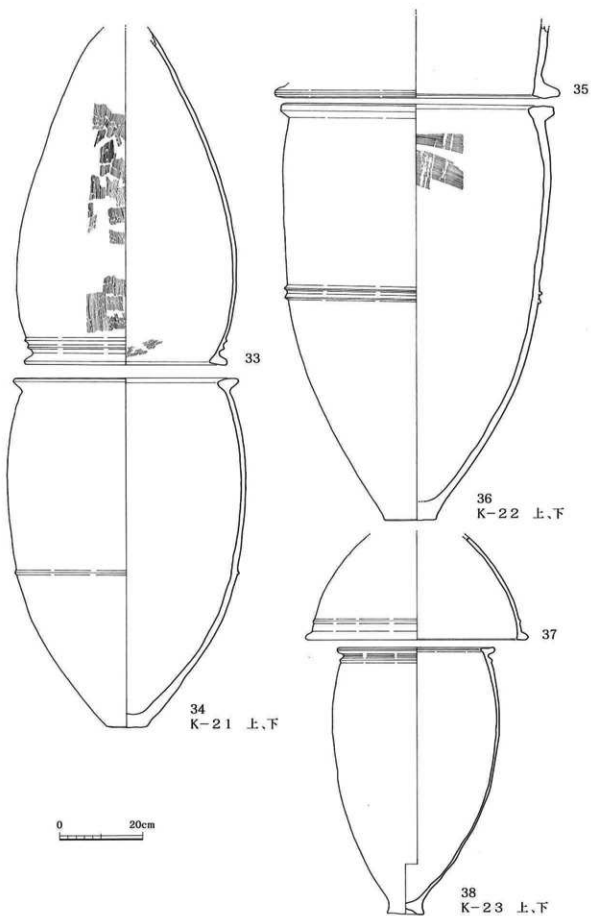


Fig. 18 K-21・22・23甕棺

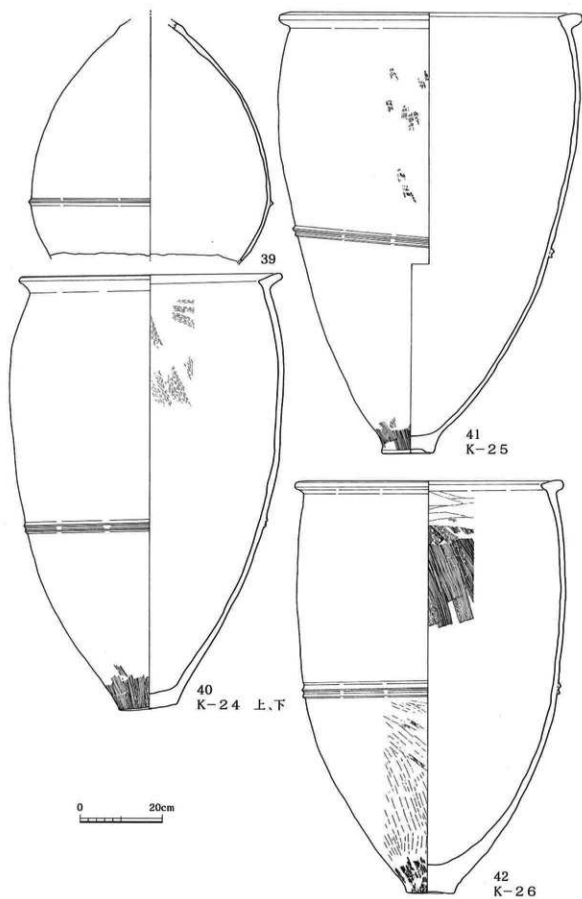


Fig. 19 K-24・25・26 甕棺

K-32 甕棺 (Fig 21-51)

丸みを帯びた甕形土器である。底部は欠損しているが平底と思われる。底部からやや内湾ぎみに開き、胴部中位やや下から胴部中位やや上にかけて丸みを帯び、口縁下ですばまる。口縁はくの字形を呈する。胴部中位やや下に、刻目を施した下方に垂れぎみの台形状の突帯を貼付する。外面はハケ目およびヘラミガキによる調整を施すが、内面は摩耗により不明である。

K-33 甕棺 (Fig 21-52)

胴部上位から口縁にかけて欠損しているが、おそらく壺形土器と思われる。平底の底部から直線的に開き、胴部上位の最大径部で内側に屈曲する。最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

K-34 甕棺 (上甕・下甕 Fig 22-53・54)

上棺は小型の甕形土器である。底部はやや上底ぎみの平底で、そこから胴部中位に向かって多少内湾しながら開き、そこからは口縁に向かってほぼ直立する。口縁はいわゆるT字口縁で内傾し内側に張り出す。口縁端部に刻目を施し、上面に線刻による鋸歯文の施文がみられる。胴部中位には刻目を施した断面三角形の突帯を2条貼付する。外面はミガキ、内面はナデによる調整を施し、一部外面に赤彩が残存し、内面には部分的に煤が付着する。

下棺は小型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾が多少開く。底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部中位やや上に最大径を有し、口縁下ですばまる。口縁は内傾し断面三角形を呈する。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともハケ目の後ナデによる調整を施す。

K-35 甕棺 (上不明・下甕 Fig 22-55・56)

上棺は胴部上位から口縁にかけて意図的に打ち欠いているが壺形土器と思われる。底部は平底でやや厚みがある。丸みを帯びた胴部は底部からやや内湾ぎみに開き、胴部最大径部で内側に屈曲し、そこに断面三角形の突帯を2条貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は大型の甕形土器である。底部は平底で厚みがあり裾がすばまる。胴部は底部から直線的に開き、胴部中位やや下から胴部上位にかけてほぼ直立し、口縁直下でわずかにすばまる。口縁は分厚い台形状を呈し多少内傾する。胴部中位やや下に下方に垂れぎみの見かけ2条突帯を1条貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

K-36 甕棺 (上甕 Fig 22-57)

上棺は小型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、口縁直下ですばまる。口縁は丸みを帯びた三角形を呈し、わずかに反外しながら外側に短く張り出す。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は調査担当者の不注意により紛失してしまっている。

K-37 甕棺 (上甕・下甕 Fig 23-58・59)

上棺は大型の甕形土器である。底部は平底でやや厚みがあり裾はすばまる。胴部は底部から直線的に開き、胴部中位でやや丸みを帯び、口縁直下で多少すばまる。口縁は分厚い台形状を呈し上面がわずかにくぼむ。胴部中位に断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデ、外面はミガキによる調整を施す。

下棺は中型の甕形土器である。底部はわずかに上げ底ぎみで分厚く裾がわずかに開く。胴部は底

部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、口縁直下ですばまる。口縁は内傾し分厚い断面三角形を呈する。口縁直下に断面三角形の突帯を2条貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

K-38甕棺 (Fig 23-60)

小型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾がやや開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部中位やや上で最も張り出し、そこから口縁に向かってすばまる。口縁は内傾し丸みを帯びた三角形を呈し、内側にわずかに張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。

調整は内外面とも摩耗により不明である。

K-39甕棺 (上鉢・下壺 Fig 23-61・62)

上棺は鉢形土器である。平底の底部から内湾ぎみに開き、口縁は内傾し丸みを帯びた三角形を呈す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ目の後ナデ、外面はナデによる調整を施す。

下棺は口縁を意図的に打ち欠いているが、壺形土器と思われる。平底の底部からほぼ直線的に開き、胴部上位で最大径となり、そこから屈曲しすばまる。最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデおよびハケ目の後ナデ、外面はナデによる調整を施す。

K-40甕棺 (Fig 24-63)

大型の甕形土器である。底部は平底で厚みがあり裾からほぼ直立する。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部中位やや下でほぼ直立し、口縁直下でわずかにすばまる。口縁は内傾し分厚い台形状を呈する。外側に短く張り出し、内側にもわずかに張り出す。胴部中位やや下に見かけ2条突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

K-42甕棺 (上鉢・下甕 Fig 24-64・65)

上棺は鉢形土器で、平底の底部から緩やかに内湾しながら開く。口縁はわずかに内傾し台形状を呈する。口唇部に刻目を施しており、外側に短く張り出し、内側にもわずかに張り出す。口縁直下に断面三角形の貼付突帯を貼付し、これにも刻目を施す。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は小型の甕形土器である。底部は上げ底で分厚く裾がやや開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、口縁直下ですばまる。口縁は内傾し、上面がくぼみ内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

(2) 石製品

磨製石剣 (Fig 25 1~6)

K-30甕棺墓出土磨製石剣 (1~5)

1及び2は、安山岩製で、先端部及び基部を欠損している。1は長さ11.2cm、最大幅3.6cm、最大厚1.4cm、2は長さ10.8cm、最大幅3.7cm、最大厚1.4cmを測る。3及び4は、安山岩製の磨製石剣の先端部である。3は残存部で長さ2.0cm、最大幅1.9cm、最大厚0.6cm、4は残存部で長さ1.9cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cmを測る。5は安山岩製で左刃部及び基部を欠損している。残存部で長さ9.9cm最大幅2.4cm、最大厚1.3cmを測る。

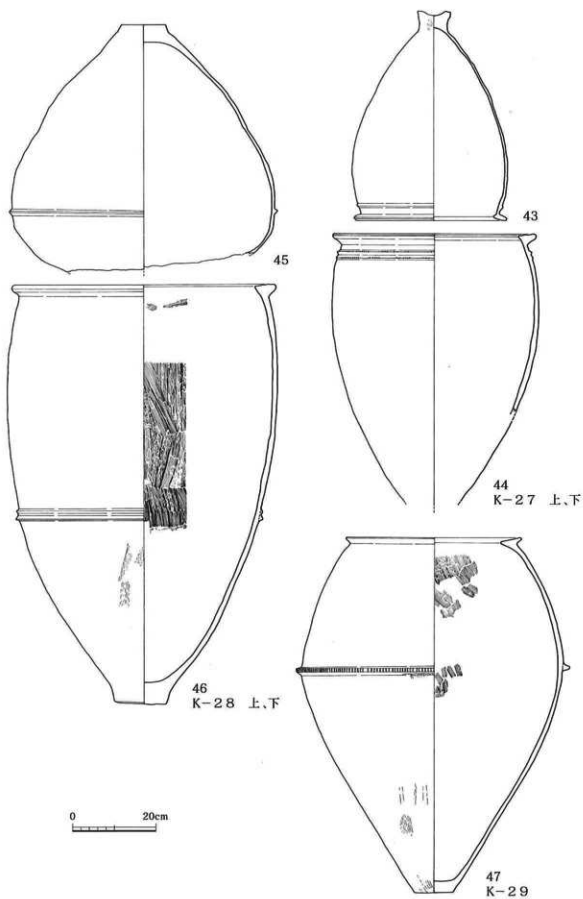


Fig. 20 K-27・28・29甕棺

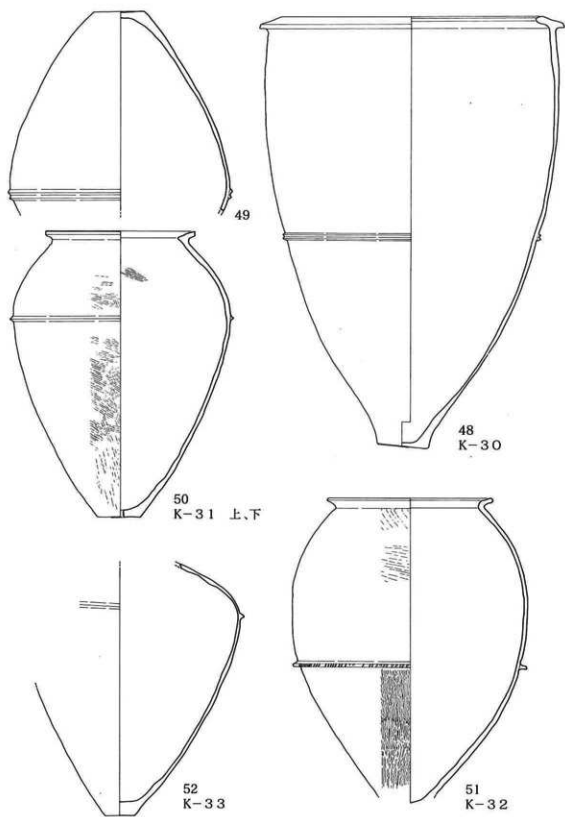


Fig. 21 K-30・31・32・33甕棺

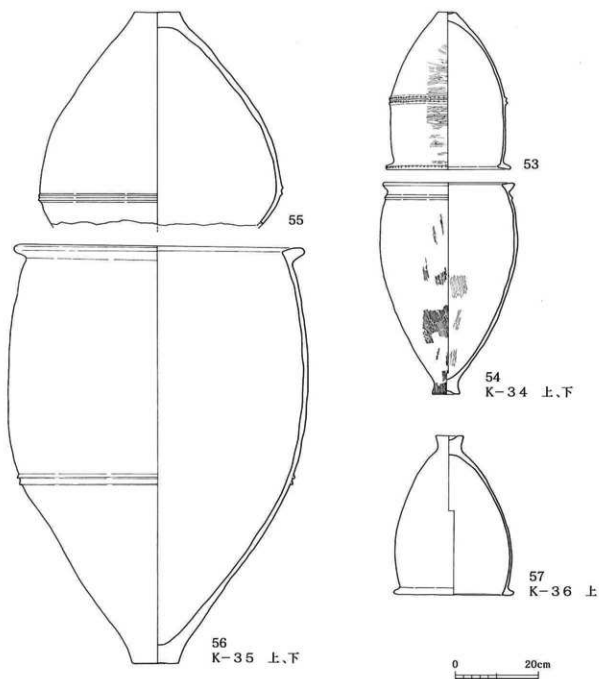


Fig. 22 K-34・35・36甕棺

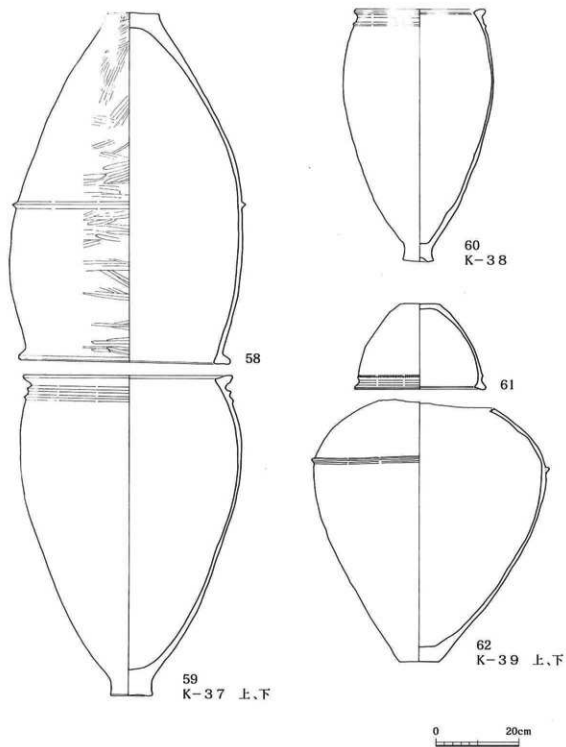


Fig. 23 K-37・38・39鏡棺

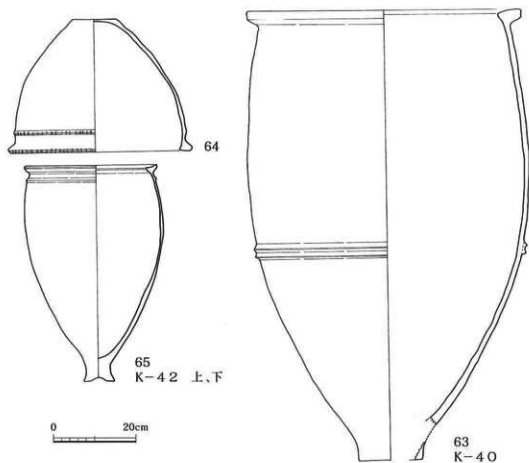


Fig. 24 K-40・42甕棺

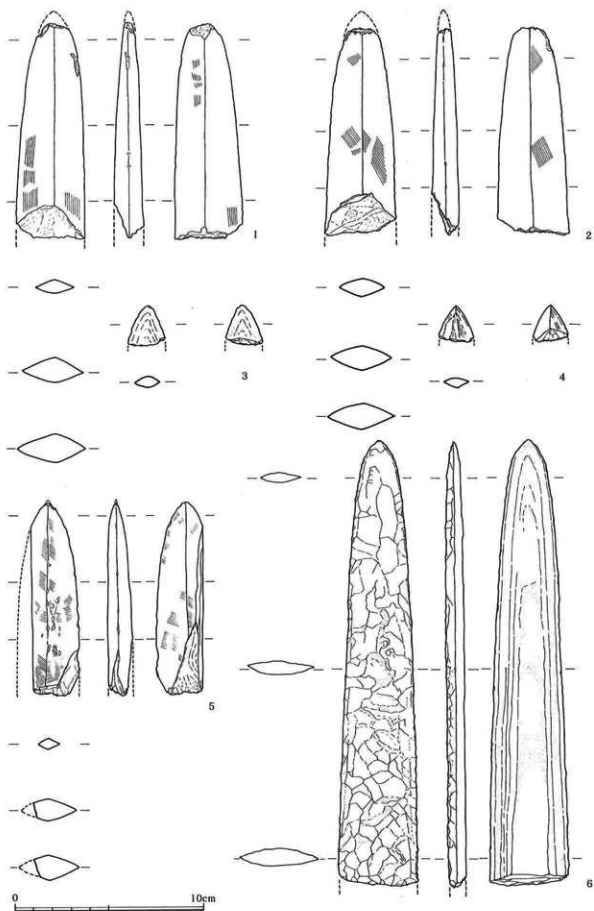


Fig. 25 石製品

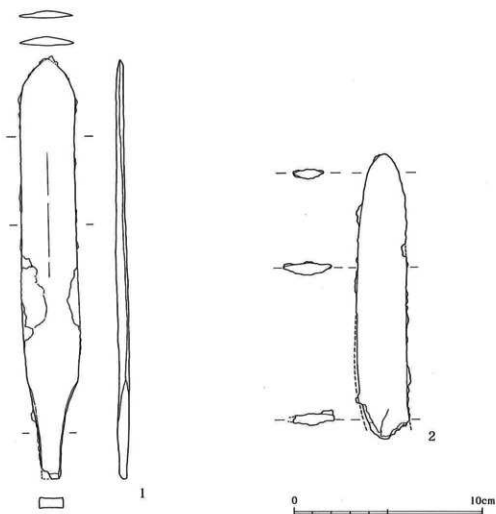


Fig. 26 鉄製品

K-37 甕棺墓出土磨製石剣 (6)

6は安山岩製で、ほぼ完形と思われる。長さ23.2cm、最大幅4.1cm、最大厚0.9cmを測る。

(3) 鉄製品

鉄剣 (Fig 26 1, 2)

両者ともK-05 甕棺墓の墓壇内から出土している。1は長さ22.0cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmを測る。2は、長さ15.0cm、幅2.6cm、厚さ0.6cmを測る。K-05 甕棺墓が大きく削平を受けているため、甕棺墓に伴う副葬品であるかどうかは不明である。

2 弥生時代後期～古墳時代

この時期の遺構としては、石棺墓1基、木棺墓2基、大型溝2基、土坑1基が確認されている。特に大型溝2基からは、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての多量の土器が出土した。

各遺構および遺物の詳しい内容は以下のとおりである。

遺構

(1) 石棺墓

SC-01 (Fig 27)

調査区中央部、SK-35の東側際に位置する。削平が激しく石棺材4枚が残存するのみで、副葬品等は確認されていない。

(2) 木棺墓

M-01 (Fig 27)

調査区中央部やや南よりのSD-08際に位置する。長さ8.5m、幅3.5m、深さ1.1mを測る。大型の木棺墓と思われるが、かなり攪乱を受けており、墓壇内に一部白色粘土と赤色顔料を残すのみで、副葬品等は確認されていない。

M-02 (Fig 27)

M-01 甕棺墓の南側に並んで位置する。長さ9.0m、幅4.5m、深さ0.9mを測る。M-01と同様に、かなり攪乱を受けており、木棺の痕跡及び副葬品は確認されていない。図面から判断して、M-01を切っているものと思われるが詳細は不明である。

(3) 大型溝

SD-08 (Fig 28)

調査区南東側に弧を描くように所在する。調査区東側の部分は削平により一部消失しているものと思われる。長さ約24m、幅6～7m、深さ約1mを測る。遺構中央部北側に40～50cm大の集石部がみられる。遺構内から大量の土器片とそれに混ざって鉄器が出土している。遺構上部は市営住宅建設の際に大きく削平を受けているものと思われる。

SD-09 (Fig 29)

調査区北側中央部に位置する。北端部は削平により消失しているものと思われる。残存部で長さ約12m、幅約5m、深さ約1mを測る。遺構南端部東側に40～50cm大の集石がみられる。遺構内から大量の土器片と、それに混ざって鉄器が出土しているが、一部弥生時代中期の甕棺墓群を破壊していることから、甕棺片も多少混入している。遺構上部は市営住宅建設の際に大きく削平を受けているものと考えられる。

(4) 土坑

SK-35 (Fig 30)

調査区中央部やや南よりの、SD-08西端部とSD-09南端部に挟まれた部分に位置する大型の土坑である。長さ6.1m、幅3.5m、深さ1.5mを測り、形状は隅丸の長方形を呈する。遺構内からはSD-08、09同様多量の土器片が出土している。

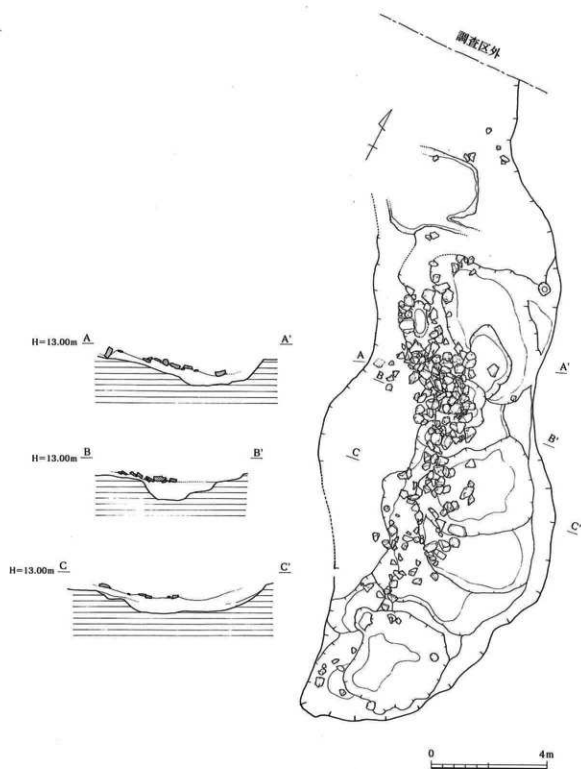
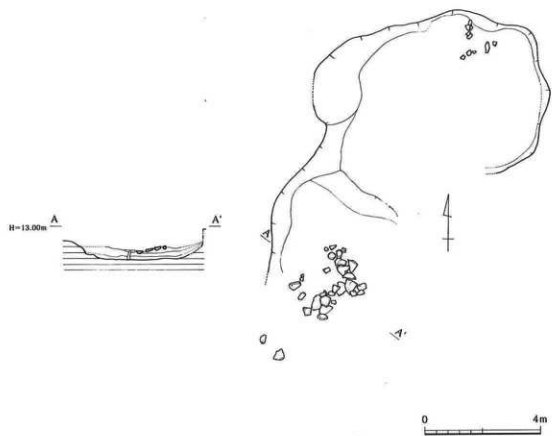


Fig. 28 SD-O8大型溝



F i g. 29 SD-O9大型溝

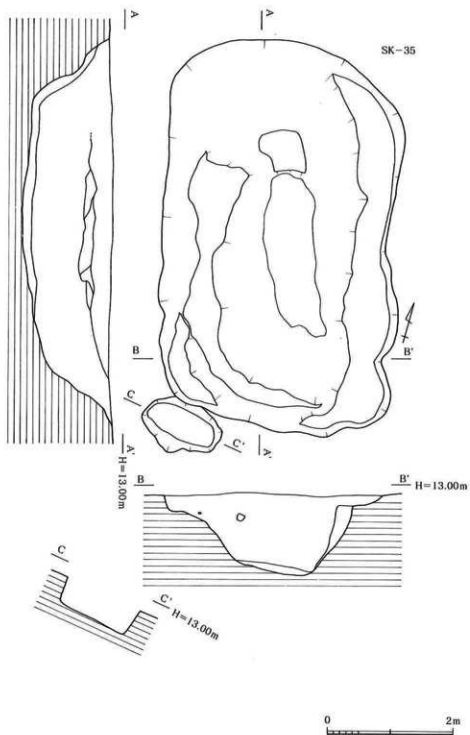


Fig. 30 SK-35土坑

遺物

(1) 土器

この時期の土器は、すべてSD-08、SD-09、SK-35から出土している。特にSD-08、09については、多量の土器が遺構内に密集した状態で確認されている。器種構成としては甕、壺、鉢、高坏、小型丸底壺、小型壺、ミニチュア土器、器台、甕、ジョッキ形土器があげられる。遺物量が膨大であるため、実測可能なものの中から主なものを掲載した。詳細については以下器種及び遺構ごとに示す。

甕 (Fig 31~37 1~117)

甕は117点掲載している。出土地点の内訳はSD-08が97点、SD-09が14点、SK-35が6点である。

SD-08出土土器 (1~33、36~69、72、73、75~92、96~98、103、106、112~116)

1は脚付甕である。胴部中位やや上に最大径をもち、頸部はわずかにすぼまる。口縁部はくの字形に屈曲し直線的に開く。端部は角張り外傾する。脚部はハの字に開きあまり高くない。端部はやや丸みを帯び、外底面との境は不明瞭である。調整は内外面ともハケメによる調整を施すが、胴部下位から脚部にかけて部分的に指頭圧痕がみられる。2~12は口縁部あるいは胴部下位を欠損しているものが多いが、在地系の脚付甕と思われる。胴部中位あるいはやや上に最大径をもち全体的に丸みを帯びる。口縁部はくの字形に屈曲し、直線もしくはわずかに外反ぎみに開く。端部は角張り外傾する。底部はすぼまり、そこにやや高めのハの字形を呈する脚が付く。脚は端部付近で外側に開き、端部は角張る。調整は内外面ともハケメによる調整を施すが、胴部外面に部分的にタタキ痕が残存するものもある。13~15は脚付甕の脚部である。脚は低めでハの字形を呈し、端部付近で外側に開く。口縁端部は角張り、外底面との境は明瞭である。16は在地系の長胴甕である。あまり丸みをもちない胴部は、中位やや上に最大径をもち頸部は多少すぼまる。口縁部はくの字形に屈曲し直線的に開く。底部は平底で胴部中位から底部に向かってすぼまる。外底面にタタキ痕状のスタンプがみられる。調整は内外面ともハケメによる調整を施す。17は長胴甕と思われるが、胴部中位以下を欠損しているため脚の有無は不明である。18~44は在地系の脚付甕の脚部である。脚はやや高めでハの字形を呈するが、端部付近で外側に開くものと開かないものがある。口縁端部は角張るが一部丸みを帯びるものもあり、外底面との境はやや不明瞭である。45は口縁部から胴部中位にかけて欠損しているが在地系の脚付甕と思われる。胴部下位はやや丸みを帯びながら開き、直線的にハの字に開く脚が付く。脚部の端部は角張り外底面との境は不明瞭である。46~60は脚付甕の脚部である。脚はやや高めで大きくハの字に開き、口縁端部で外側に開くものと開かないものがある。口縁端部は角張るものと丸みを帯びるものがあり、外底面との境は不明瞭である。61~66は在地系の甕と思われるが、すべて胴部中位及び胴部下位以下を欠損しているため脚の有無は不明である。61~63は胴部中位から口縁部向かって直線的に多少すぼまり、口縁部はくの字に屈曲し直線的に開く。口縁端部は角張り外傾する。調整は外面がタタキ、内面はハケメによる調整を施す。64、65は胴部中位から口縁に向かって丸みを帯びながらすぼまる。口縁部はくの字に屈曲しやや外反気味に開き、口縁端部は角張りわずかに外側につまみ出される。

調整は外面が胴部上位にタタキ、下位にハケメ、内面はハケメによる調整を施す。66は胴部中位から口縁部に向かって丸みを帯びながらややすばまり、口縁部はわずかに拡がりながら短く立ち上がる。口縁端部で丸みを帯びやや外側に開く。調整は外側はタタキの後ハケメによる調整を施すが、部分的にタタキ痕が残存している。内側はハケメによる調整を施す。67～69は球形の胴部に丸底の底部を有し、口縁部はくの字に屈曲し短く開き端部は角張る。72は球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲するが、わずかに開く程度で口縁端部は丸みを帯びる。73は球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲し薄く外反しながら開き端部は丸みを帯びる。75は胴部が縦長ぎみの球形で底部は平底気味の丸底である。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開き端部は丸みを帯びる。76、77は胴部が縦長気味の球形で底部は尖底気味の丸底である。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開き端部は丸みを帯びる。78～89は胴部中位以下を欠損しているものもあるが、胴部中位やや上が張り出し、底部は尖底気味もしくは平底気味の丸底を有するものと思われる。口縁部は屈曲し直線的もしくはわずかに外反しながら開き端部は角張る。90～92はほぼ球形の胴部に尖底気味の丸底を有する。口縁部はくの字に屈曲して外反気味に開き端部は丸みを帯びる。96～98は胴部下位から底部を欠損しているが、胴部中位及びやや上で大きく張り出す胴部に尖底気味の丸底を有するものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し直線的もしくはわずかに外反しながら開く。端部は多少丸みを帯びる。103は胴部下位以下を欠損しているが、胴部中位やや上で最も張り出し、底部は尖底気味の丸底になるものと思われる。口縁部はくの字に屈曲しわずかに内湾しながら開き端部は丸みを帯びる。106は胴部中位やや上で最も張り出し、底部は尖底気味の丸底となる。口縁部はくの字に屈曲し内湾しながら開き端部は丸みを帯びる。112～115は胴部中位以下及び底部を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開き、口縁端部は角張る。116は山陰系の複合口縁甕である。胴部中位以下を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。口縁部は一次口縁部で短く外反し、二次口縁部はやや開きながら直立する。口縁端部でわずかに外側に開き丸みを帯びる。

SD-09出土土器(70、71、74、99～102、104、105、107～111)

70、71は球形の胴部を有する。70は底部を欠損しているが、両者とも口縁部はくの字に屈曲し短く開き端部は丸みを帯びる。74は胴部がやや縦長気味の球形で、底部は丸底になるものと思われる。口縁部はくの字に屈曲しわずかに外反気味に開き端部は丸みを帯びる。74は底部を欠損しているが、胴部は縦長ぎみの球形で、丸底の底部を有するものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し、やや外反気味に開く。端部はやや丸みを帯びる。99は胴部下位から底部にかけて欠損しているが尖底気味の丸底を有するものと思われる。胴部は中位で丸みを帯びながら最も張り出し、口縁部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開き端部は丸みを帯びる。100は胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部中位で最も張り出し口縁部に向かってすばまる。底部はおそらく尖底気味の丸底になるものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開き端部は丸みを帯びる。101は胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部中位で丸みを帯びながら最も張り出す。底部は尖底気味の丸底になるものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開くが、端部直下で多少外反する。口縁端部は丸みを帯びる。102は口縁部を欠損している。胴部中位で

最も張り出し、底部は尖底気味の丸底になる。104は胴部下位以下を欠損している。胴部中位から口縁に向かって丸みを帯びながらすばまる。口縁部はくの字に屈曲しわずかに内湾しながら開く。口縁端部は角張る。105は胴部中位以下を欠損している。胴部中位やや上で最も張り出し口縁部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開く。端部は丸みを帯びる。107は胴部中位以下を欠損している。胴部中位やや上で最も張り出し口縁部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し内湾気味に開く。端部は角張り外傾する。108は底部を欠損している。胴部下位から直線的に開き、中位やや上で最も張り出し口縁部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し内湾しながら開く。端部は丸みを帯びる。109は胴部中位以下を欠損している。口縁部はくの字に屈曲し、直線的に開く。端部は角張りやや外傾し多少内側につまみ出される。110は胴部中位以下を欠損している。胴部中位やや上で最も張り出し口縁部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開く。端部は角張り外傾する。口縁部直下に波状文を3条施文する。111は丸底の底部から丸みを帯びて広がり、胴部中位で最も張り出す。そこから口縁部に向かってやや丸みを帯びながらすばまる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開く。端部は角張りわずかに外傾し多少内側につまみ出される。

SK-35出土土器(34、35、93~95、117)

34、35は甕の脚部である。34は、脚は低めでハの字に開き端部はやや丸みを帯びる。脚部と外底面の境はやや不明瞭である。35は34と同様に脚は低めだが、脚の中位でやや外側に開き端部は角張り外底面と脚部との境はやや不明瞭である。93は尖底気味の丸底で、胴部は球形を呈する。胴部中位で最大径となり、その後胴部中位やや上から口縁部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し、直線的に開く。口縁端部は丸みを帯びる。94はやや尖底気味の丸底で球形の胴部を有し、胴部中位やや上で最大径となる。口縁部はくの字に屈曲し外反気味に開き、口縁端部は丸みを帯びる。95はやや尖底気味の丸底で球形の胴部を有し、胴部中位やや上で最大径となる。口縁部はくの字に屈曲しわずかに外反気味に開く。口縁端部は丸みを帯びる。117は山陰系の複合口縁甕である。胴部下位以下を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。口縁部は一次口縁部で短く外反し、二次口縁部はやや開きながら直立する。端部は丸みを帯びる。

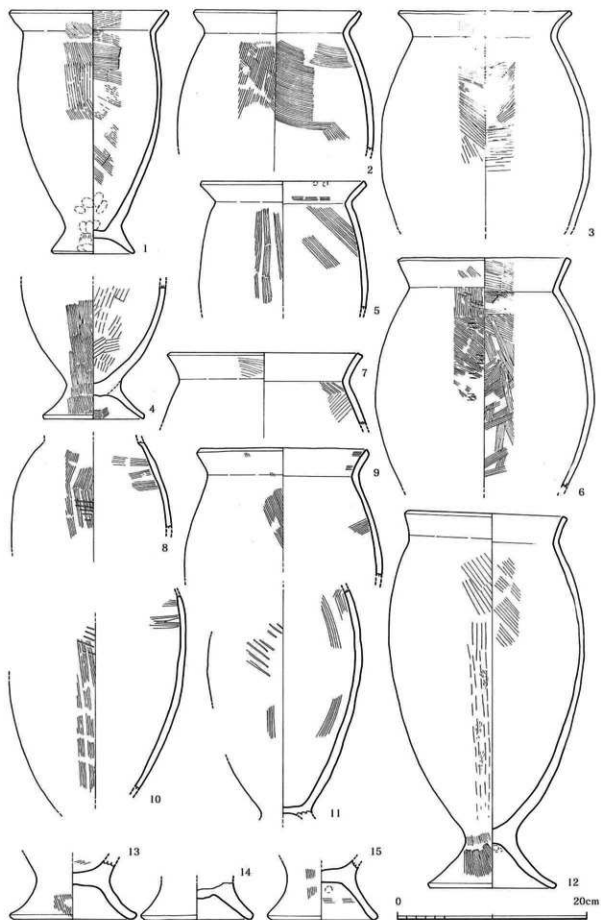


Fig. 31 土器 1

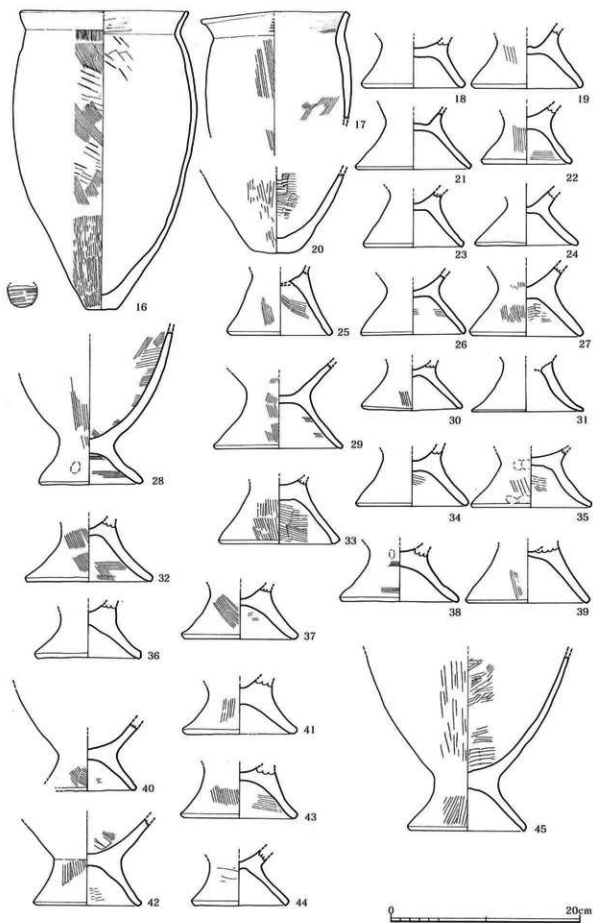


Fig. 32 土器 2

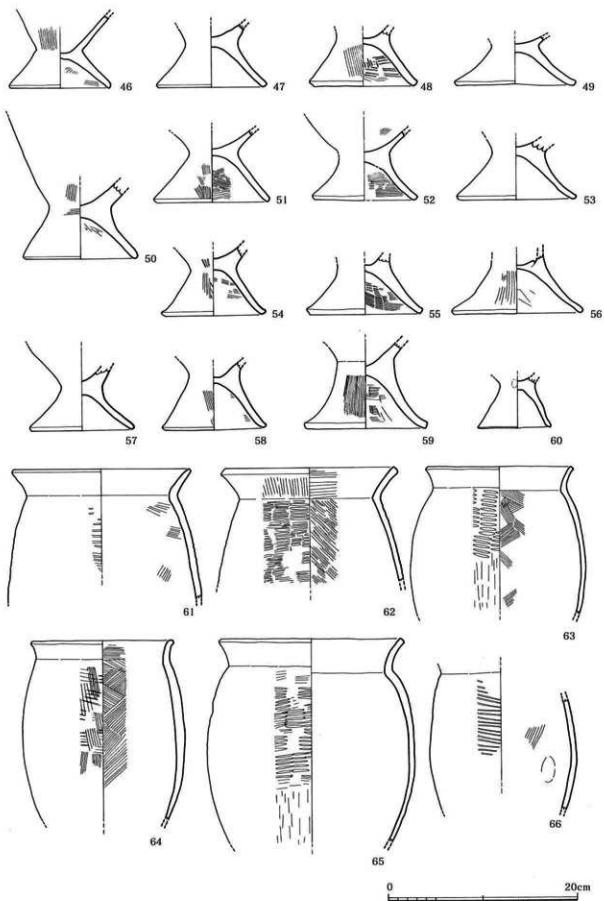


Fig. 33 土器 3

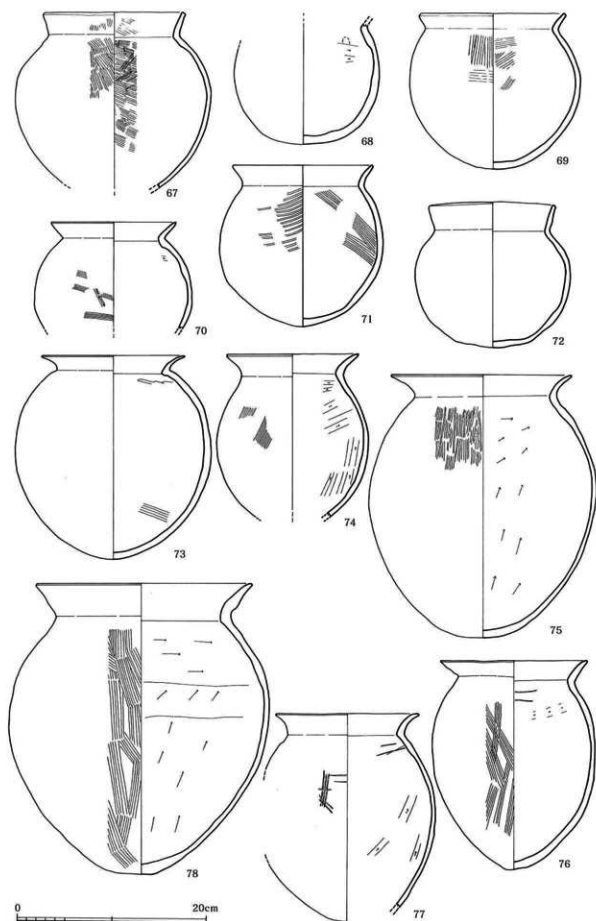


Fig. 34 土器 4

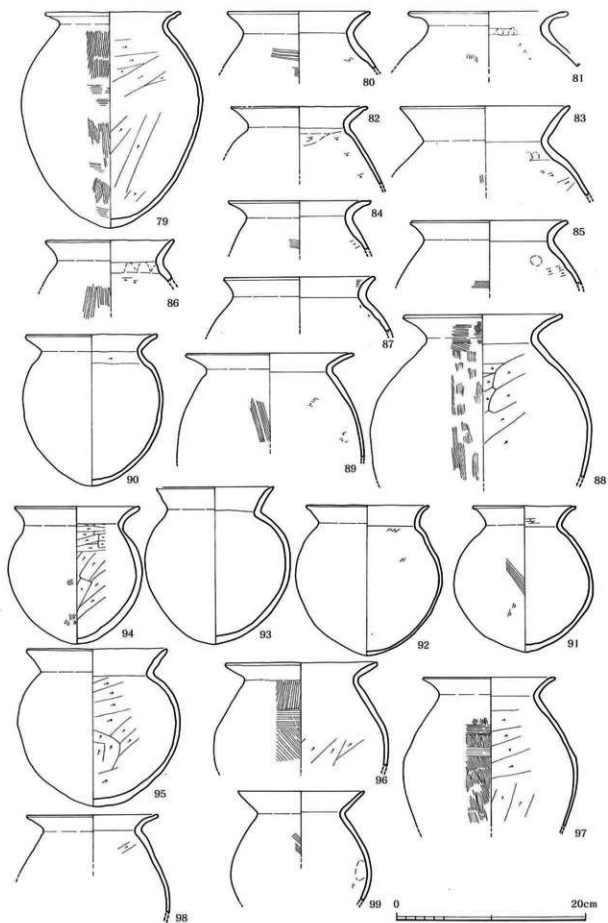


Fig. 35 土器 5

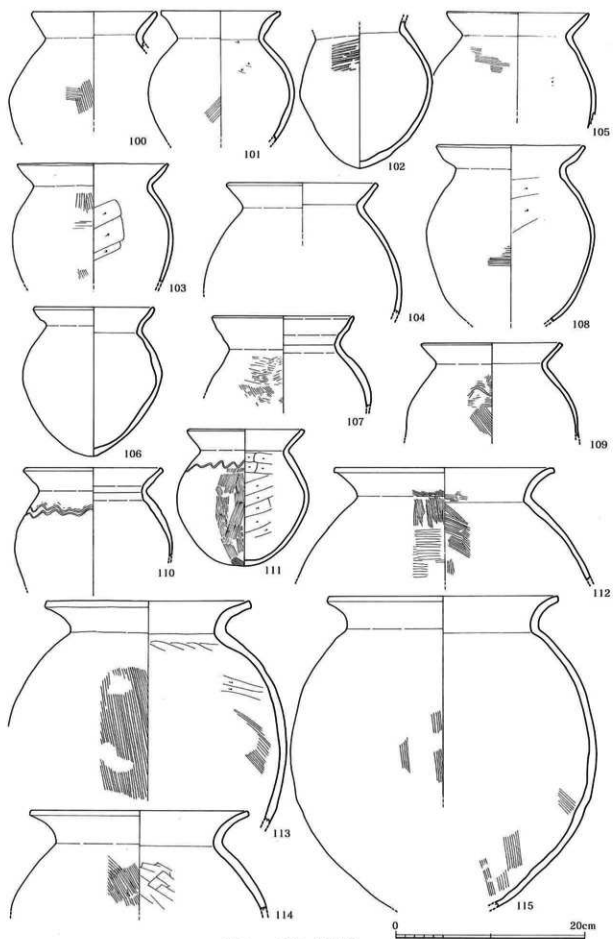


Fig. 36 土器 6

壺 (Fig 37~40 118~167)

壺は50点掲載している。出土地点の内訳はSD-08が40点、SD-09が9点、SK-35が1点、出土地点不明のものが1点である。大部分が口縁部のみの出土である。

SD-08出土土器 (118~125、128~135、139~149、152、156~162、164)

118から125は複合口縁壺である。118は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部は短くほぼ垂直に立ち上がり、その後くの字に屈曲しラッパ状に開く。頸部と口縁部の境で最も外側に張り出し、そこから内側へ屈曲し、内湾しながら短く立ち上がる。器壁は厚く端部は丸みを帯びる。口縁部に竹管文と沈線文が交互に施文され、胴部と頸部の境には格子目状の施文を施した帯状の突帯が貼付される。119は胴部上位以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部はやや内傾気味に短く立ち上がり、そこから大きくラッパ状に開く。頸部と口縁部の境で最も外側に張り出し、そこから屈曲し内傾気味に短く立ち上がる。器壁は厚く端部は角張り内傾する。口縁部に波状文を2条施文し、頸部には断面三角形の刻目突帯を貼付する。

120は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部はくの字に屈曲してやや外傾気味に立ち上がり、その後大きくラッパ状に開く。頸部と口縁部の境で外見上は屈曲し、わずかに外反しながらほぼ垂直に立ち上がるが、内面はややくぼむ程度で端部は丸みを帯びる。

121は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部は朝顔状に開き、頸部と口縁部の境では口縁が下方へ突出する。外見上はそこからやや屈曲し外傾気味に短く立ち上がるが、内面はややくぼむ程度で端部は丸みを帯びる。122は、頸部の中位あたり以下を欠損している。頸部残存部は朝顔状に開き、頸部と口縁部の境では口縁が下方へ突出する。外見上はそこからやや屈曲しやや外傾気味に短く立ち上がるが、内面はわずかにくぼむ程度で端部は丸みを帯びる。123は胴部中位以下を欠損しているが、残存部から球形の胴部を持つものと思われる。頸部でくの字に屈曲し大きく開く。口縁部下で外見上は複合口縁の形状を呈するが、内面は口縁端部まで直線的に開き端部はやや角張る。124は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部から緩やかに開き、中程で屈曲しそこからさらに開く。屈曲部には突帯状の突出が見られる。端部は外傾しやや丸みを帯びる。125は124と同様の形状を呈するが、中程での屈曲がやや弱く端部が角張る。128から134は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。128は胴部と頸部の境のしまりが弱く、そこから内湾しながら立ち上がり、口縁直下で短く外反する。口縁端部は外傾し角張る。129は、頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。口縁端部は下半部がやや外側に突出する。頸部と胴部の境にハケ状工具の端部による刻目を施した断面三角形の突帯を貼付する。130は頸部はやや外傾気味に立ち上がり、口縁直下で大きく外反する。口縁端部は角張り斜文を連続して施す。131は頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。口縁端部は角張り斜文を連続して施す。132は頸部は垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。133は頸部は垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。端部は角張りやや下方へつまみ出される。胴部と頸部の境にヘラ状工具の先端で列点文が施される。134は頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。端部はやや下

方に突出し斜文を連続して施す。135は胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部は縦長の球形を呈し、胴部と頸部の境は強くしまる。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し大きく開く。端部はやや上方につまみ出され斜文を連続して施す。胴部と頸部の境にはへら状工具の先端で列点文が施される。139と140は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。139は頸部は外傾気味に開き、口縁直下でわずかに外反して短く開く。端部は丸みを帯びる。140は頸部はやや外傾気味に開き、口縁直下でわずかに外反して短く開く。端部は角張り下方にわずかに肥厚する。141は胴部中位以下を欠損しているが、球形の胴部を有すると思われる。頸部は短くほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部はやや丸みを帯び竹管文を連続して施す。胴部と頸部の境にも同様に竹管文を連続して施す。142は胴部中位以下を欠損しているが、胴部は縦長気味の球形を呈するものと思われる。頸部は外傾しながら立ち上がり口縁部直下で外反し短く開く。端部は角張りわずかに下方に突出する。胴部と頸部の境には棒状工具による列点文が施される。143から148は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。143は頸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部はやや丸みを帯びる。144は頸部は外傾しながら短く立ち上がり、その後わずかに外反して短く開く。端部はやや丸みを帯びる。145は頸部はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部は角張り下方がわずかに外側へ突出する。146は頸部はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部は角張り中央部がわずかにくぼむ。147は頸部はやや外傾しながら立ち上がり口縁部直下で外反して開く。端部は丸みを帯び、胴部と頸部の境には列点文が施される。148は頸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反して開く。端部は内傾し下方が外側に突出する。胴部と頸部の境には列点文が施される。149は胴部中位以下を欠損しているが著しく長胴な胴部を有すると思われる。頸部は外傾しながら短く立ち上がりその後外反して開く。口縁端部は上下に肥厚し中央がややくぼむ。胴部と頸部の境には断面三角形の刻目突帯を貼付し、口縁端部にはハの字状の施文を連続して施す。152は胴部下位以下及び頸部から口縁部にかけて欠損しているが、縦長の球形の胴部を有する壺と思われる。156から160は頸部から口縁部にかけてやや外傾気味に短く立ち上がり口縁部は開かない。口縁端部は丸みを帯びるものが多く、胴部は球形を呈するものと思われる。161と162は胴部中位以下を欠損しているが扁平な球形の胴部を有するものと思われる。胴部と頸部の境のしまりは強くそこからほぼ直線的に短く開く。端部はやや丸みを帯びる。164は球形の胴部に平底気味の丸底を有する。胴部と頸部の境のしまりは強く、頸部はそこからほぼ垂直に短く立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部は下方がやや外側へ張り出す。胴部と頸部の境には突帯状の段を有する。

SD-09出土土器(126、127、136~138、153~155、163、165~167)

126は複合口縁壺である。胴部中位以下を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。胴部と頸部の境はよくしまり、頸部はそこから短く直立する。口縁部直下でくの字に屈曲して開き、その後さらに段状に屈曲して開く。口縁端部はやや丸みを帯びる。127は複合口縁壺の口縁部である。口縁部直下ではほぼ直角に屈曲しそのまま直立する。端部は丸みを帯びる。136から

138は頸部以下を欠損している。136は頸部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反し大きく開く。端部は角張り口唇部に部分的に縦方向の沈線を連続して施す。137は頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下で外反して大きく開く。端部は角張り口縁部内側に二個一組の円形の貼付文を貼付する。138はほぼ垂直に立ち上がる頸部から外反して大きく開く口縁部を有する。口縁端部は角張り、口縁部内側に二個一組の円形の貼付文を五箇所に貼付し、その間に櫛描の文様を施文する。153と154は、胴部上位以下を欠損しているが球形の胴部を有するものと思われる。頸部は強くしまり、そこからやや外反気味に開く。端部はやや丸みを帯びる。155は胴部中位以下を欠損しているが球形の胴部を有するものと思われる。頸部でくの字に屈曲しやや内湾しながら開き端部は角張る。163は胴部上位以下を欠損しているが、扁平な球形の胴部を有するものと思われる。胴部と頸部の境のしまりは強く、そこからほぼ直線的に開く。口縁端部はやや丸みを帯びる。肩部に櫛描波状文を施し、その上に櫛描文をほぼ水平に施す。165と166は長頸壺と思われる。165は底部は丸底で、胴部は中位で大きく外側へ張り出し頸部との境で強くすばまり、断面形状はそばん玉状を呈する。頸部はそこからほぼ直立するものと思われるが、頸部から口縁部にかけて欠損しているため詳細は不明である。166は底部は平底気味の丸底で、胴部はやや扁平気味の球形を呈する。胴部と頸部の境のしまりは強く、頸部はやや外傾気味に立ち上がる。口縁部の形状は欠損のため不明であるが、頸部からそのまま直線的に立ち上がるものと思われる。167は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部はほぼ垂直に長く立ち上がり、口縁直下で屈曲しやや内湾気味に短く開く。端部は角張る。

SK-35出土土器(150)

150は胴部上位以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。胴部と頸部の境のしまりは強く、そこからやや外傾気味に立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。口縁端部は角張りやや下方に突出する。胴部と頸部の境には断面三角形の突帯を貼付し、その上下に列点文を施す。

出土地点不明土器(151)

151は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部はやや外傾気味に立ち上がり口縁部直下で外反して短く開く。端部は上下にわずかに肥厚し口唇部には縦方向の沈線を連続して施す。胴部と頸部の境には断面三角形の突帯を貼付し、その下方に列点文を施す。

鉢(Fig 40~43 168~270)

鉢は103点掲載している。出土地点の内訳はSD-08が54点、SD-09が38点、SK-35が6点、出土地点不明のものが5点である。

SD-08出土土器(168~180、186、199~201、203、205、206、215、216、218、222、224、225、227、229、230、237、240~246、252~255、260~270)

168から172は、丸底もしくはやや尖底気味の丸底に、浅く扁平な胴部を有する。口縁部は短く、直立もしくはわずかに開き、端部は丸みを帯びる。173、174は、やや尖底気味の丸底に、浅く扁平な胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲して短く開き、端部はわずかに丸みを帯びる。175から178は、やや尖底気味の丸底に、浅く扁平な胴部を有する。口縁部は屈曲して内湾気

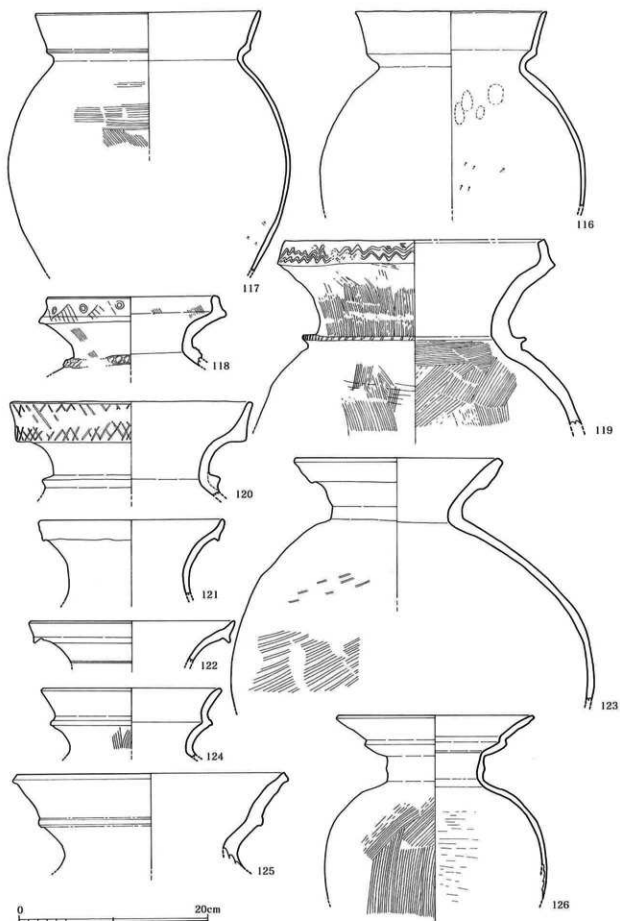


Fig. 37 土器 7

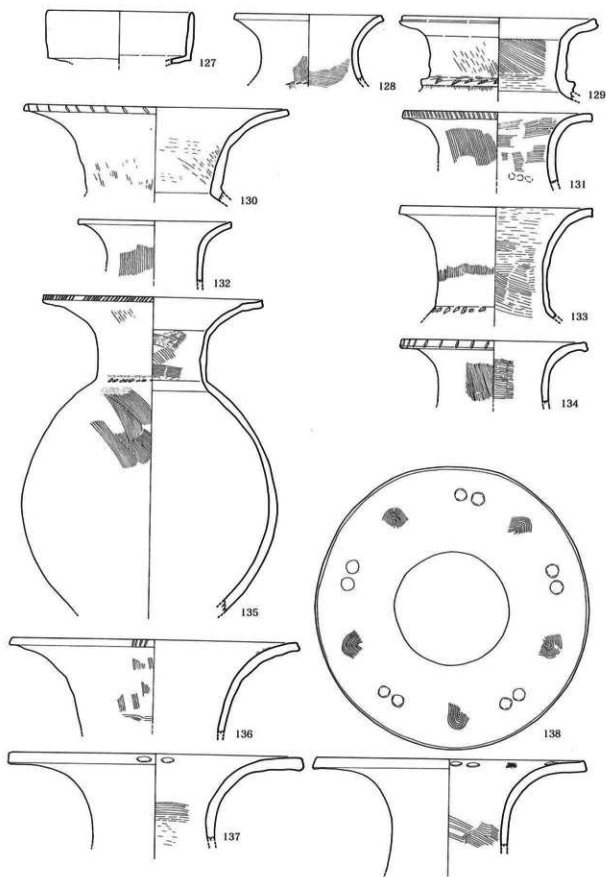


Fig. 38 土器 8

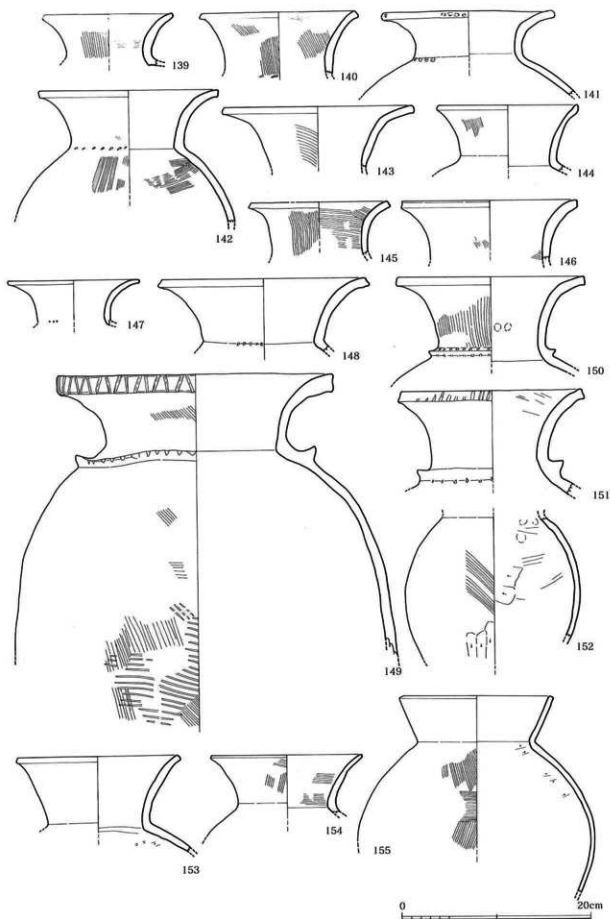


Fig. 39 土器 9

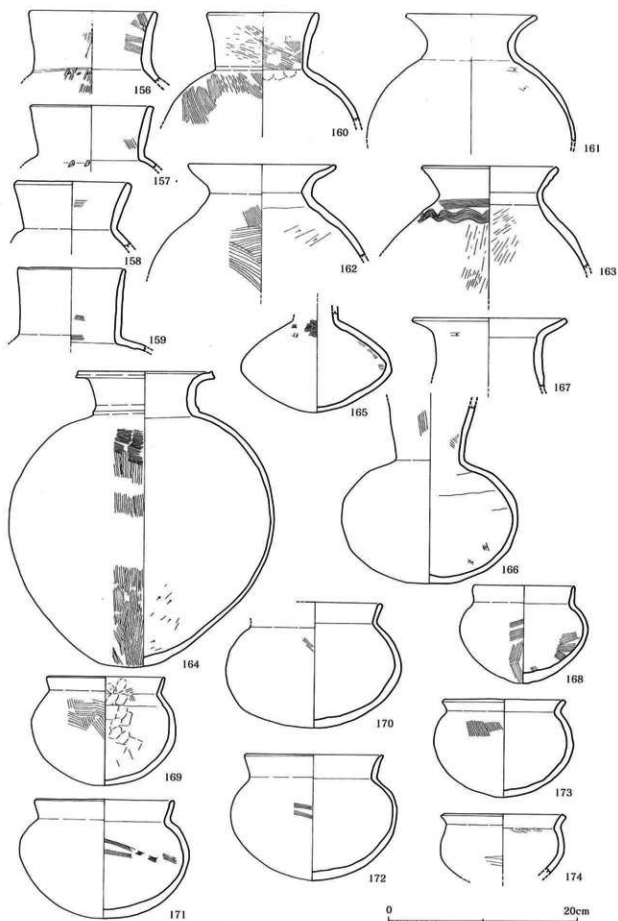


Fig. 40 土器10

味に立ち上がる。175はほぼ垂直に立ち上がり、176、177はやや開き気味である。両者とも端部はやや丸みを帯びる。178は口縁部を欠損しているため不明である。179は丸底の底部に浅く扁平な胴部を有する。口縁部は頸部で多少屈曲して外傾気味に開くが、端部は欠損のため不明である。180は尖底気味の丸底に、やや扁平な球形の胴部を有する。口縁部は短く直立し端部は丸みを帯びる。186は胴部中位以下を欠損しているが、浅く扁平な胴部を有すると思われる。口縁部はくの字に屈曲して短く開き端部は丸みを帯びる。199は丸底の底部に浅く扁平な胴部を有し、口縁部は短く直立し端部はやや丸みを帯びる。200は丸底の底部に扁平な胴部を有する。最大径を下方に有するためやや下膨れ気味の形状を呈する。口縁部は頸部で多少屈曲し、やや外傾気味に短く開き端部は丸みを帯びる。201は丸底の底部に浅く扁平な胴部を有する。口縁部は長く直立し端部は丸みを帯びる。203は胴部中位以下を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開き、端部はやや丸みを帯びる。205は、底部は平底で胴部は中位やや上に最大径を有する。口縁部は頸部で多少屈曲し、短く外傾気味に開き端部は丸みを帯びる。206は底部を欠損しているが尖底気味の丸底を呈するものと思われる。胴部は中位やや上で最大径となり、そこから口縁部に向かってややすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し短く開く。端部は丸みを帯びる。215は大型の鉢である。底部は平底で、そこから内湾しながら立ち上がり胴部上位で最大径となる。頸部で多少すぼまり、口縁部はくの字に屈曲して短く開き、端部は角張る。216は胴部上位以下を欠損している。口縁部はくの字に屈曲して短く開き、端部は丸みを帯びる。218は山陰系の複合口縁鉢である。胴部下位以下を欠損している。222は胴部中位以下を欠損しているが、半球形の胴部を有するものと思われる。口縁部は小さく外反する程度で端部は角張る。224は胴部下位以下を欠損している。口縁部は胴部から直行してそのまま開き、端部はやや肥厚し丸みを帯びる。225は丸底の底部から丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部直下でわずかに外反する。口縁部は端部に向かって薄くなり丸みを帯びる。227は平底の底部から丸みを帯びてやや開き気味に浅く立ち上がる。端部は薄くなり丸みを帯びる。229は浅い半球形を呈し、端部は角張る。230は浅めの半球形を呈し、端部は薄くなり丸みを帯びる。237は丸底の底部からやや丸みを帯びながら大きく開く。口縁端部はやや薄くなり丸みを帯びる。240は底部を欠損しているが半球形を呈するものと思われる。口縁端部はやや外傾し角張る。241は浅い半球形を呈する。胴部中位から端部にかけて薄くなり、端部は外傾し角張る。242は丸底の底部から多少丸みを帯びながら開く。端部は外傾し角張る。243は丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位で最大径となる。そこから端部に向かって丸みを帯びながら多少すぼまる。口縁端部は内傾し角張る。244は浅い半球形を呈するが、口縁端部直下でわずかに内傾する。端部はほぼ水平で角張る。245は平底気味の底部から多少開きながら立ち上がり、口縁部直下でわずかに開き端部は丸みを帯びる。246は丸底の底部から端部に向かって多少開きながら立ち上がる。端部は多少薄くなり丸みを帯びる。248は丸底の底部から丸みを帯びながら開き、胴部中位から直立する。端部は丸みを帯びる。249は平底の底部から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位からすぼまる。端部は内傾し角張る。252から255は小型の脚付鉢である。252は脚部を欠損している。胴部は浅い半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。253はハの字に開く短い脚を有し、胴部は多少丸みを帯びやや開きながら立ち上がる。端部は丸みを帯びる。254は脚部を欠損して

いる。胴部は半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。255は浅い半球形を呈するが口縁部直下でやや外側へ開く。端部は丸みを帯びる。260は傾斜した平底から丸みを帯びて立ち上がり、口縁直下で外反して短く開く。端部は丸みを帯びる。261から270は大型の脚付鉢の脚部である。261から267はハの字に短く開き、脚部の裾は外反して開く。外底面と脚部との境は明瞭で、脚端部は角張るか多少丸みを帯びる。265には3箇所に円孔が穿たれており、261、262、267は二個一對の円孔が同じく3箇所に穿たれている。268から270はやや高めの脚で、ハの字に開き裾端部はやや丸みを帯びる。

SD-09出土土器 (181~185、187~198、204、207~211、213
214、219~221、213、214、219~221、223、226、228、231、
234~236、238、239、250)

181は丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がる。胴部中位やや上で最大径となり、そこから頸部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに内湾しながら開き、端部は丸みを帯びる。182から185は丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がる。胴部上位で最大径となり、そこから頸部に向かって多少すばまる。口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は薄丸みを帯びる。187から189はやや尖底気味の丸底から多少丸みを帯びて立ち上がる。胴部中位やや上で最大径となり、頸部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し短く開く。端部は薄くなり丸みを帯びる。190は扁平な球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに内湾しながら開く。端部は薄くなり丸みを帯びる。191から194は浅い球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し短く開き、端部は丸みを帯びる。195は浅く扁平な球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに内湾しながら開く。端部は丸みを帯びる。196は扁平な球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲しやや外反しながら開く。端部は丸みを帯びる。197は尖底気味の丸底からやや丸みを帯びて立ち上がる。胴部中位で最大径となり、そこから頸部に向かって多少すばまる。口縁部はくの字に屈曲し、端部は丸みを帯びる。198は尖底気味の丸底からやや丸みを帯びて立ち上がる。胴部上位で最大径となり、そこから頸部に向かって短くすばまる。口縁部はくの字に屈曲し、端部は薄くなり角張る。204は球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、外反しながら開く。端部は薄くなり丸みを帯びる。207は深い半球形を呈し、口縁部直下でわずかに開く。端部は丸みを帯びる。208は浅い半球形を呈する。口縁直下でわずかに開き端部は角張る。209は尖底気味の丸底で、丸みを帯びながら立ち上がり頸部でわずかにすばまる。口縁部は多くの字に屈曲し、内湾しながらやや開き気味に立ち上がる。端部は丸みを帯びる。210は半球形の胴部を有し、頸部でわずかにすばまる。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに外反しながら開く。端部は丸みを帯びる。211は平底気味の丸底で、胴部は浅く頸部でわずかにすばまる。口縁部はくの字に屈曲し開く。端部は丸みを帯びる。212は扁平な半球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、端部は丸みを帯びる。213は平底気味の丸底で、やや丸みを帯びて立ち上がる。胴部中位やや上で最大径となり、そこから頸部に向かってややすばまる。口縁部はくの字に屈曲し開き、端部は薄くなり丸みを帯びる。214は、丸底の底部から頸部に向かってわずかに丸みを帯びながら直立する胴部を有する。口縁部はそこから外反して短く開く。端部は丸みを帯びる。219は山陰系の複合口縁鉢である。220、221は浅い半球形の胴部を有し、口縁部は外反して開く。2

21は口縁部がわずかに内湾する。両者とも端部は丸みを帯びる。223は半球形の胴部を有し、口縁部は多少外反して開く。端部は丸みを帯びる。226は平底の底部から多少外傾しながら立ち上がる胴部を有する。端部は薄くなり角張る。228は平底の底部から丸みを帯びて開く浅い胴部を有する。端部は丸みを帯びる。231は半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。234から236は浅い半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。238は丸底の底部から直線的に開く浅い胴部を有し、端部は丸みを帯びる。239は丸底の底部から直線的に立ち上がる胴部を有し、端部は角張る。

250はやや尖底気味の丸底からやや外傾気味に立ち上がり、口縁端部直下でわずかにすばまる。端部は角張る。

SK-35出土土器 (202、217、232、233、247、256)

202は浅い胴部に著しく長大な口縁部を有する。底部は尖底気味の丸底で、胴部中位やや上で最大径となり、そこから頸部に向かってすばまる。口縁部はやや外傾気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。217は大型の鉢である。胴部中位以下を欠損しているため胴部の形状は不明である。胴部最大径部から頸部に向かって多少すばまり、口縁部はくの字に屈曲して短く開く。端部は角張る。232、233は半球形の胴部を有し、端部は薄くなり丸みを帯びる。247は平底気味の丸底から丸みを帯びて立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。256は小型の脚付鉢であるが、脚部は欠損している。胴部は浅い半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。

出土地点不明土器 (212、251、257~259)

212は浅い半球形の胴部を有し、口縁部は外反してわずかに内湾気味に開く。端部は丸みを帯びる。251は平底の底部から丸みを帯びて立ち上がり端部は丸みを帯びる。257、258は小型の脚付鉢である。257は短くハの字に開く脚を有し、胴部は半球形を呈する。端部は丸みを帯びる。258は脚部を欠損しているが、ハの字に開くやや高めの脚を有するものと思われる。胴部は半球形を呈し、口縁端部はやや薄くなり丸みを帯びる。259は高台状の平底を有し、胴部は半球形を呈する。端部は角張る。

高坏 (Fig44~46 271~307)

高坏は37点掲載している。出土地点の内訳は、SD-08が26点、SD-09が9点、SD-35が2点である。

SD-08出土土器 (271~275、277~295、298、305)

271から275は大型の高坏である。脚部は、ほぼ直立する筒部に屈曲して拡がる裾部を有し、裾部には円孔が穿たれている。坏部は浅く、口縁部との間に明瞭な段を有し、上半部は外反して開く。口縁部はやや肥厚し丸みを帯びる。脚部は直立する筒部にハの字に開く裾部が付く。裾上部に円孔を有する。277、278は前者より小型化し、坏部と口縁部の間の段が不明瞭になる。口縁部は端部に向かって薄くなり丸みを帯びる。279から282は、深めの丸みを帯びた坏部を有し、口縁部はやや屈曲して開き端部は角張る。脚部は欠損しているものが多いが、ハの字に開き端部付近でさらに開く形状を呈し、端部は角張るものと思われる。283から285は浅い半球形の坏部から口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は角張る。脚部の形状は欠損のため不明である。286は坏、脚部ともに段を有する。坏部は脚部から屈曲して開き、その後短くほぼ直立する。口縁部はさらに屈曲して拡がり端部は角張る。脚部は筒部が直立し、裾部は筒部から短く水平に開

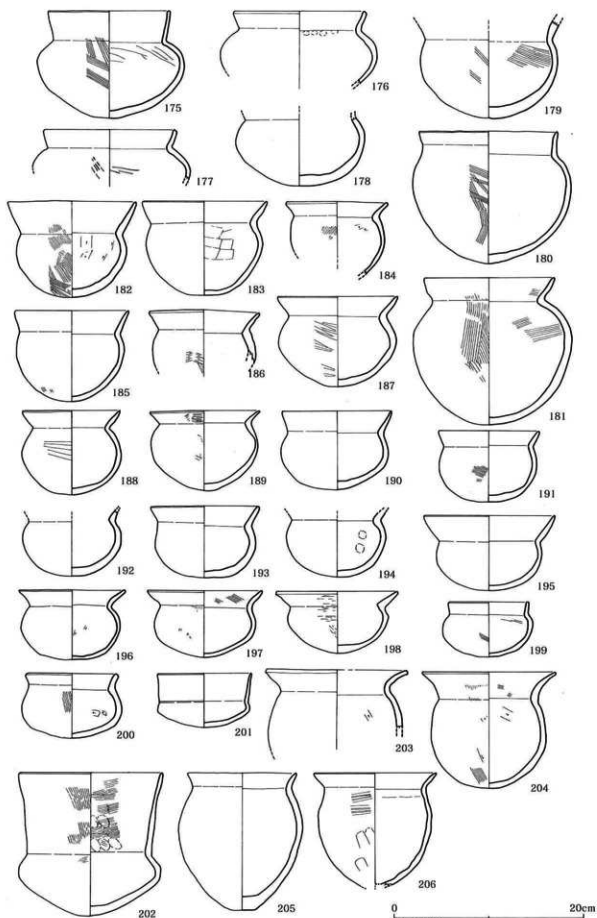


Fig. 41 土器11

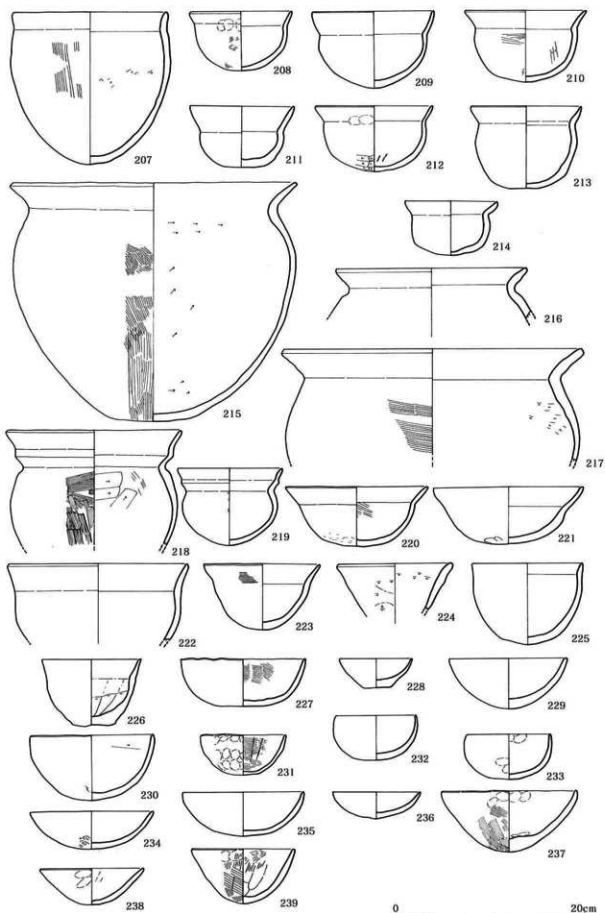


Fig. 42 土器 12

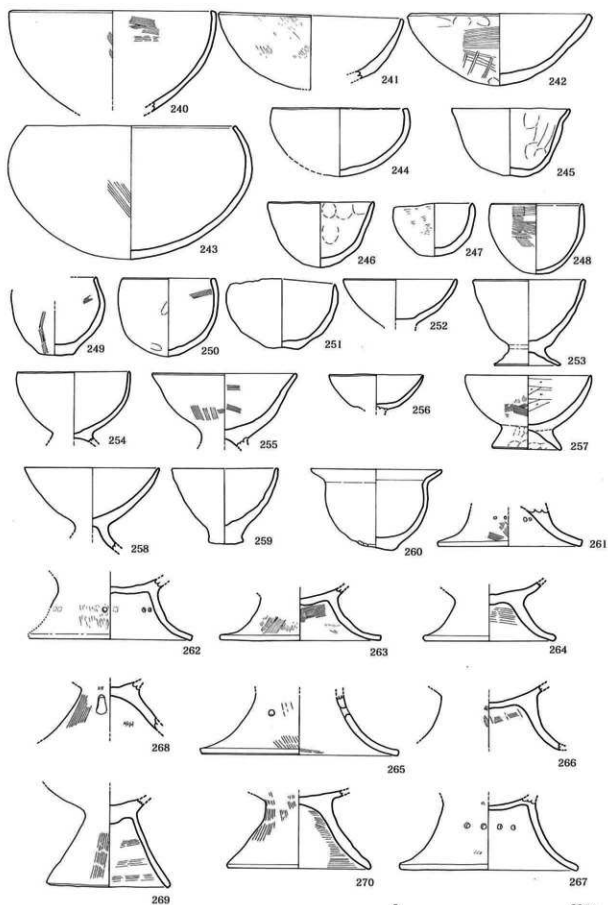


Fig. 43 土器13

き、段を形成してそこから内湾しながら拡がる。287、288は286と同様に坏部に段を有するが、脚部については欠損のため不明である。289、290は286と同様に脚部の裾に段を有する。289は裾部の下段に、290は裾部の上・下段に円孔を有する。291から294は、丸みを帯びた坏部に大きく開く口縁部を有し、端部は丸みを帯びる。脚部は、裾部に向かって多少開く筒部を有するが、裾部の形状は欠損により不明である。295は坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、そこから外半気味に開き端部は丸みを帯びる。脚部は裾部に向かって多少開く筒部を有するが、裾部は欠損のため不明である。298は、坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、そこから直線的に大きく開き、端部は丸みを帯びる。

SD-09出土土器 (276、296、297、299、300、302~304、307)

276は大型高坏の脚部である。筒部はほぼ直立し、ハの字に開く裾部が付く。裾上部に円孔を有する。296、297は坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、296は口縁端部付で外反して開き297は内湾しながら開く。両者とも端部は丸みを帯びる。脚部は裾部に向かって多少開く筒部を有するが、裾部は欠損のため不明である。299、300、302は坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、そこから屈曲して直線的に大きく開き、端部は丸みを帯びる。脚部は、裾部に向かって多少開く筒部に屈曲して大きく開く浅い裾部が付く。303、304は前者と同様の脚部である。307は脚部を欠損している。坏部は丸みを帯びて拡がる底部から内側に屈曲し、内湾しながら立ち上がり、端部は角張る。脚部は裾部に向かってやや内湾気味に開く。坏屈曲部に刻目を連続して施し、その上部に二個一対の円形の貼付文を4箇所貼付する。また脚の上部には円孔を穿っている。

SK-35出土土器 (301、306)

301は坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、そこから屈曲し大きく開き、端部は丸みを帯びる。

小型丸底壺 (Fig 46~47 308~340)

小型丸底壺は33点掲載している。出土地点の内訳は、SD-08が3点、SD-09は26点、SK-35が2点、出土地点不明のものが2点である。

SD-08出土土器 (318、330、331)

318は球形の胴部に平底の底部を有する。頸部はよくしまり、口縁部はくの字に屈曲して開き端部は角張る。330は胴部下位以下を欠損している。球形の胴部を有し、頸部はややしまる程度である。口縁部はくの字に屈曲し外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味である。331は胴部中位以下を欠損している。頸部のしまりが弱く、口縁部はくの字に屈曲して短く開く。端部は丸みを帯びる。

SD-09出土土器 (308~316、319~326、329、332~335、337~340)

308、309は、尖底気味の丸底から丸みを帯びて立ち上がり、胴部上位で最も張り出す。頸部はややしまり、口縁部はくの字に屈曲して外傾気味に長く立ち上がる。口縁端部は、308が尖り気味で、309はやや丸みを帯びる。310から313は浅い半球形の胴部に丸底の底部を有する。頸部のしまりは弱く、口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は尖り気味である。314から316は浅い胴部に丸底の底部を有する。頸部は多少しまり、口縁部はくの字に屈曲し、内湾しながら

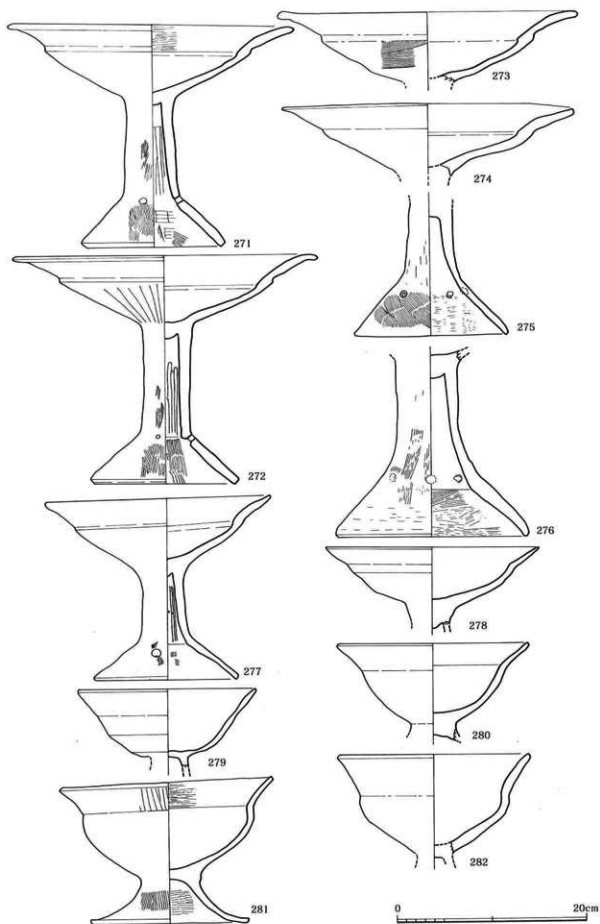


Fig. 44 土器14

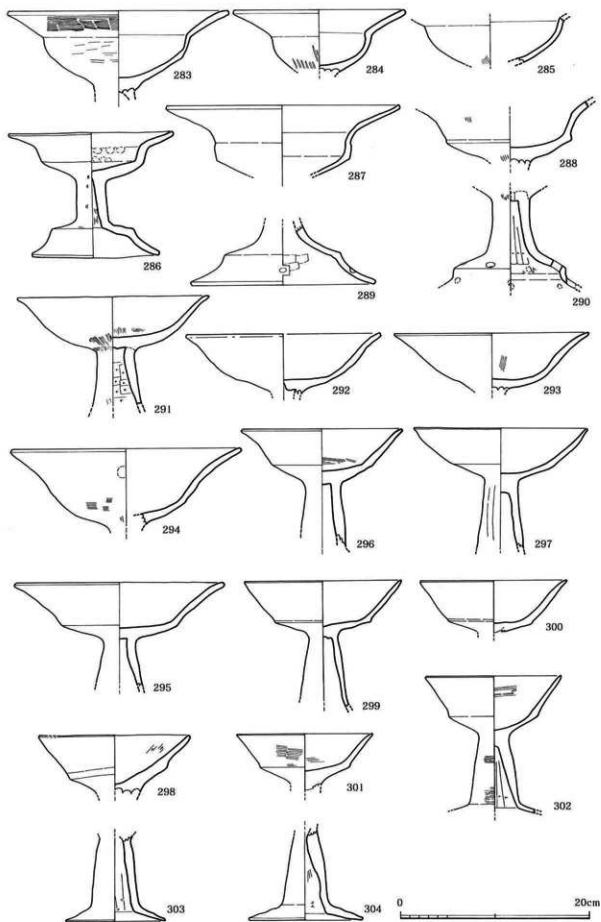


Fig. 45 土器15

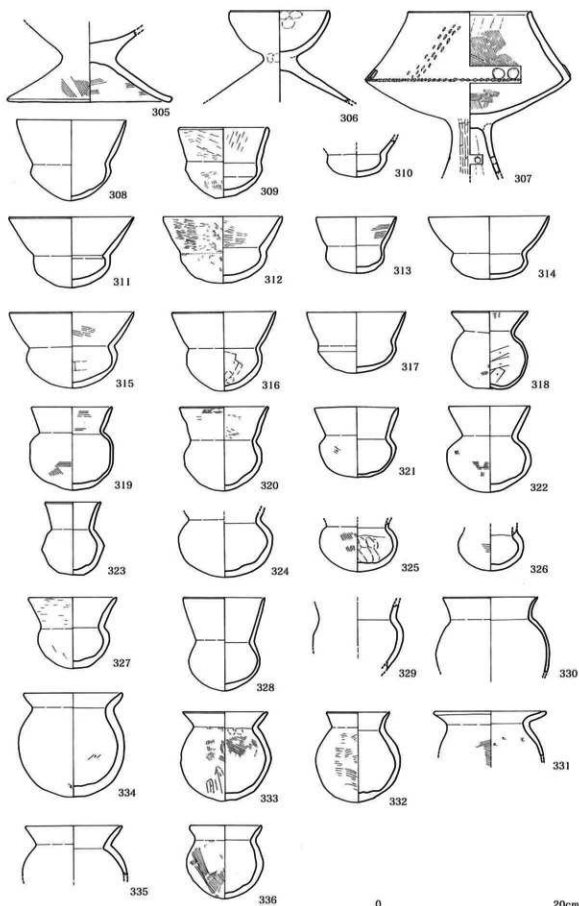


Fig. 46 土器16

ら開き、端部は尖り気味である。319から321はやや扁平な円形の胴部に丸底の底部を有する。頸部は多少しまり、口縁部はくの字に屈曲して外傾気味に立ち上がる。端部は丸みを帯びる。

322はやや扁平な胴部に丸底の底部を有する。頸部はよくしまり、口縁部はくの字に屈曲し外傾しながら立ち上がる。端部は丸みを帯びる。323は、平底の底部から多少丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位で最も張り出す。頸部はよくしまり、口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。324から326は口縁部を欠損している。扁平な球形の胴部に丸底の底部を有する。329は口縁部及び胴部下位以下を欠損しているが、球形の胴部に尖底気味の丸底を有するものと思われる。頸部はややしまる程度である。332から335は、球形の胴部に丸底の底部を有する。頸部はややしまり、口縁部はくの字に屈曲して短く開く。口縁端部は尖り気味若しくは丸みを帯びる。337は平底気味の底部からやや丸みを帯びて立ち上がる。頸部はほとんどしまらず、口縁部は短く外反し、端部は丸みを帯びる。338は平底の底部から屈曲し外傾しながら立ち上がり、胴部上位で最大径となる。頸部のしまりは弱く、口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は尖り気味である。339は、丸みを帯びた扁平な胴部に平底の底部を有するが、底部が多少下方に突出している。頸部のしまりは弱く、口縁部は多少屈曲して外傾気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。340は丸みを帯びた扁平な胴部に平底の底部を有する。頸部はほとんどしまらず、口縁部はわずかに外傾して立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。

SK-35出土土器 (327、336)

327は浅い球形の胴部に平底気味の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに外反しながら開く。端部は丸みを帯びる。336は球形の胴部に尖底気味の丸底を有する。口縁部はくの字に屈曲して短く開き、端部は丸みを帯びる。

出土地点不明土器 (317、328)

317は浅い胴部に丸底の底部を有する。胴部上位で内側に多少屈曲し頸部にいたる。口縁部は多少外反し、内湾気味に立ち上がる。328は球形の胴部に尖底気味の丸底を有する。頸部はややしまり、長い口縁部がやや外傾して立ち上がる。端部は丸みを帯びる。

小型壺 (Fig 47 341~357)

小型壺は17点掲載している。出土地点の内訳は、SD-08が5点、SD-09が10点、SK-35が2点である。

SD-08出土土器 (347~350、357)

347から350は、尖底気味の丸底で、胴部は中位やや上から上位で最も張り出し、そこから頸部に向かってすぼまる。頸部から口縁部にかけての形状は欠損のため不明である。357は扁平な胴部に尖底気味の丸底を有する。胴部中位に最大径を有し、頸部のしまりは強い。口縁部の形状は欠損のため不明である。

SD-09出土土器 (341~345、351~355)

341から343は、丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位やや上で最大径となる胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、外傾しながら立ち上がる。口縁端部は、341、342は丸みを帯び、343は内傾する。344は球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲して開き、口縁端部は丸みを帯びる。344は扁平な球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁

部はくの字に屈曲して開き、口縁端部は丸みを帯びる。351は丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がり胴部中位やや上で最も張り出し、そこから頸部に向かってすばまる。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開くが、端部を欠損しているため形状は不明である。352、353は球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は丸みを帯びる。354、355は複合口縁を有する小型壺である。354はやや扁平な球形の胴部に丸底の底部を有する。頸部は屈曲して短くほぼ垂直に立ち上る。一次口縁はほぼ水平に短く開き、二次口縁部はやや外反しながら短く開き、端部は丸みを帯びる。355はやや扁平な球形の胴部に丸底の底部を有する。頸部でくの字に屈曲して短く開き、その後内側に屈曲し、丸みを帯びる端部はほぼ直立する。

SK-35出土土器 (346、356)

346は球形の胴部に平底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲しやや外傾気味に開き、端部は丸みを帯びる。356は丸底の底部から丸みを帯びながらほぼ直立し、胴部上位で頸部に向かって屈曲しすばまる。頸部はやや内傾気味に短く立ち上がる。

ミニチュア土器 (Fig 47 358~388)

ミニチュア土器は31点掲載している。出土地点の内訳は、SD-08が4点、SD-09が25点、SK-35が1点、出土地点不明のものが1点である。

SD-08出土土器 (379~381)

379は脚台を有する鉢状の形状を呈するものと思われる。380は浅鉢の形状を呈する。381はやや大型で底部は尖底気味である。

SD-09出土土器 (358~378、382~385)

358は平底の壺の形状を呈する。359から374は鉢の形状を呈する。平底あるいは平底気味で口縁部が短く開くもの、平底で胴部から口縁部に向かって直立するもの、丸底あるいは尖底気味の丸底で、底部から口縁部に向かって開くもの、尖底気味の丸底で、口縁部が内傾し、ややすばまるものが見られる。375から378は脚付鉢の形状を呈する。382から385はやや大型であるがミニチュア土器として扱った。382と385は鉢、383と384は壺の形状を呈する。

SK-35出土土器 (388)

388は壺の形状を呈する。口縁部から頸部にかけて欠損している。

出土地点不明土器 (387)

387は脚付鉢の形状を呈する。胴部は直線的に開き、短い脚を有する。

器台 (Fig 48 389~400)

器台は12点掲載している。出土地点の内訳はSD-08から7点、SD-09から3点、SK-35から1点、出土地点不明のものが1点である。

SD-08出土土器 (389~391、393、394、398、399)

389は、口縁部が外反し、筒部は裾部に向かってやや開き気味で、裾部は外反しながらハの字に開く。裾端部がわずかに内湾し端部は丸みを帯びる。390は、口縁部が外反し、筒上部のくびれ部から裾部に向かって内湾しながら開く。口縁、裾ともに端部は角張る。391は口縁部が短く外反し、筒部は裾部に向かってわずかに内湾しながら開く。裾端部は角張り水平を成す。393、394は山陰系の鼓形器台で筒部が短い。398、399は中央部がややくぼむ皿状の受け部に、

ほぼ直立する脚部と屈曲してわずかに内湾しながら開く裾部を有する。受け部、裾部ともに端部は丸みを帯びる。

SD-09出土土器 (395, 396, 400)

395、396は直線的に短く開く浅い受け部に、円錐状の台部を有する小型器台である。受け部、台部ともに端部は丸みを帯びる。

SK-35出土土器 (392)

392は口縁部がくの字に屈曲して開き、筒部は裾部に向かってわずかに内湾しながら開く。

出土地点不明土器 (397)

397は直線的に短く開く平坦に近い受け部に、低い台部を有する小型器台である。

甔 (Fig 48 401~403)

甔は3点掲載しているが、すべてSD-08からの出土である。

401は胴部中位以上を欠損している。丸底の底部に単孔が穿たれているが、内底面側が盛り上がっていることから、形成段階で外側から穿孔されたと考えられる。402はやや尖底気味の丸底から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位やや上で最大径となる。端部はやや内傾し丸みを帯びる。底部に単孔が穿たれているが、外底面側がやや突出していることから、形成段階で内底面側から穿孔されたと考えられる。403は胴部下位以上を欠損している。丸底の底部に単孔が穿たれているが、外底面側の周辺部がくぼんでいることから、形成段階で内側から穿孔しその際の突出部を除去したものと考えられる。

特殊土器 (Fig 48 404)

口縁部及び脚部と思われる部分を欠損している。特殊な器形をしており、何らかの祭祀用の土器と思われる。

ジョッキ形土器 (Fig 48 405~408)

ジョッキ形土器はSD-08から1点、SD-09から2点出土しており、出土地点不明のもの1点所在する。

SD-08出土土器 (405)

405はジョッキ形土器の底部片である。胴部のくびれが強く、底部は鋭く屈曲してシャープな稜を持つ。

SD-09出土土器 (406, 407)

406は口縁部を欠損している。底部から鋭く屈曲し、強くくびれた後わずかに外傾しながら立ち上がる。把手を有する。407は底部から鋭く屈曲し、強くくびれた後外反して開く。把手は付かない。

出土地点不明土器 (408)

408は口縁部を欠損している。底部から鋭く屈曲し、強くくびれた後外反して開く。把手が付き、底面に焼成後に穿たれた円孔を有する。

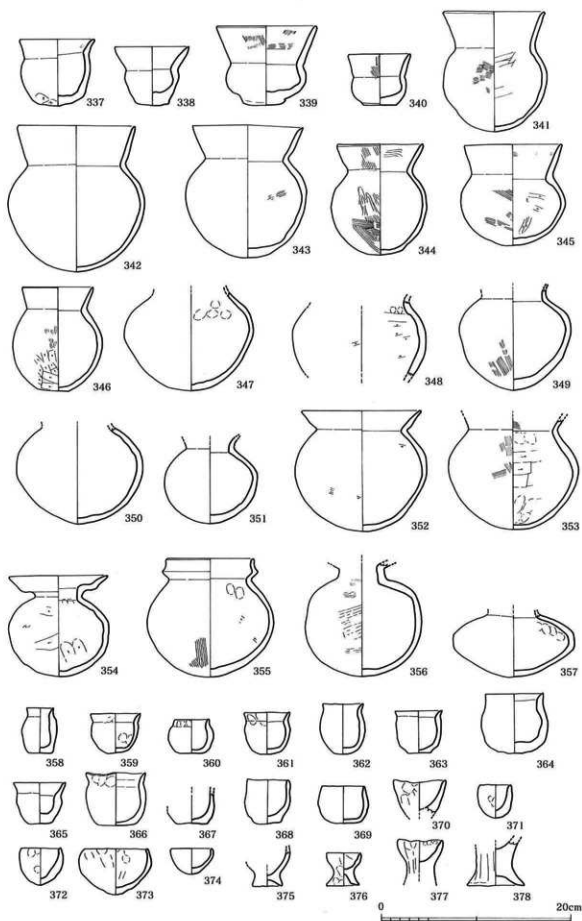


Fig. 47 土器17

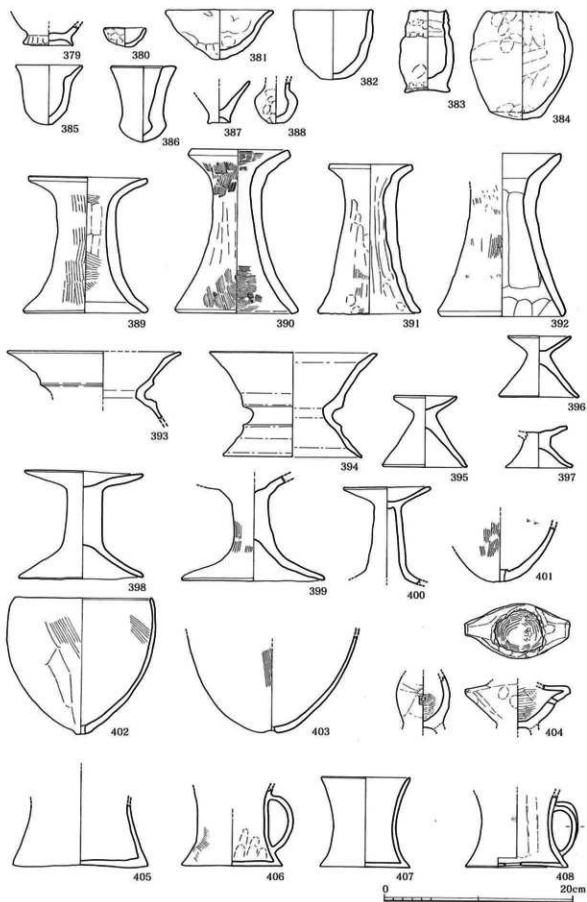


Fig. 48 土器18

3 時期不明の遺構

その他の遺構としては、土坑、溝、ピットが確認されている。遺物の大部分を紛失しているため、これらの遺構の時期は不明であるが、一部出土地点不明の中世代の土師器、白磁、青磁の小片が残存しており、おそらくその時期の遺構ではないかと思われる。

第4章 考 察

I 弥生時代中期

弥生時代中期の遺構としては42基の甕棺墓群があげられる。遺跡が大きく削平を受けているため切り合い関係がはっきりしないが、その形体から北部九州の須玖式と在地系の黒髪式が混在していると考えられる。時期としては弥生時代中期前葉から中期中葉にかけてのものと考えられる。

II 弥生時代後期から古墳時代初頭

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構としては、木棺墓2基、石棺墓1基、大型溝2本、大型の土坑1基が挙げられる。これらの内、木棺墓2基と大型溝2本は墳丘墓に伴うものである可能性が考えられる。

2基の木棺墓が主体部となり、大型溝2基が周溝としてその周囲をめぐっていると考えられる。

主体部と考えられる木棺墓2基は、周溝部(SD-O8)際に両者並んで位置している。切り合いについては、先にも述べたとおり土層断面図がまったく無いため不明であるが、平面図から推測しておそらくSM-O2がSM-O1を切っているものと思われる。両者とも攪乱が激しく副葬品が残存していないが、周溝と考えられる大型溝内から大量の土器片及び葎石状の集石部が確認されている。弥生時代後期菊池川流域の在地系土器及び古式土師器が確認されており、器種構成は、甕、壺、高坏、鉢、器台、小型丸底壺、ミニチュア土器、ジョッキ型土器等多種多様である。出土層位が不明であるため、これらの土器が同一時期のものかそうでないのかについての明確な根拠は無い。しかし他の調査事例から考えて、これらの土器が同時期に所在するとは考えにくいことから、この墳丘墓は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、ある程度時期幅をもって利用されたものと考えられる。しかし、溝内からの異常なまでの土器片の出土、墳丘が全くといって良いほど残存していないにもかかわらず木棺墓が残存している、木棺墓の位置が周溝に近すぎる、といったことからこれらの遺構はそれぞれ別の遺構であった可能性も考えられる。

III おわりに

今回調査を行った東南大門遺跡は、弥生時代中期の甕棺墓群にはじまり、その後弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、それらを一部破壊する形で墳丘墓が造営された可能性が考えられる。また、中世に段階においても多くの遺構が存在していると考えられる。しかし、調査が不十分であることや、遺物の管理不備による紛失、あるいは筆者の力不足により遺跡の全体像を把握出来ない不十分な報告となってしまった。これらについては今後の課題としたい。

末筆になりましたが、当遺跡の調査及び報告書の作成に対してご指導、ご協力いただきました皆様方にお礼を申し上げます。

表1 調査結果表

調査番号	神田番号	器械 部位	器高(cm)	口径(cm)	総長(cm)	胴径大径(cm)	色調	焼成	調査		備考
									内面	外面	
K-01	Fig.13-1	鉄・上層	29.3	43.3	10.8	-	灰色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品・一部欠品
	Fig.13-2	鉄・下層	49	-	-	-	灰褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品・一部欠品
K-02	Fig.13-3	鉄・上層	32.4	44.8	11.2	-	灰褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.13-4	鉄・下層	-	43.6	-	-	にぶい灰褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-03	Fig.13-5	鉄・上層	43.0	48.0	-	-	灰色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.13-6	鉄・下層	74.1	46.4	7.3	48.3	灰色	やや良	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-04	Fig.13-7	鉄・上層	24.7	40.0	10.5	-	にぶい灰褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.13-8	不明・下層	-	-	7.4	-	明灰褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-05	Fig.14-9	鉄・上層	21.4	37.6	10.7	-	にぶい灰褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.14-10	不明・下層	-	-	12.5	-	灰色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-06	Fig.14-11	鉄・上層	73.6	43.7	9.4	48.2	灰色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.14-12	鉄・下層	76.6	47.3	9.8	48.7	灰色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-07	Fig.14-13	鉄・上層	-	-	-	-	灰色	良	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.14-14	鉄・下層	70.2	40.0	11.0	54.5	灰色	良	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-08	Fig.15-15	鉄・不明	-	32.0	-	-	明褐色	やや良	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-09	Fig.15-16	鉄・上層	74.9	35.1	10.8	58.6	にぶい褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-10	Fig.15-17	鉄・下層	67.0	31.8	10.0	51.6	明褐色	やや良	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-11	Fig.15-18	鉄・不明	-	32.6	-	-	灰色	良	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-12	Fig.15-20	鉄・上層	43.0	28.4	6.1	28.0	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.15-21	鉄・下層	-	30.1	-	30.9	にぶい灰褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-13	Fig.16-22	鉄・上層	-	42.4	-	43.4	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.16-23	鉄・下層	-	-	8.8	-	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-15	Fig.16-24	鉄・不明	68.4	26.6	8.6	52.8	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-16	Fig.16-25	鉄・不明	-	25.8	6.9	25.0	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-17	Fig.16-26	鉄・不明	41.4	25.8	6.9	25.0	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.16-27	鉄・上層	-	24.9	-	34.4	にぶい褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-18	Fig.16-28	鉄・下層	-	-	6.0	35.6	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-19	Fig.17-29	鉄・上層	73.1	43.2	7.3	44.8	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.17-30	鉄・下層	77.9	50.9	8.5	51.9	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-20	Fig.17-31	鉄・上層	77.7	44.0	8.7	45.6	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.17-32	鉄・下層	67.9	44.7	7.3	50.0	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-21	Fig.18-33	鉄・上層	-	48.6	-	52.8	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.18-34	鉄・下層	80.7	54.0	9.4	57.1	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-22	Fig.18-35	鉄・上層	-	65.3	-	-	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.18-36	鉄・下層	97.2	65.7	12.2	64.2	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
K-23	Fig.18-37	鉄・上層	-	53.4	-	-	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品
	Fig.18-38	鉄・下層	62.5	35.6	8.7	38.6	明褐色	青	ハケム	ハケム	口縁直下2次品

製板観察表2

型番部分	種用番号	製板 部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胴部最大径 (cm)	色调	模成	調査		備考
									内面	外面	
K-24	Fig.18-39	不明・上層	-	-	-	57.6	に強い褐色	青	ハケム痕ナシ	ハケム痕ナシ	胴部中央やや上突起、胴部上位以上打ち欠き
K-25	Fig.18-40	胴・下層	100.5	82.5	13.9	65.5	褐色	青	ハケム痕ナシ	不明	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-26	Fig.19-41	胴・不明	103.2	72.8	12.0	72.4	明淡褐色	青	ハケム痕ナシ	ハケム痕ナシ	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-27	Fig.19-42	胴・不明	95.8	64.3	11.2	64.4	褐色	やや良	ハケム・ナシ	ヘラミガキ	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-28	Fig.20-43	胴・上層	50.0	36.2	7.8	37.0	に強い黄褐色	青	ナシ	ナシ	口縁部下突起
K-29	Fig.20-44	胴・下層	-	48.0	-	49.0	黄褐色	青	ナシ	ナシ	口縁部下突起
K-30	Fig.20-45	胴・上層	-	-	10.5	63.4	底淡褐色	青	ハケム痕ナシ	ハケム痕ナシ	胴部上位突起、胴部上位以上打ち欠き
K-31	Fig.20-46	胴・下層	98.3	63.2	11.7	64.7	底淡褐色	やや良	ハケム・ハケム痕ナシ	不明	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-32	Fig.20-47	胴・不明	84.8	41.3	9.1	63.0	底淡褐色	青	ナシ	ナシ	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-33	Fig.21-48	胴・不明	100.6	72.4	12.3	70.0	褐色	良	ナシ	ナシ	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-34	Fig.21-49	胴・上層	68.1	-	11.7	52.5	褐色	青	ナシ	ナシ	胴部上位見かけ二条突起、胴部上位以上打ち欠き
K-35	Fig.21-50	胴・下層	-	35.0	18.2	52.3	底淡褐色	青	ハケム痕ナシ	ミガキ	胴部上位突起
K-36	Fig.21-51	胴・不明	-	35.6	-	55.0	底淡褐色	青	不明	ハケム	胴部上位突起
K-37	Fig.21-52	胴・不明	-	-	6.8	69.0	底淡褐色	青	ナシ	ナシ	胴部上位突起
K-38	Fig.22-53	胴・上層	36.9	26.9	4.2	28.4	-	青	ナシ	ミガキ	胴部上位突起
K-39	Fig.22-54	胴・下層	50.0	31.1	6.46	32.6	-	青	ハケム痕ナシ	ハケム痕ナシ	胴部上位見かけ二条突起、胴部上位以上打ち欠き
K-40	Fig.22-55	胴・不明・上層	-	-	10.6	57.4	黄褐色	青	不明	不明	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-41	Fig.22-56	胴・下層	97.6	68.0	10.9	71.9	褐色	やや良	ナシ	ナシ	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-42	Fig.22-57	胴・上層	37.8	28.1	6.5	27.0	底淡褐色	良	ナシ	不明	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-43	Fig.22-58	胴・上層	82.9	50.1	12.8	55.0	-	良	ナシ	ミガキ	胴部中央突起
K-44	Fig.22-59	胴・下層	75.6	49.3	10.0	52.1	-	良	ナシ	ナシ	口縁部下突起
K-45	Fig.23-60	胴・不明	60.5	30.2	7.2	35.3	褐色	青	不明	不明	口縁部下突起
K-46	Fig.23-61	胴・上層	20.4	31.0	9.4	-	に強い黄褐色	青	ハケム痕ナシ	ナシ	胴部中央突起
K-47	Fig.23-62	胴・下層	-	-	9.2	55.2	褐色	青	ハケム痕ナシ	ナシ	胴部上位突起、胴部上位以上打ち欠き
K-48	Fig.24-63	胴・不明	105.5	65.6	15.0	67.6	褐色	やや良	不明	不明	胴部中央やや下見かけ二条突起
K-49	Fig.24-64	胴・上層	31.6	43.8	10.4	-	褐色	不明	不明	不明	口縁部下突起
K-50	Fig.24-65	胴・下層	51.6	30.9	7.0	32.7	褐色	不明	不明	不明	口縁部下突起

石製品観察表

No.	標図番号	器種	出土地点	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
1	Fig. 25-1	磨製石剣	K-30	安山岩	11.2	3.6	1.4	一部欠損
2	Fig. 25-2	磨製石剣	K-30	安山岩	10.8	3.7	1.4	一部欠損
3	Fig. 25-3	磨製石剣	K-30	安山岩	2.0	1.9	0.6	先端部のみ
4	Fig. 25-4	磨製石剣	K-30	安山岩	1.9	1.9	0.5	先端部のみ
5	Fig. 25-5	磨製石剣	K-30	安山岩	9.9	2.4	1.3	一部欠損
6	Fig. 25-6	磨製石剣	K-37	安山岩	23.2	4.1	0.9	完形

鉄製品観察表

No.	標図番号	器種	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
1	Fig. 26-1	鉄剣	K-05	22.0	2.8	0.6
2	Fig. 26-2	鉄剣	K-05	15.0	2.6	0.6

土器調査表 1

No.	押通番号	器種	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	内面	外面	焼成
1	P18-31-1	甕	口縁～胴中位	SD-08	25.5	16.4	8.4	棕色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ハケム後ナデ	青
2	P18-31-2	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	17.4	—	にぶい褐色	脚付蓋	ハケム後ナデ	タタキ後ハケム	青
3	P18-31-3	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	18.6	—	にぶい褐色	脚付蓋	ハケム	ハケム	青
4	P18-31-4	甕	胴下位～胴部	SD-08	—	—	12.4	黄褐色	脚付蓋	ハケム	ハケム後ナデ	青
5	P18-31-5	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	17.4	—	にぶい赤褐色	脚付蓋	ハケム	ハケム	青
6	P18-31-6	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	18.1	—	にぶい褐色	脚付蓋	ハケム後ナデ	タタキ後ハケム	青
7	P18-31-7	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	19.8	—	棕色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ナデ	青
8	P18-31-8	甕	胴部～胴中位	SD-08	—	—	—	棕色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ハケム	青
9	P18-31-9	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	17.6	—	棕色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ハケム	青
10	P18-31-10	甕	胴中位～胴下位	SD-08	—	—	—	にぶい赤褐色	脚付蓋	ハケム後ナデ	タタキ後ハケム後ナデ	青
11	P18-31-11	甕	胴上位～胴下位	SD-08	—	—	—	にぶい赤褐色	脚付蓋	ハケム	タタキ後ハケム後ナデ	青
12	P18-31-12	甕	完形	SD-08	38.8	16.5	12.7	棕色	脚付蓋	ハケム	ハケム	青
13	P18-31-13	甕	胴部	SD-08	—	—	12.6	赤色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
14	P18-31-14	甕	胴部	SD-08	—	—	12.1	にぶい赤褐色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ハケム後ナデ	青
15	P18-31-15	甕	胴部	SD-08	—	—	11.0	にぶい褐色	脚付蓋	ナデ	タタキ後ハケム後ナデ	青
16	P18-32-16	甕	完形	SD-08	31.1	18.0	3.0	棕色	脚付蓋	ハケム後ナデ	タタキ後ハケム	青
17	P18-32-17	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	15.5	—	赤褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
18	P18-32-18	甕	胴部	SD-08	—	—	10.4	黄褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
19	P18-32-19	甕	胴部	SD-08	—	—	11.2	棕色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
20	P18-32-20	甕	胴下位～底部	SD-08	—	—	5.4	赤色	平底	ハケム	ナデ	青
21	P18-32-21	甕	胴部	SD-08	—	—	11.8	にぶい赤褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
22	P18-32-22	甕	胴部	SD-08	—	—	9.2	棕色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ハケム後ナデ	青
23	P18-32-23	甕	胴部	SD-08	—	—	10.8	にぶい赤褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
24	P18-32-24	甕	胴部	SD-08	—	—	10.5	にぶい褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
25	P18-32-25	甕	胴部	SD-08	—	—	10.4	黄褐色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ハケム後ナデ	青
26	P18-32-26	甕	胴部	SD-08	—	—	10.8	黄褐色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ナデ	青
27	P18-32-27	甕	胴部	SD-08	—	—	12.2	にぶい褐色	脚付蓋	ハケム	ハケム後ナデ	青
28	P18-32-28	甕	胴下位～胴部	SD-08	—	—	10.7	棕色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ハケム後ナデ	青
29	P18-32-29	甕	胴部	SD-08	—	—	13.4	黄褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
30	P18-32-30	甕	胴部	SD-08	—	—	10.2	にぶい褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
31	P18-32-31	甕	胴部	SD-08	—	—	12.0	黄褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
32	P18-32-32	甕	胴部	SD-08	—	—	13.0	にぶい褐色	脚付蓋	ハケム後ナデ	ハケム後ナデ	青
33	P18-32-33	甕	胴部	SK-35	—	—	11.6	黄褐色	脚付蓋	ハケム	ハケム	青

土源観察表 2

No.	補図番号	器種・分層	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		検成
										内面	外面	
34	Fig. 32-34	瓦	腹部	SD-08	—	—	11.5	棕色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
35	Fig. 32-35	瓦	腹部	SK-35	—	—	12.4	棕色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
36	Fig. 32-36	瓦	腹部	SD-08	—	—	10.8	にぶい褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
37	Fig. 32-37	瓦	腹部	SD-08	—	—	11.8	棕色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
38	Fig. 32-38	瓦	腹部	SD-08	—	—	12.3	明褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
39	Fig. 32-39	瓦	腹部	SD-08	—	—	12.6	棕色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
40	Fig. 32-40	瓦	胴下位～腹部	SD-08	—	—	—	—	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
41	Fig. 32-41	瓦	腹部	SD-08	—	—	11.8	にぶい褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
42	Fig. 32-42	瓦	腹部	SD-08	—	—	11.6	明褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
43	Fig. 32-43	瓦	腹部	SD-08	—	—	10.6	棕色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
44	Fig. 32-44	瓦	腹部	SD-08	—	—	10.6	明褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
45	Fig. 32-45	瓦	胴下位～腹部	SD-08	—	—	12.8	棕色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
46	Fig. 33-46	瓦	腹部	SD-08	—	—	10.5	灰褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
47	Fig. 33-47	瓦	腹部	SD-08	—	—	11.8	棕色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
48	Fig. 33-48	瓦	腹部	SD-08	—	—	10.6	にぶい褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
49	Fig. 33-49	瓦	腹部	SD-08	—	—	12.6	棕色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
50	Fig. 33-50	瓦	胴下位～腹部	SD-08	—	—	11.6	赤褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
51	Fig. 33-51	瓦	腹部	SD-08	—	—	11.6	淡黄褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
52	Fig. 33-52	瓦	腹部	SD-08	—	—	10.6	にぶい褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
53	Fig. 33-53	瓦	腹部	SD-08	—	—	12.8	黄褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
54	Fig. 33-54	瓦	腹部	SD-08	—	—	10.4	黄褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
55	Fig. 33-55	瓦	腹部	SD-08	—	—	11.6	淡黄褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
56	Fig. 33-56	瓦	腹部	SD-08	—	—	14.0	黄褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
57	Fig. 33-57	瓦	胴下位～腹部	SD-08	—	—	10.7	棕色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
58	Fig. 33-58	瓦	腹部	SD-08	—	—	11.2	淡黄褐色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
59	Fig. 33-59	瓦	腹部	SD-08	—	—	13.2	棕色	脚付蓋	ナデ	ハケメ脱ナデ	青
60	Fig. 33-60	瓦	腹部	SD-08	—	—	7.8	棕色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
61	Fig. 33-61	瓦	口縁～胴中位	SD-08	—	18.8	—	赤色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
62	Fig. 33-62	瓦	口縁～胴中位	SD-08	—	19.0	—	棕色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
63	Fig. 33-63	瓦	口縁～胴中位	SD-08	—	15.9	—	黄褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
64	Fig. 33-64	瓦	口縁～胴中位	SD-08	—	14.4	—	黄褐色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
65	Fig. 33-65	瓦	口縁～胴中位	SD-08	—	19.9	—	赤色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青
66	Fig. 33-66	瓦	胴中位～胴中位	SD-08	—	—	—	棕色	脚付蓋	ナデ	ナデ	青

土器調査表 3

No.	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	内面	外面	焼成
57	Fig.34-67	口縁～胴下位	SD-08	—	15.4	—	にぶい、暗色		ハケメ	タタキ焼ハケメ	青
58	Fig.34-68	胴部～底部	SD-08	—	—	—	浅黄褐色		ヘラケズリ	サテ	青
69	Fig.34-69	口縁～底部	SD-08	16.4	15.8	—	浅黄褐色		ハケメ	ハケメ	青
70	Fig.34-70	口縁～胴中位	SD-09	—	13.4	—	暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
71	Fig.34-71	口縁～底部	SD-09	16.8	15.0	—	にぶい、暗色		ハケメ	タタキ焼サテ	青
72	Fig.34-72	口縁～胴中位	SD-08	15.2	13.0	—	灰褐色		ヘラケズリ	ヘラケズリ	青
73	Fig.34-73	口縁～底部	SD-08	—	15.2	—	暗褐色		ヘラケズリ	ハケメ	青
74	Fig.34-74	口縁～胴下位	SD-09	—	14.0	—	暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
75	Fig.34-75	口縁～胴中位	SD-08	28.0	18.7	—	赤褐色		ヘラケズリ	ハケメ	青
76	Fig.34-76	口縁～底部	SD-08	21.9	15.6	—	暗色		ヘラケズリ	タタキ焼サテ	青
77	Fig.34-77	口縁～底部	SD-08	21.8	15.3	—	暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
78	Fig.34-78	口縁～底部	SD-08	30.5	22.4	—	にぶい、暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
79	Fig.35-79	口縁～胴下位	SD-08	22.6	14.4	—	にぶい、暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
80	Fig.35-80	口縁～胴下位	SD-08	—	15.0	—	にぶい、暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
81	Fig.35-81	口縁～胴上位	SD-08	—	16.6	—	にぶい、暗色		ヘラケズリ	サテ	青
82	Fig.35-82	口縁～胴上位	SD-08	—	14.5	—	浅黄褐色		ヘラケズリ	サテ	青
83	Fig.35-83	口縁～胴上位	SD-08	—	18.0	—	暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
84	Fig.35-84	口縁～胴上位	SD-08	—	15.4	—	浅黄褐色		ヘラケズリ	ハケメ	青
85	Fig.35-85	口縁～胴上位	SD-08	—	16.6	—	にぶい、赤褐色		ヘラケズリ	サテ	青
86	Fig.35-86	口縁～胴上位	SD-08	—	13.7	—	暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
87	Fig.35-87	口縁～胴上位	SD-08	—	15.6	—	灰褐色		ヘラケズリ	ハケメ	青
88	Fig.35-88	口縁～胴中位	SD-08	—	17.2	—	浅黄褐色		ヘラケズリ	ハケメ	青
89	Fig.35-89	口縁～胴中位	SD-08	—	18.0	—	にぶい、暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
90	Fig.35-90	口縁～胴中位	SD-08	15.8	14.0	—	暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
91	Fig.35-91	口縁～胴中位	SD-08	15.1	10.8	—	明黄褐色		ハケメ	ハケメ	青
92	Fig.35-92	口縁～胴下位	SD-08	15.8	12.7	—	明黄褐色		ヘラケズリ	ヘラケズリ	青
93	Fig.35-93	口縁～胴中位	SK-35	13.4	12.6	—	暗色		ヘラケズリ	サテ	青
94	Fig.35-94	口縁～胴中位	SK-35	14.3	13.0	—	灰褐色		ヘラケズリ	ハケメ	青
95	Fig.35-95	口縁～胴中位	SK-35	16.5	15.2	—	にぶい、暗色		ヘラケズリ	サテ	青
96	Fig.35-96	口縁～胴中位	SD-08	—	16.2	—	にぶい、暗色		ヘラケズリ	ハケメ	青
97	Fig.35-97	口縁～胴下位	SD-08	—	14.2	—	浅黄褐色		ヘラケズリ	ハケメ	青
98	Fig.35-98	口縁～胴中位	SD-08	—	14.0	—	暗色		ヘラケズリ	サテ	青
99	Fig.35-99	口縁～胴中位	SD-09	—	13.5	—	浅黄褐色		ヘラケズリ	ハケメ	青

土器圖表 4

No.	神田番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		検成
										内面	外面	
100	Fig.36-100	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	13.2	—	灰白色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
101	Fig.36-101	甕	口縁～胴下位	SD-09	—	12.8	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
102	Fig.36-102	甕	胴部～底部	SD-09	—	—	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
103	Fig.36-103	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	18.2	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
104	Fig.36-104	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	15.6	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
105	Fig.36-105	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	15.0	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
106	Fig.36-106	甕	口縁～胴中位	SD-08	15.6	13.0	—	褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
107	Fig.36-107	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	15.3	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
108	Fig.36-108	甕	口縁～胴下位	SD-09	—	15.0	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
109	Fig.36-109	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	14.4	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
110	Fig.36-110	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	15.0	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
111	Fig.36-111	甕	口縁～胴中位	SD-09	14.3	11.8	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
112	Fig.36-112	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	23.3	—	褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
113	Fig.36-113	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	21.7	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
114	Fig.36-114	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	23.6	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
115	Fig.36-115	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	24.0	—	褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
116	Fig.37-116	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	20.6	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
117	Fig.37-117	甕	口縁～胴中位	SK-35	—	24.2	—	褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
118	Fig.37-118	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	17.5	—	褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
119	Fig.37-119	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	27.8	—	濃灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
120	Fig.37-120	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	25.0	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
121	Fig.37-121	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	19.4	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
122	Fig.37-122	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	22.2	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
123	Fig.37-123	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	21.2	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
124	Fig.37-124	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	18.9	—	褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
125	Fig.37-125	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	28.6	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
126	Fig.37-126	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	20.2	—	明灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
127	Fig.38-127	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	15.4	—	明灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
128	Fig.38-128	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	15.5	—	灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
129	Fig.38-129	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	21.3	—	褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
130	Fig.38-130	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	28.4	—	明灰褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
131	Fig.38-131	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	10.1	—	褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕
132	Fig.38-132	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	16.4	—	にぶい褐色	—	ヘタケズリ	ヘタケズリ	甕

土器調査表 5

No.	縄文番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調査		焼成
										内面	外面	
133	Fig. 38-133	壺	口縁～胴部	SD-08	—	19.9	—	明赤褐色	—	ハケメ	ハケメ	青
134	Fig. 38-134	壺	口縁部	SD-08	—	20.2	—	褐色	—	ハケメ	ハケメ	青
135	Fig. 38-135	壺	口縁～胴下位	SD-08	—	23.0	—	浅黄褐色	—	ハケメ	ハケメ	青
136	Fig. 38-136	壺	口縁部	SD-09	—	30.5	—	褐色	—	サテ	ハケメ	青
137	Fig. 38-137	壺	口縁～胴部	SD-09	—	21.8	—	にぶい褐色	—	サテ	サテ	青
138	Fig. 38-138	壺	口縁～胴部	SD-09	—	28.6	—	にぶい褐色	—	サテ	ハケメ	青
139	Fig. 39-139	壺	口縁～胴部	SD-08	—	13.8	—	にぶい褐色	—	ハケメ後ナデ	ハケメ	青
140	Fig. 39-140	壺	口縁～胴部	SD-08	—	16.4	—	褐色	—	ハケメ	ハケメ	青
141	Fig. 39-141	壺	口縁部	SD-08	—	17.6	—	褐色	—	サテ	サテ	青
142	Fig. 39-142	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	19.3	—	赤色	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	青
143	Fig. 39-143	壺	口縁～胴部	SD-08	—	19.8	—	褐色	—	サテ	ハケメ後ナデ	青
144	Fig. 39-144	壺	口縁～胴部	SD-08	—	14.8	—	褐色	—	サテ	ハケメ後ナデ	青
145	Fig. 39-145	壺	口縁～胴部	SD-08	—	14.6	—	赤褐色	—	ハケメ	ハケメ	青
146	Fig. 39-146	壺	口縁～胴部	SD-08	—	18.6	—	浅黄褐色	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	青
147	Fig. 39-147	壺	口縁～胴部	SD-08	—	13.9	—	にぶい褐色	—	サテ	サテ	青
148	Fig. 39-148	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	21.8	—	底赤褐色	—	サテ	サテ	青
149	Fig. 39-149	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	29.4	—	にぶい赤褐色	—	サテ	ハケメ後ナデ	青
150	Fig. 39-150	壺	口縁～胴部	SK-35	—	20.0	—	にぶい褐色	—	サテ	サテ	青
151	Fig. 39-151	壺	口縁～胴部	不明	—	19.4	—	褐色	—	サテ	サテ	青
152	Fig. 39-152	壺	胴部～胴中位	SD-08	—	—	—	にぶい褐色	—	サテ	サテ	青
153	Fig. 39-153	壺	口縁～胴部	SD-09	—	17.0	—	浅黄褐色	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	青
154	Fig. 39-154	壺	口縁～胴部	SD-09	—	16.0	—	浅黄褐色	—	ハケメ	ハケメ	青
155	Fig. 39-155	壺	口縁～胴中位	SD-09	—	15.6	—	褐色	—	ヘラケズリ	ハケメ	青
156	Fig. 40-156	壺	口縁～胴部	SD-08	—	13.2	—	浅黄褐色	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	青
157	Fig. 40-157	壺	口縁～胴部	SD-08	—	12.0	—	明赤褐色	—	サテ	サテ	青
158	Fig. 40-158	壺	口縁～胴部	SD-08	—	11.7	—	にぶい褐色	—	サテ	サテ	青
159	Fig. 40-159	壺	口縁～胴部	SD-08	—	11.2	—	にぶい赤褐色	—	ハケメ後ナデ	サテ	青
160	Fig. 40-160	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	12.1	—	褐色	—	サテ	サテ	青
161	Fig. 40-161	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	14.0	—	褐色	—	ヘラケズリ	サテ	青
162	Fig. 40-162	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	15.6	—	褐色	—	ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	青
163	Fig. 40-163	壺	口縁～胴上位	SD-08	—	14.8	—	浅黄褐色	—	ヘラケズリ	ハケメ	青
164	Fig. 40-164	壺	口縁～胴上位	SD-08	—	14.5	—	にぶい褐色	—	ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	青
165	Fig. 40-165	壺	胴部～胴下位	SD-08	—	—	—	褐色	—	ハケメ後ナデ	サテ後ヘラケズリ	青

土曜園林表 6

No.	樹種・分類	部位	出土地点	樹高	口径	直径	色調	備考	調査		焼成
									内面	外面	
186	Fig.40-165	頭部～胴下位	SD-09	—	—	—	褐色	—	ハケム脱ナデ	ハケム脱ナデ	青
187	Fig.40-167	口縁～胴部	SD-09	—	16.2	—	褐色	—	ハケム脱ナデ	ハケム脱ナデ	青
188	Fig.40-168	口縁～胴部	SD-09	10.2	10.5	—	にぶい褐色	—	ナデ脱ハケム	ハケム	青
189	Fig.40-169	完形	SD-08	11.4	12.1	—	褐色	—	ハケム脱ナデ	ハケム脱ナデ	青
170	Fig.40-170	口縁～胴部	SD-08	13.3	13.3	—	褐色	—	ハケム脱ナデ	ハケム脱ナデ	青
171	Fig.40-171	口縁～胴部	SD-08	12.5	14.6	—	褐色	—	ハケム脱ナデ	ハケム脱ナデ	青
172	Fig.40-172	完形	SD-08	13.2	14.7	—	褐色	—	ナデ	ハケム	青
173	Fig.40-173	口縁～胴部	SD-08	—	12.2	—	褐色	—	ナデ	ハケム	青
174	Fig.40-174	口縁～胴部	SD-08	—	12.7	—	にぶい褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
175	Fig.41-175	口縁～胴部	SD-08	11.2	13.1	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
176	Fig.41-176	口縁～胴部	SD-08	—	14.0	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
177	Fig.41-177	口縁～胴部	SD-08	—	14.0	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
178	Fig.41-178	口縁～胴部	SD-08	—	—	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
179	Fig.41-179	口縁～胴部	SD-08	—	—	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
180	Fig.41-180	口縁～胴部	SD-08	14.1	14.3	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
181	Fig.41-181	口縁～胴部	SD-09	—	13.8	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
182	Fig.41-182	完形	SD-09	10.1	13.6	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
183	Fig.41-183	口縁～胴部	SD-09	9.8	13.0	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
184	Fig.41-184	口縁～胴部	SD-09	—	10.8	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
185	Fig.41-185	口縁～胴部	SD-09	—	12.0	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
186	Fig.41-186	口縁～胴部	SD-08	—	11.7	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
187	Fig.41-187	口縁～胴部	SD-09	9.5	12.8	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
188	Fig.41-188	口縁～胴部	SD-09	8.7	10.4	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
189	Fig.41-189	口縁～胴部	SD-09	8.4	11.8	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
190	Fig.41-190	口縁～胴部	SD-09	8.2	11.7	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
191	Fig.41-191	口縁～胴部	SD-09	7.5	10.6	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
192	Fig.41-192	口縁～胴部	SD-09	—	—	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
193	Fig.41-193	口縁～胴部	SD-09	7.6	11.6	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
194	Fig.41-194	口縁～胴部	SD-09	—	—	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
195	Fig.41-195	口縁～胴部	SD-09	7.9	13.8	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
196	Fig.41-196	口縁～胴部	SD-09	7.4	11.4	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
197	Fig.41-197	口縁～胴部	SD-09	7.0	12.3	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青
198	Fig.41-198	口縁～胴部	SD-09	6.5	13.2	—	褐色	—	ナデ	ナデ脱ハケム	青

土壌調査表 7

No.	神岡番号	器械・分類	深位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	内面	外面	焼成
199	F図41-199	鉢	完形	SD-08	5.8	8.3	—	褐色		ヘラケズリ底ナデ	ヘラケズリ底ナデ	青
200	F図41-200	鉢	口縁～底面	SD-08	6.8	9.4	—	黄褐色		ナデ	ナデ	青
201	F図41-201	鉢	口縁～胴中位	SD-08	5.7	9.8	—	にがい・褐色		ナデ	ナデ	青
202	F図41-202	鉢	完形	SK-35	15.0	14.9	—	黄褐色		ヘラケズリ底ナデ	ヘラケズリ底ナデ	青
203	F図41-203	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	15.0	—	褐色		ヘラケズリ底ナデ	ヘラケズリ底ナデ	青
204	F図41-204	鉢	口縁～胴下位	SD-09	—	14.5	—	褐色		ヘラケズリ底ナデ	ヘラケズリ底ナデ	青
205	F図41-205	鉢	口縁～胴中位	SD-08	14.4	11.7	—	赤褐色		ナデ	ナデ	青
206	F図41-206	鉢	口縁部から胴部下位	SD-08	12.1	12.5	—	にがい・褐色		ナデ	ナデ	青
207	F図42-207	鉢	口縁部から底面	SD-09	15.9	16.0	—	にがい・褐色		ナデ	ナデ	青
208	F図42-208	鉢	完形	SD-09	6.2	10.6	—	赤褐色		ヘラケズリ底ナデ	ナデ	青
209	F図42-209	鉢	口縁～胴中位	SD-09	8.0	13.0	—	褐色		ヘラケズリ底ナデ	ナデ	青
210	F図42-210	鉢	口縁～胴下位	SD-09	—	13.0	—	褐色		ナデ	ナデ	青
211	F図42-211	鉢	口縁～胴中位	SD-09	6.4	11.0	—	褐色		ナデ	ナデ	青
212	F図42-212	鉢	口縁～胴中位	石割	6.9	12.3	—	淡赤褐色		ナデ	ナデ	青
213	F図42-213	鉢	口縁～胴中位	SD-09	8.6	11.9	—	淡黄褐色		ナデ	ナデ	青
214	F図42-214	鉢	口縁～胴中位	SD-09	5.7	9.8	—	淡黄褐色		ナデ	ナデ	青
215	F図42-215	鉢	口縁～胴中位	SD-08	25.0	30.9	—	淡赤褐色		ナデ	ナデ	青
216	F図42-216	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	20.4	—	淡黄褐色		ナデ	ナデ	青
217	F図42-217	鉢	口縁～胴中位	SK-35	31.4	—	—	淡黄褐色		ナデ	ナデ	青
218	F図42-218	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	19.0	—	褐色		ナデ	ナデ	青
219	F図42-219	鉢	口縁～胴中位	SD-09	—	11.0	—	褐色		ナデ	ナデ	青
220	F図42-220	鉢	完形	SD-09	6.2	15.3	—	にがい・褐色		ナデ	ナデ	青
221	F図42-221	鉢	口縁～胴下位	SD-09	6.0	16.0	—	新褐色		ナデ	ナデ	青
222	F図42-222	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	18.8	—	にがい・褐色		ナデ	ナデ	青
223	F図42-223	鉢	口縁～胴中位	SD-09	6.9	12.4	—	にがい・褐色		ナデ	ナデ	青
224	F図42-224	鉢	口縁～胴下位	SD-08	—	12.0	—	褐色		ナデ	ナデ	青
225	F図42-225	鉢	口縁～胴中位	SD-09	8.5	11.8	—	にがい・褐色		ナデ	ナデ	青
226	F図42-226	鉢	口縁～胴中位	SD-09	6.9	10.5	—	褐色		ナデ	ナデ	青
227	F図42-227	鉢	口縁～胴中位	SD-08	4.9	—	—	黄褐色		ナデ	ナデ	青
228	F図42-228	鉢	胴中位～底面	SD-09	5.3	12.4	—	黄褐色		ナデ	ナデ	青
229	F図42-229	鉢	口縁～胴中位	SD-08	6.8	13.0	—	褐色		ナデ	ナデ	青
230	F図42-230	鉢	口縁～胴中位	SD-09	6.8	13.0	—	褐色		ナデ	ナデ	青
231	F図42-231	鉢	口縁～胴中位	SD-09	4.4	8.9	—	黄褐色		ナデ	ナデ	青

土曜開演表 8

No.	映画番号	器組・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
232	Fig.42-232	群	ほぼ完形	SK-35	4.7	8.5	—	にぶい褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ナデ	管
233	Fig.42-233	群	ほぼ完形	SK-35	4.7	8.8	—	灰褐色	—	不明	不明	管
234	Fig.42-234	群	ほぼ完形	SD-09	4.0	13.0	—	褐色	—	ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
235	Fig.42-235	群	口縁～胴下位	SD-09	4.6	12.8	—	灰褐色	—	ナデ	ナデ	管
236	Fig.42-236	群	ほぼ完形	SD-09	2.8	9.4	—	にぶい褐色	—	ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
237	Fig.42-237	群	ほぼ完形	SD-08	6.4	14.1	—	灰褐色	—	ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
238	Fig.42-238	群	ほぼ完形	SD-09	3.8	10.8	—	灰褐色	—	ナデ	ナデ	管
239	Fig.42-239	群	ほぼ完形	SD-09	5.7	10.7	—	にぶい褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
240	Fig.43-240	群	口縁～胴下位	SD-08	—	21.2	—	にぶい褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
241	Fig.43-241	群	ほぼ完形	SD-08	—	19.8	—	にぶい褐色	—	ナデ	ナデ	管
242	Fig.43-242	群	ほぼ完形	SD-08	7.5	19.1	—	新褐色	—	ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
243	Fig.43-243	群	完形	SD-08	14.0	22.4	—	褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
244	Fig.43-244	群	ほぼ完形	SD-08	7.2	14.6	—	灰褐色	—	ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
245	Fig.43-245	群	ほぼ完形	SD-08	6.9	12.5	—	灰褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
246	Fig.43-246	群	ほぼ完形	SD-08	6.9	11.0	—	褐色	—	ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
247	Fig.43-247	群	完形	SK-35	5.6	8.5	—	き	—	ナデ	ナデ	管
248	Fig.43-248	群	口縁部	SD-08	—	9.4	—	灰色	—	不明	ヘラケズリ脱ナデ	管
249	Fig.43-249	群	口縁部	SD-08	—	3.5	—	明褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
250	Fig.43-250	群	口縁部	SD-09	—	9.8	—	にぶい褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
251	Fig.43-251	群	口縁部	SD-08	—	11.2	—	にぶい褐色	—	ナデ	ナデ	管
252	Fig.43-252	群	口縁～胴下位	SD-08	—	12.8	—	にぶい褐色	—	ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
253	Fig.43-253	群	完形	SD-08	9.0	12.0	7.0	褐色	—	胴付鉢	ナデ	管
254	Fig.43-254	群	口縁～胴下位	SD-08	—	12.0	—	灰褐色	—	胴付鉢	ナデ	管
255	Fig.43-255	群	口縁～胴下位	SD-08	—	15.4	—	にぶい褐色	—	ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
256	Fig.43-256	群	口縁～胴下位	SK-35	—	10.0	—	灰褐色	—	胴付鉢	ナデ	管
257	Fig.43-257	群	ほぼ完形	不明	7.8	13.0	7.1	灰褐色	—	胴付鉢一部赤彩	ヘラケズリ脱ナデ	管
258	Fig.43-258	群	口縁～胴下位	不明	—	14.5	—	にぶい褐色	—	胴付鉢	ナデ	管
259	Fig.43-259	群	ほぼ完形	不明	7.9	11.3	3.6	灰褐色	—	胴付鉢	ナデ	管
260	Fig.43-260	群	口縁～胴部	SD-08	8.2	14.0	3.7	にぶい褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
261	Fig.43-261	群	胴部	SD-08	—	15.2	—	にぶい褐色	—	ヘラケズリ脱ナデ	ヘラケズリ脱ナデ	管
262	Fig.43-262	群	胴部	SD-08	—	—	17.6	褐色	—	胴付鉢	ナデ	管
263	Fig.43-263	群	胴部	SD-08	—	—	17.2	褐色	—	胴付鉢	ナデ	管
264	Fig.43-264	群	胴部	SD-08	—	—	13.8	灰褐色	—	胴付鉢	ヘラケズリ脱ナデ	管

土曜園遊会 9

No.	棟屋番号	器械・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	内面	外面	焼成
265	Fig.43-265	鉢	胴部	SD-08	—	—	20.6	浅黄褐色	脚付鉢	ハケム	ハケム	青
266	Fig.43-266	鉢	胴部	SD-08	—	—	—	褐色	脚付鉢	ハケム	ハケム	青
267	Fig.43-267	鉢	胴部	SD-08	—	—	18.8	浅黄褐色	脚付鉢	ハケム	ハケム	青
268	Fig.43-268	鉢	胴部	SD-08	—	—	—	赤褐色	脚付鉢	ヘラケスリ底ナデ	ハケム	青
269	Fig.43-269	鉢	胴下部・胴底	SD-08	—	—	13.2	黄褐色	脚付鉢	ヘラケスリ底ハケム	ハケム	青
270	Fig.43-270	鉢	胴部	SD-08	—	—	15.2	黄褐色	脚付鉢	ヘラケスリ底ハケム	ハケム	青
271	Fig.44-271	高坏	光部	SD-08	19.2	23.4	15.0	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
272	Fig.44-272	高坏	胴部	SD-08	—	32.0	—	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
273	Fig.44-273	高坏	胴部	SD-08	—	31.1	—	赤褐色	—	ハケム	ハケム	青
274	Fig.44-274	高坏	光部	SD-08	23.2	30.8	14.2	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
275	Fig.44-275	高坏	胴部	SD-08	—	22.4	—	赤褐色	—	ハケム	ハケム	青
276	Fig.44-276	高坏	胴部	SD-08	—	—	16.4	黄褐色	一部赤彩	ハケム	ハケム	青
277	Fig.44-277	高坏	光部	SD-08	23.9	32.9	15.0	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
278	Fig.44-278	高坏	胴部	SD-09	—	—	20.4	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
279	Fig.44-279	高坏	胴部	SD-08	—	18.8	—	灰白色	—	ハケム	ハケム	青
280	Fig.44-280	高坏	胴部	SD-08	—	20.5	—	褐色	—	ハケム	ハケム	青
281	Fig.44-281	高坏	光部	SD-08	25.0	21.7	18.1	赤褐色	—	ハケム	ハケム	青
282	Fig.44-282	高坏	胴部	SD-08	—	20.0	—	にがい褐色	—	ハケム	ハケム	青
283	Fig.45-283	高坏	胴部	SD-08	—	23.1	—	赤褐色	—	ハケム	ハケム	青
284	Fig.45-284	高坏	胴部	SD-08	—	18.0	—	にがい褐色	—	ハケム	ハケム	青
285	Fig.45-285	高坏	胴部	SD-08	—	—	—	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
286	Fig.45-286	高坏	胴部	SD-08	13.0	17.6	13.4	にがい褐色	—	ハケム	ハケム	青
287	Fig.45-287	高坏	胴部	SD-08	—	24.5	—	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
288	Fig.45-288	高坏	胴部	SD-08	—	—	—	にがい褐色	—	ハケム	ハケム	青
289	Fig.45-289	高坏	胴部	SD-08	—	—	19.2	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
290	Fig.45-290	高坏	胴部	SD-08	—	—	—	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
291	Fig.45-291	高坏	胴部	SD-08	—	20.6	—	褐色	—	ハケム	ハケム	青
292	Fig.45-292	高坏	胴部	SD-08	—	20.7	—	褐色	—	ハケム	ハケム	青
293	Fig.45-293	高坏	胴部	SD-08	—	20.7	—	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
294	Fig.45-294	高坏	胴部	SD-08	—	24.2	—	灰白色	—	ハケム	ハケム	青
295	Fig.45-295	高坏	胴部	SD-08	—	21.9	—	褐色	—	ハケム	ハケム	青
296	Fig.45-296	高坏	胴部	SD-08	—	16.7	—	黄褐色	—	ハケム	ハケム	青
297	Fig.45-297	高坏	胴部	SD-09	—	9.3	—	にがい褐色	—	ハケム	ハケム	青

土曜観覧表 10

No.	拝観番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調査	外面	組成
298	Fig.45-298	竈坏	坏部	SD-08	—	16.3	—	にぶい褐色		内面	ナデ	香
299	Fig.45-299	竈坏	はばき形	SD-09	—	16.8	—	黒い褐色		ナデ	ナデ	香
300	Fig.45-300	竈坏	坏部	SD-09	—	15.3	—	褐色		不明	不明	香
301	Fig.45-301	竈坏	坏部	SK-35	—	14.4	—	褐色		ハケム底ナデ	ハケム底ナデ	香
302	Fig.45-302	竈坏	はばき形	SD-09	—	14.2	—	底辺褐色		ヘラケズリ底ナデ	へら1かき	香
303	Fig.45-303	竈坏	胴部	SD-09	—	—	10.6	底辺褐色		ケズリ底ナデ	ナデ	香
304	Fig.45-304	竈坏	胴部	SD-09	—	—	12.0	底辺褐色		ケズリ底ナデ	ナデ	香
305	Fig.45-305	竈坏	胴部	SD-08	—	—	17.4	褐色		ハケム底ナデ	ハケム底ナデ	香
306	Fig.45-306	竈坏	胴部	SK-35	9.6	10.3	—	底辺褐色		不明	不明	香
307	Fig.45-307	竈坏	胴部～胴部中位	SD-09	—	13.0	—	底辺褐色		ハケム底ナデ	ハケム底ナデ	香
308	Fig.45-308	小型丸底澄	はばき形	SD-09	—	—	—	褐色		ナデ	ナデ	香
309	Fig.45-309	小型丸底澄	はばき形	SD-09	8.4	11.7	—	にぶい褐色		ハケム底ナデ	ハケム底ナデ	香
310	Fig.45-310	小型丸底澄	はばき形	SD-09	7.2	9.8	—	底白色		ハケム底ナデ	ハケム底ナデ	香
311	Fig.45-311	小型丸底澄	はばき形	SD-09	7.3	13.3	—	にぶい褐色		ハケム底ナデ	ハケム底ナデ	香
312	Fig.45-312	小型丸底澄	はばき形	SD-09	7.0	12.8	—	にぶい褐色		ハケム底ナデ	ハケム底ナデ	香
313	Fig.45-313	小型丸底澄	はばき形	SD-09	5.9	8.6	—	褐色		ケズリ底ハケム底ナデ	ケズリ底ナデ	香
314	Fig.45-314	小型丸底澄	はばき形	SD-09	6.6	12.8	—	底辺褐色		ケズリ底ナデ	ヨコナデ	香
315	Fig.45-315	小型丸底澄	胴上位～底部	SD-09	7.9	13.0	—	黒い褐色		ハケム底ナデ	ナデ	香
316	Fig.45-316	小型丸底澄	はばき形	SD-09	8.3	11.0	—	褐色		ナデ	不明	香
317	Fig.45-317	小型丸底澄	はばき形	不明	6.5	10.4	—	褐色		ナデ	ケズリ底ナデ	香
318	Fig.45-318	小型丸底澄	はばき形	SD-08	8.2	7.9	3.2	褐色		ナデ	ハケム底ナデ	香
319	Fig.45-319	小型丸底澄	はばき形	SD-09	8.6	8.7	—	赤褐色		ケズリ底ナデ	ケズリ底ハケム底ナデ	香
320	Fig.45-320	小型丸底澄	はばき形	SD-09	8.8	17.6	—	にぶい褐色		ナデ	ナデ	香
321	Fig.45-321	小型丸底澄	はばき形	SD-09	7.4	9.0	—	黒赤褐色		ケズリ底ナデ	ケズリ底ナデ	香
322	Fig.45-322	小型丸底澄	はばき形	SD-09	9.0	8.6	—	にぶい褐色		ナデ	ハケム底ナデ	香
323	Fig.45-323	小型丸底澄	はばき形	SD-09	7.5	6.0	—	底辺褐色		ナデ	ナデ	香
324	Fig.45-324	小型丸底澄	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	底辺褐色		ナデ	ナデ	香
325	Fig.45-325	小型丸底澄	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	底辺褐色		ナデ	ハケム底ナデ	香
326	Fig.45-326	小型丸底澄	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	にぶい褐色		ナデ	ケズリ底ナデ	香
327	Fig.45-327	小型丸底澄	はばき形	SK-35	7.5	9.6	—	にぶい褐色		ナデ	ハケム底ナデ	香
328	Fig.45-328	小型丸底澄	はばき形	不明	9.7	8.5	—	褐色		不明	不明	香
329	Fig.45-329	小型丸底澄	胴上位～胴中位	SD-09	—	—	—	にぶい褐色		ナデ	ケズリ底ナデ	香
330	Fig.45-330	小型丸底澄	口部～胴中位	SD-08	—	10.1	—	にぶい褐色		ナデ	ケズリ底ナデ	香

土器圖表 11

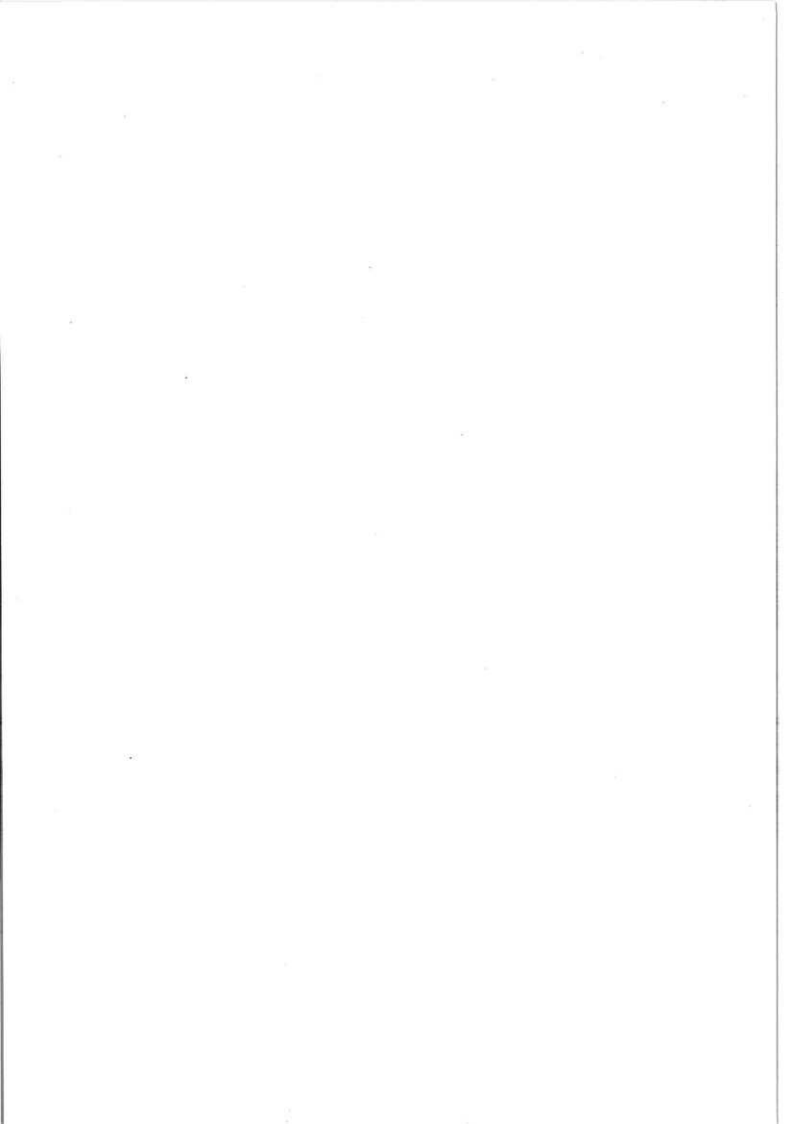
No.	神田番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	内面	外面	装成
331	Fig.46-331	小型丸底釜	口縁～胴上位	SD-08	—	11.9	—	にぶい褐色		ケズリ	ハケム痕ナシ	青
332	Fig.46-332	小型丸底釜	钵底残部	SD-09	9.5	6.8	—	にぶい褐色		ケズリ	ハケム	青
333	Fig.46-333	小型丸底釜	钵底残部	SD-09	9.3	9.0	—	にぶい褐色		ハケム痕ナシ	ハケム	青
334	Fig.46-334	小型丸底釜	钵底残部	SD-09	10.9	10.2	—	にぶい褐色		ケズリ痕ナシ	ケズリ痕ナシ	青
335	Fig.46-335	小型丸底釜	口縁～胴上位	SD-09	—	10.2	—	浅灰色		ケズリ痕ナシ	ヨコナデ	青
336	Fig.46-336	小型丸底釜	钵底残部	SK-35	7.7	7.8	—	褐色		ナデ	ハケム	青
337	Fig.47-337	小型丸底釜	钵底残部	SD-09	7.0	7.8	—	褐色		ナデ	ナデ	青
338	Fig.47-338	小型丸底釜	钵底残部	SD-09	6.1	8.0	3.4	にぶい褐色		ナデ	ナデ	青
339	Fig.47-339	小型丸底釜	钵底残部	SD-09	8.3	10.8	—	褐色		ケズリ痕ナシ	ハケム痕ナシ	青
340	Fig.47-340	小型丸底釜	钵底残部	SD-09	5.3	6.8	3.4	褐色		ナデ	ハケム痕ナシ	青
341	Fig.47-341	小型	钵底残部	SD-09	12.6	11.0	—	にぶい褐色		ケズリ	ハケム	青
342	Fig.47-342	小型	钵底残部	SD-09	15.1	12.4	—	褐色		ケズリ痕ナシ	ケズリ痕ナシ	青
343	Fig.47-343	小型	钵底残部	SD-09	13.9	11.9	—	褐色		ナデ	ケズリ痕ナシ	青
344	Fig.47-344	小型	残部	SD-09	11.5	9.0	—	褐色		ナデ	ケズリ痕ナシ	青
345	Fig.47-345	小型	钵底残部	SD-09	10.6	10.4	—	にぶい褐色		ケズリ	ケズリ痕ハケム痕ナシ	青
346	Fig.47-346	小型	残部	SK-35	10.9	7.3	3.2	浅灰色		ナデ	ハケム	青
347	Fig.47-347	小型	胴上位～底部	SD-08	—	—	—	にぶい褐色		ナデ	ナデ	青
348	Fig.47-348	小型	胴上位～胴中位	SD-08	—	—	—	浅灰色		ナデ	ケズリ痕ナシ	青
349	Fig.47-349	小型	胴上位～底部	SD-08	—	—	—	褐色		ナデ	ハケム	青
350	Fig.47-350	小型	胴上位～底部	SD-08	—	—	—	にぶい褐色		ケズリ痕ナシ	ケズリ痕ナシ	青
351	Fig.47-351	小型	口縁部	SD-09	—	12.8	—	にぶい褐色		ケズリ痕ナシ	ケズリ痕ナシ	青
352	Fig.47-352	小型	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	褐色		ナデ	ハケム痕ナシ	青
353	Fig.47-353	小型	钵底残部	SD-09	10.6	10.6	—	にぶい褐色		ケズリ痕ナシ	ケズリ痕ナシ	青
354	Fig.47-354	小型	钵底残部	SD-09	12.4	9.2	—	褐色		ナデ	ケズリ痕ハケム	青
355	Fig.47-355	小型	胴上位～底部	SK-35	—	—	—	灰白色		ナデ	ハケム痕ナシ	青
356	Fig.47-356	小型	胴上位～底部	SD-08	—	—	—	灰白色		ナデ	ナデ	青
357	Fig.47-357	小型	胴上位～底部	SD-09	4.7	2.8	2.5	にぶい褐色		ナデ	ナデ	青
358	Fig.47-358	小型	钵底残部	SD-09	4.1	5.3	—	にぶい褐色		ナデ	ナデ	青
359	Fig.47-359	小型	残部	SD-09	3.5	3.6	—	にぶい褐色		ナデ	ナデ	青
360	Fig.47-360	小型	残部	SD-09	4.4	4.7	—	褐色		ナデ	ナデ	青
361	Fig.47-361	小型	口縁～胴中位	SD-09	—	4.3	—	にぶい褐色		ナデ	ナデ	青
362	Fig.47-362	小型	口縁～底部	SD-09	4.4	5.0	2.5	にぶい褐色		ナデ	ナデ	青
363	Fig.47-363	小型	口縁～底部	SD-09	—	—	—	にぶい褐色		ナデ	ナデ	青

土器圖表 12

No.	相國番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
364	Fig.47-364	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	6.2	6.2	—	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
365	Fig.47-365	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	4.3	5.6	—	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
366	Fig.47-366	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	5.5	6.2	4.0	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
367	Fig.47-367	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	3.2	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
368	Fig.47-368	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	4.6	4.3	—	褐色		ナテ	ナテ	青
369	Fig.47-369	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	3.9	4.6	—	褐色		ナテ	ナテ	青
370	Fig.47-370	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	3.5	3.2	—	褐色		ナテ	ナテ	青
371	Fig.47-371	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	3.9	4.3	—	褐色		ナテ	ナテ	青
372	Fig.47-372	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	4.8	6.7	—	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
373	Fig.47-373	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	2.7	4.3	—	褐色		ナテ	ナテ	青
374	Fig.47-374	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	3.0	黄褐色		ナテ	ナテ	青
375	Fig.47-375	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	3.5	3.6	3.5	褐色		ナテ	ナテ	青
376	Fig.47-376	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	6.2	黄褐色		ナテ	ナテ	青
377	Fig.47-377	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	5.2	黄褐色		ナテ	ナテ	青
378	Fig.47-378	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	—	黄褐色		ナテ	ナテ	青
379	Fig.48-379	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	2.0	4.2	—	黄褐色		ナテ	ナテ	青
380	Fig.48-380	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	5.25	11.0	—	黄褐色		ナテ	ナテ	青
381	Fig.48-381	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	7.3	3.6	—	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
382	Fig.48-382	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	8.3	3.6	4.5	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
383	Fig.48-383	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	11.4	7.4	6.8	黄褐色		ナテ	ナテ	青
384	Fig.48-384	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	6.3	7.0	—	黄褐色		ナテ	ナテ	青
385	Fig.48-385	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	—	黄褐色		ナテ	ナテ	青
386	Fig.48-386	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	—	黄褐色		ナテ	ナテ	青
387	Fig.48-387	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	—	黄褐色		ナテ	ナテ	青
388	Fig.48-388	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	—	—	—	黄褐色		ナテ	ナテ	青
389	Fig.48-389	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	14.3	12.3	12.5	褐色		ナテ	ナテ	青
390	Fig.48-390	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	17.2	11.0	13.2	褐色		ナテ	ナテ	青
391	Fig.48-391	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	15.7	8.8	10.6	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
392	Fig.48-392	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	17.0	—	13.7	にぶい褐色		ナテ	ナテ	青
393	Fig.48-393	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	—	18.5	—	褐色		ナテ	ナテ	青
394	Fig.48-394	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-08	10.6	18.0	14.8	黄褐色		ナテ	ナテ	青
395	Fig.48-395	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	7.4	6.6	9.2	灰白色		ナテ	ナテ	青
396	Fig.48-396	Ⅲ-ニヤ	口縁～底部	SD-09	6.3	6.8	8.4	灰白色		ナテ	ナテ	青

土器観察表 13

No.	標頭番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口徑	底徑	色調	備考	調査		焼成
										内面	外面	
397	Fig.48-397	器付	ほぼ完形	不明	—	3.75	7.0	灰黄褐色	—	ナナ	ナナ	青
398	Fig.48-398	器付	ほぼ完形	SD-08	11.3	12.6	13.4	灰黄褐色	—	ナナ	ケズリ痕ナナ	青
399	Fig.48-399	器付	胴部	SD-08	—	—	15.2	黄褐色	—	ナナ	ハケミ痕ナナ	青
400	Fig.48-400	器付	胴上位～胴中位	SD-09	—	9.3	—	褐色	—	ナナ	ナナ	青
401	Fig.48-401	皿	胴中位～胴部	SD-08	—	—	—	にえい、褐色	—	ケズリ痕ナナ	ケズリ痕ハケミ	青
402	Fig.48-402	皿	胴中位～胴部	SD-08	—	—	—	にえい、褐色	—	ナナ	ハケミ痕ナナ	青
403	Fig.48-403	皿	胴中位～胴部	SD-08	—	—	—	にえい、褐色	—	ケズリ痕ナナ	ハケミ痕ナナ	青
404	Fig.48-404	不明土製品	不明	不明	—	—	—	灰黄褐色	—	ハケミ	ナナ	青
405	Fig.48-405	ジョッキ形土器	胴中位～胴部	SD-08	—	—	14.4	にえい、褐色	—	ナナ	ナナ	青
406	Fig.48-406	ジョッキ形土器	胴上位～胴部	SD-09	—	—	10.5	にえい、褐色	—	ナナ	ハケミ痕ナナ	青
407	Fig.48-407	ジョッキ形土器	ほぼ完形	SD-09	9.4	9.4	9.7	灰白色	—	ナナ	ナナ	青
408	Fig.48-408	ジョッキ形土器	胴中位～下位	不明	7.6	—	10.6	灰黄褐色	—	ナナ	ナナ	青



写真図版



K-01甕棺墓



K-02甕棺墓



K-03甕棺墓

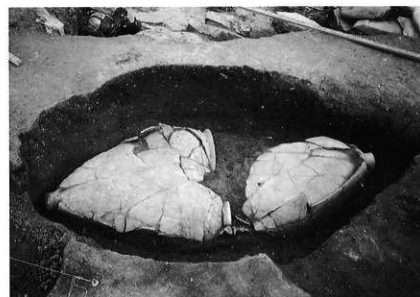
PL. 1 K-01・02・03甕棺墓



K-04甕棺墓



K-05甕棺墓



K-06甕棺墓

PL. 2 K-04・05・06甕棺墓



K-07甕棺墓



K-09甕棺墓

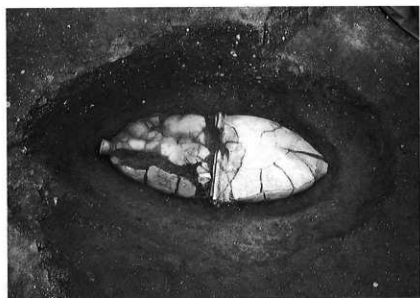


K-10甕棺墓

PL. 3 K-07・09・10甕棺墓



K-11甕棺墓



K-12甕棺墓



K-13甕棺墓

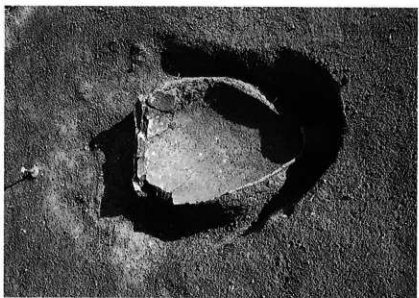
PL. 4 K-11・12・13甕棺墓



K-14甕棺墓



K-15甕棺墓



K-16甕棺墓

PL. 5 K-14・15・16甕棺墓



K-17甕棺墓



K-19甕棺墓



K-21甕棺墓

PL. 6 K-17・19・21甕棺墓



K-22甕棺墓



K-23.24.25甕棺墓



K-26甕棺墓

P.L. 7 K-22・23, 24, 25・26甕棺墓



K-27 甕棺墓



K-28 甕棺墓



K-29 甕棺墓

PL. 8 K-27・28・29 甕棺墓



K-30甕棺墓



K-30甕棺墓副葬品出土状況



K-31甕棺墓

PL. 9 K-30甕棺墓・K-30甕棺墓副葬品出土状況・K-31甕棺墓



K-32甕棺墓



K-34甕棺墓



K-36甕棺墓

PL. 10 K-32・34・36甕棺墓



K-37.40甕棺墓



K-37副葬品出土状況



K-38甕棺墓

PL. 11 K-37. 40甕棺墓・K-37副葬品出土状況・K-38甕棺墓



K-39甕棺墓



K-40甕棺墓



K-41甕棺墓

PL. 12 K-39・40・41甕棺墓



SD-08大型溝内遺物出土状況
西より



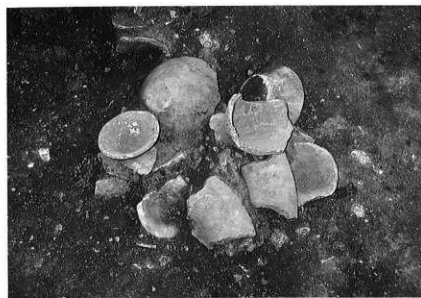
SD-08大型溝内遺物出土状況
東より



SD-08大型溝内遺物出土状況
南より



S D-08大型溝内遺物出土状況



S D-08大型溝内遺物出土状況



S D-08大型溝内遺物出土状況

P L. 14 S D-08大型溝内遺物出土状況2



SD-09大型溝内遺物出土状況



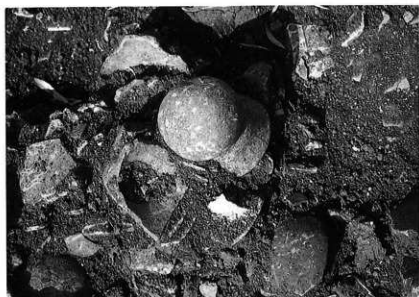
SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況1



SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況

PL. 18 SD-09大型溝内遺物出土状況2



SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況

P L. 19 SD-09大型溝内遺物出土状況3



S D-09大型溝内遺物出土状況



S D-09大型溝内遺物出土状況



S D-09大型溝内遺物出土状況

P L. 20 S D-09大型溝内遺物出土状況4



SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況

PL. 21 SD-09大型溝内遺物出土状況5



SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況



SD-09大型溝内遺物出土状況

PL. 22 SD-09大型溝内遺物出土状況6



SC-01石棺墓検出状況



M-02木棺墓検出状況



発掘調査作業風景

P.L. 25 SC-01石棺墓検出状況・M-02木棺墓検出状況・発掘調査作業風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがしなんだいもんいせき							
書名	東南大門遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	玉名市文化財調査報告							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	田中康雄・末永崇・中尾健照 玉名市教育委員会							
編集機関	玉名市教育委員会							
所在地	〒865-0051 熊本県玉名市繁根木88-1							
発行年月日	2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ひがしなんだいもんいせき 東南大門遺跡	くまもとけん 熊本県 たまなし 玉名市 ついで 築地	43206	221	32° 55′ 41″	130° 32′ 25″	1994年10月11日 \$ 1995年3月10日	2,800	市営住宅建設工事
所 収 遺 跡	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
東南大門遺跡	甕棺墓	弥生時代中期 弥生時代後期 \$ 古墳時代初頭		甕棺墓 木棺墓、大型溝、土坑		甕棺、鉄製品、石製品 弥生土器、土師器		

玉名市文化財調査報告 第8集

東南大門遺跡

市営住宅南大門団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成12年3月29日印刷

平成12年3月31日発行

編集発行 玉名市教育委員会
〒865-0051 玉名市繁根本88-1

印刷 株式会社 有明印刷
〒865-0022 熊本県玉名市寺田123-1
TEL0968-73-2055

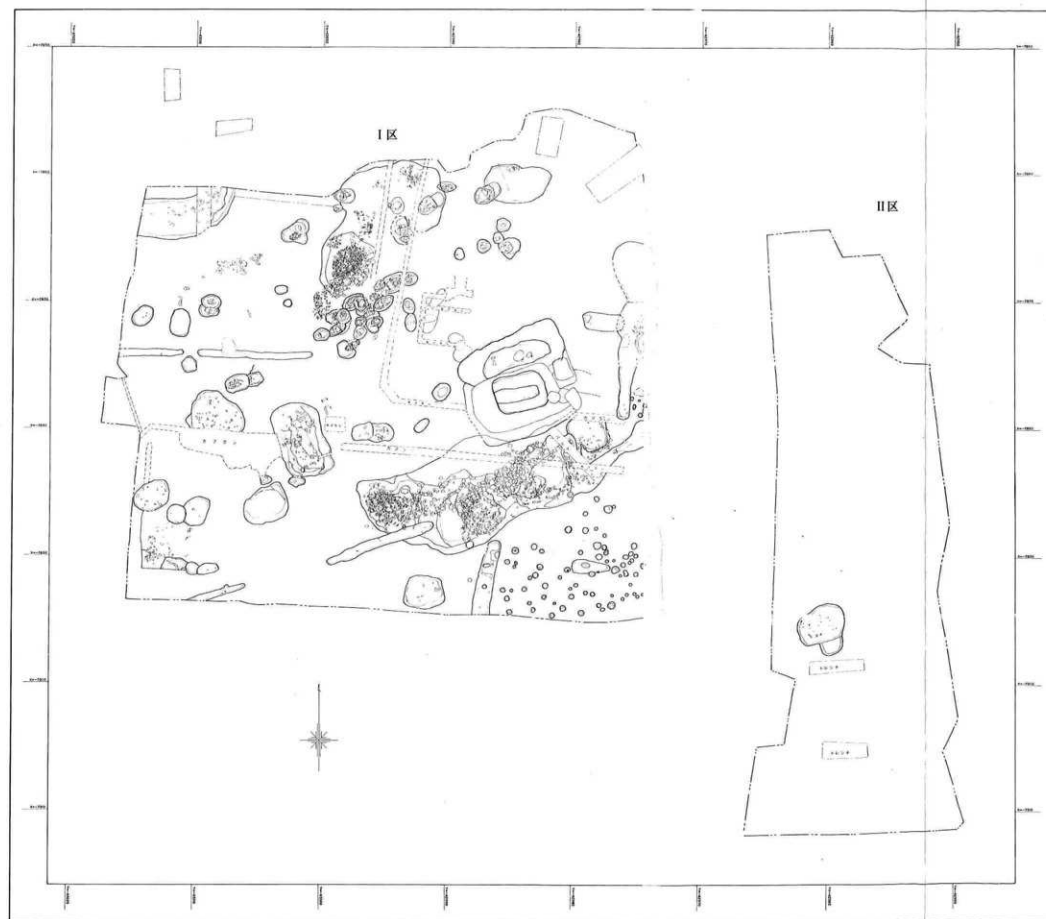


Fig. 3 東南大門遺跡遺構配置図 (全体)

S=1/300



Fig. 4 調査I区遺構配置図

S=1/150

